

ENCOUNTER

出会いの広場 No.12 1991.1

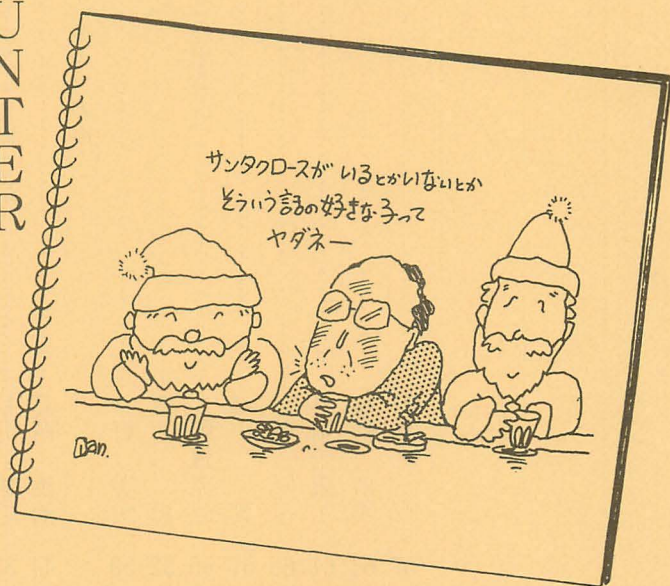
人間関係研究会20周年記念特集号

-
- 特別寄稿
 - 自由の道……………アンドレ・オウ
 - 人間関係研究会20年の歩みと課題……………畠瀬 稔
 - 私たちの問いなおしと展望
 - エンカウンター・グループ・フォーラムを終えて…増田 實
 - 研究ノート
 - 現代におけるエンカウンター・グループの
社会的意義……………小柳 晴生
 - 出会い百選(9)
 - 『出会いと歩む』……………畠瀬 直子
 - 連載・第3回
 - ゲシュタルト・セラピーの訓練を
受けにいていた時の話……………福井 康之
 - 『夢』を巡り歩いて(2)……………葛西 俊治
 - 20周年記念・メッセージ・スタッフの声
 - 思い出すままに……………幸野 美雪
 - エンカウンターと研究会と私……………渡辺 忠
 - エンカウンター・グループとの出会い……………大須賀克己
 - 研究会20年の中で……………増田 實
 - 白い蝶……………見藤 隆子
 - 滝体験が残してくれたもの……………早川千恵子
 - 人間関係研究会とのかかわり……………穂積 清美
 - 私と人間関係研究会……………野島 一彦
 - おしらせ・情報・あれこれ
-

目次

出会いの広場
No. 12

ENCOUNTER



●特別寄稿

自由の道……………アンドレ・オウ 1

■人間関係研究会二十年の歩みと課題……………畠瀬 稔 6

■私たちの問いなおしと展望……………増田 實 17

■エンカウンター・グループ・フォーラムを終えて……………増田 實 17

■研究ノート……………小柳 晴生 24

■現代におけるエンカウンター・グループの社会的意義……………小柳 晴生 24

■出会い百選(9)……………畠瀬 直子 30

■『出会いと歩む』……………畠瀬 直子 30

■連載・第3回……………ゲシュタルト・セラピーの訓練を 30

■ゲシュタルト・セラピーの訓練を……………受けにいていた時の話……………福井 康之 35

■『夢』を巡り歩いて(2)……………葛西 俊治 44

■20周年記念・メッセージ・スタッフの声……………幸野 美雪 50

■思い出すままに……………渡辺 忠 52

■エンカウンターと研究会と私……………大須賀克己 55

■エンカウンター・グループとの出会い……………増田 實 57

■研究会二十年の中で……………見藤 隆子 60

■白い蝶……………早川千恵子 61

■滝体験が残してくれたもの……………穂積 清美 64

■人間関係研究会とのかかわり……………野島 一彦 67

■私と人間関係研究会……………野島 一彦 67

■おしらせ・情報・あれこれ……………野島 一彦 67

■特別寄稿

自由の道

アンドレ・オウ, Ph. D.

(小野 修 訳)

今、信じられないような力の波が、地球を覆いつつある。大小の国々の海岸に碎ける巨大な波のように、自由へのうねりが全世界に変革をもたらしつつある。ソ連の北端から東欧とバルカン諸国を縦断し、アフリカ大陸を横断して東南アジアやチベットといった極遠地域まで、人々は一体となった。人々は共に専制と抑圧からの独立を宣言した。そして人々は、拘束から逃れ自由でありたいという人間の希いが全世界的に充たされていないことを、实际行动によって劇的に表現してきている。

最近、私はパリである男と話をし、この体験を分かち合った。彼は第二次世界大戦中、東ドイツでの戦争で捕虜となり、ひどい心身の虐待に苦しんだ。彼は語った……

“恐ろしかった。たくさんの友人が自殺した。私達は残飯を求めて争い、虫を食べ、とりわけ精神的拷問は筆舌に尽くせないものでした。”

彼は何とか生き延び、後に解放はされたが、それでも自由ではなかった。彼は私に話した……

“私は非常に抑圧されていました。私の愛する、優しく忍耐強いセラピストを見つけるまでは。私が自分の怒りと苦しみの覆いを取り除いて、それらの感情を解放するのを、彼は助けてくれたのです。彼が助けてくれたお陰で、私を捕らえた人達を私は許すことができ、自由人としての新しい人生を始めることができました。”

それから彼は私の方を向いて、“私の友人の何人かは、そのように幸せではありませんでした。四十年経った今でも、彼等はまだ過去の捕らわれ人なのです。彼等は苦しい記憶から逃れられないし、彼等を苦しめた人達を許さないでしょう。彼等の現在の拘束は、いくつかの点で収容所の拘束よりもひどいものだと思います。”

この短い話の中で、私の友人は深遠な真実を明らかにした……

最悪の拘束は、鋼鉄とコンクリートの壁によるものではなくて、私達の誰もが自分自身の心の中に描き、抱き続けられる自縄自縛である。これは全てのセラピストが直面する難問である。成功と富の蓄積にもかかわらず、多くの人々が畏にはまって自作の牢獄につなされるのである。そのような人達は、幼児期の心の傷、与えられないための愛情の不足、苦痛と被虐待の体験というハンディキャップを背負っているのである。

あるビジネスマンは私に語った……

“私がどんなことをしても、どうしても父の要求には達しなかった。私は決して父を喜ばすことができなかったが、それでも努力し続けたいといけなかった。いつかきつと父が私を認めてくれ、私の努力は報われるだろうという希望をもって。”

また、三十六才の既婚女性はいう……

“私の母にとっては、私は未だに子どもなのです。母は不安と罪悪感で私の生活を縛るのです。母は私の結婚生活をダメにしているのです。私は母のすることに腹が立ちますが、母には逆らえないのです。”

これは純粹な自縄自縛で、真実であるだけに悲しい。この人達は、自分の生活をコントロールする自由をもっていない。彼等は他の人達の願いや要求に従って生きている。彼等は犠牲になっているとは感じて、自分の牢獄から逃げるために内部のさまざまな力を活性化することはできないとも感じている。怒りは常にいる同伴者であり、不安は彼等の日常食である。これらの表面的感情の底には、愛しえないのではないかという基本的な不安と、愛されえないのではないかという不安がある。

カール・ロジャースはこのような人達を、次のように描いている。『多くの人達は、彼等があたかも罫にかかって深く暗い牢獄に入っているかのように感じていると考える。孤立無援を感じれば、彼等はただ叫ぶしかないのである。』外に誰かいませんか？誰か聞えませんか？『カールは、』はい、私がここにいますよ。私にはあなたの叫び声が聞こえていますし、私はあなたのことを心配していますよ。あなたが牢獄からの出口を見つけ出すのを、私がお助けしますよ。』と、応えることができるのは、セラピストとしての課題であると同時に名誉でもあると感じたのである。

これがカールのパーソンセンタード・アプローチの核心である。問題の分析をしない、尋問しない、叱責しない、判決しない、助言しない。暗やみから明るみへの、抑圧から自由への、不安から愛への旅の道連れを申し出る、開かれた心をもった愛情ある人にすぎないのである。

カール・ロジャースは、自由は全ての人の成長の基礎であることを熟知していた。彼のパーソンセンタード・アプローチは、存在の自由 (freedom to be) に最高の価値を置く。

自らの選ぶあり様で存在する全ての人の権利を尊重し、そしてこの選択を評価せずに受け容れる。この人間の尊厳の尊重が、成長をもたらす信頼の風土をつくり出す。

しばらくの間カールの身近で働いてみて、彼が稀にみる天賦の才に恵まれていることがわかり、私は羨ましかった。私とは違って、カールは彼の過去の囚われ人ではなかった。彼は多くの心の痛みや苦悩を体験してきていた。彼は多くの個人的、職業的困難に直面してきていた。彼は彼の意見の故に、傷つけられ、拒否され、批判されてきていた。しかし、これらの苦痛に満ちた彼の人生の側面は、何か黒雲のように彼に影を投げ続けるということとはなかった。彼は自分の過去と折り合いをつけた。その結果、彼はさまざまな形の成功を体験し、それを楽しむことができた。彼は自分が尊敬され、賞賛されることを、誇示することなく認めることができた。彼は自然な謙虚さがあり、勇敢ではあっても無謀ではなかった。彼は過去を通して成長してきていた、彼は愛において成熟してきていた。こうして彼は、過去の不安から自由になり、自由に自分自身でいられるようになり、見せかけやお座なりでない自分の愛と関心を他の人達が自由に求めるのを許すことができた。カールが、黙ってはいいても涙が彼の頬を伝い落ち、いかに彼が他の人の苦しみへ一個の人間として反応しているかを見たとき、私は一度ならず、深く心を打たれたのであった。

セラピストの内側の状態とセラピーとの関係がどんなに密接かを、私が知るのをカールは助けてくれた。セラピストは、クライアントが自由になるのを援助するために、自分自身の内部の不安や心配から開放されていなければならない。初期の頃、私は自分のクライアント達から愛され、良いセラピストとみられたいという大きな欲求を抱いており、これらの欲求に関連した不安で、時には私は純粹ではなくなっていた。援助を受けて自分の不安を解放できたときにのみ、私はクライアントの内なる痛みと不安を聞くことができた。

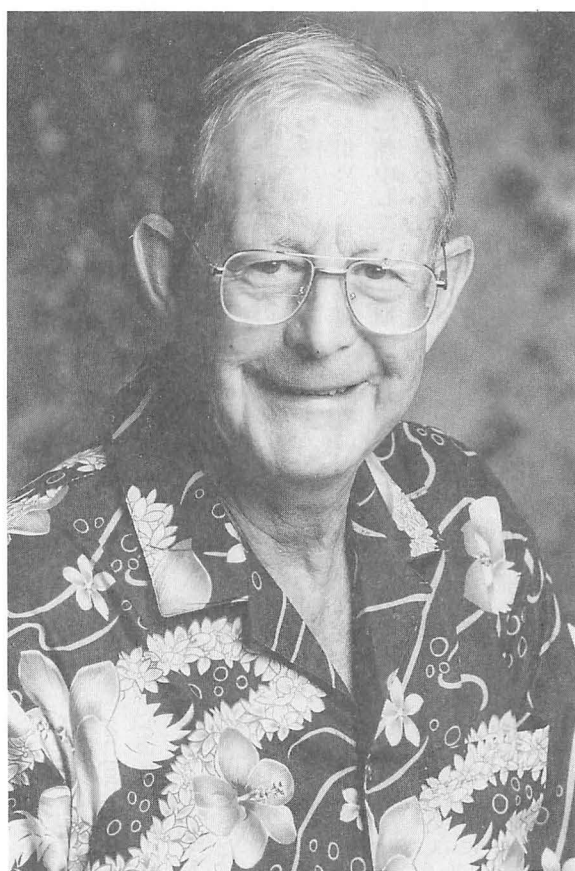
これらの発見が、私が他のセラピスト達に提供するワークショップの元になった。私はワークショップを世話人のためのお世話 (Caring for the Caretaker) と呼び、それらは不安から自由になる道を共に探求するための、私達にとっての素晴らしい機会であった。私達は、自分達の身体や情緒が変化するにつれて、それらに耳を傾けることを学んだ。私達

は自分達自身と他の人達を育てる方法を発見した。私達は、笑いを分かち合う瞬間に不安が軽減されることを発見した。深呼吸演習と二、三分の静かな黙想によって、私達のストレスは軽くなり、私達の心を開くことができた。配慮を示す小さなしぐさ、肩にまわした腕、あるいは抱き締めが、私達の顔に微笑をもたらし、私達の内なる自我に温もりをもたらすのである。学んだ大きなことは、私達の発見した事がらは、愛することー私達自身を愛すること、他の人達からの愛を受け取ること、他の人達と愛を分かち合うことーにおいて、実に小さな教訓だということであった。私達自身の愛が増えるにつれて、不安は消失し、相互援助によって私達自身の牢獄の扉とクライエントの扉を開く方法を発見した。

パーソンセンタード・セラピストであることが、ずっと私の人生の最大の課題である。一人一人のクライエントが新しい挑戦をしてくるので、それは常に困難なことである。いつも私は、自分の心と胸の内にある破片を点検し、自分自身の問題や心配の静止状態を取り除かなければならない。牢獄の壁の中から助けを求めて叫び声を上げている、苦しみのなかにいるその人に、純粹に反応できるように。私は真実の言葉を肚から出したい。"はい、私が外にいますよ。はい、私はあなたの叫びを聞いていますよ、だから私はあなたを心配していますよ。"と。それから私は、私の無条件の愛を必要としているこの人に、私の全霊 (whole heart) でもって傾聴できるようにしたい。

数カ月前に、東欧の収容所から解放された一人の男がチェコスロバキアの大統領に選ばれた。合衆国議会への演説の中で、彼は真の自由は外部のできごとから生じるものではないということ、私達に想い起こさせてくれた。Vaclav Havelは、"この人間世界の救済は、人間の心のなか以外のいずこにもありはしない。"と、そのことをわずかの言葉で雄弁に要約したのであった。

お世話をするセラピスト (caring therapist) になるのは極めて困難かもしれないが、それはまた素晴らしい報酬をもたらしてくれる。囚人だった人が自分の鎖を傍に投げ捨て、牢獄から歩み出てきて、愛によって獲得してきた自由の中で喜ぶ様を見るときという体験ほど、満足がえられ、謙虚になれるものを、私は知らない。



■著者略歴

オウ博士は、1968年C. ロジャーズを中心に設立された“人間研究センタ（CSP）”の創立メンバーの一人で、現在はハワイを拠点に、大学の講師、地域や企業のコンサルタントとして、組織開発や個人カウンセリングの分野で活躍されており、今年68歳になられます。1978年と79年には、当研究会の清里プログラムのゲストスタッフとして来日され、PCAについて貴重な示唆を得ました。今年7月に4度目の来日をされる予定です。

人間関係研究会二十年の歩みと課題

島 瀬 稔

一、研究会の始まり

カール・ロジャーズが「集中的グループ経験は、恐らくは人間関係分野における二十世紀後半の最大の発明であろう」として、ベリック・エンカウンター・グループにコミットしていたことは、多くの人たちの関心を集めてきた。好運にも筆者は、ロジャーズが最も小グループ経験に熱中していた時期に留学することができたので、帰国後多くの方々に関心をもって頂いた。そして、主として関西地区の方々の希望に応じて、小規模のワークショップやセミナーを数回行った。その過程で、全国的規模でのワークショップを開催しようとの案がもち上った。その時、中軸になってくれたのが、それまで「生徒中心授業研究会」を共にしてきた、東山紘久、谷口正己、中村良之助さんであり、それに村山正治さんと私たち夫婦の六人で出発することにした。

この時、主催団体の名称をどうすべきかと考えた。C S P (Center for Studies of the Person) にならうと、「人間研究会」とする

と、哲学的、抽象的なイメージを与え、漠然としすぎないか。そこで Human Relations Training に対応して「人間関係研究会」を名乗ることにした。

そして、この研究会は、エンカウンター・グループというアプローチを中心として、人間と人間関係の問題の根源に迫ると同時に、従来の不適応対象のニュアンスの強い「カウンセリング」のイメージを越え、一般人、家族、学校、地域、組織などの人間関係改善と成長促進という、広範な領域を想定していた。

このようにして、一九七〇年八月十日から二十一日の、土曜と日曜を除く十日間の通い方式で、京都女子大学を会場に初めて大々的にエンカウンター・グループ・ワークショップを開催したのが本会の始まりである。その時、北海道から九州までの各地から参加された人たちは、それぞれ宿所を自分で探さねばならなかった。その不便を解消するために以後宿泊形式を採用し、二十四時間から五泊六日に至るさまざまな期間のワークショップを提供してきた。そのう

ち日本人には少なくとも三泊四日は最低必要だということで、現在のようなプログラムを編成してきたのである。

二、組織のモデル

私は一九六七年三月から六九年三月までの二年間、カール・ロジャーズのいたWBSI (Western Behavioral Sciences Institute) に留学していたが、その間の一九六八年秋にCSP (Center for Studies of the Person) が設立された。それは、一人一人を個人として尊重し、上下関係を作らず、相互に研究と実践を刺激し、援助し合う、新しい、超民主的な組織をめざすものであった。それは、ロジャーズの著作やロジャーズ自身を通して折につけ知ってきたシカゴ大学カウンセリング・センターのパーソンセンタードの運営そのものの再現をこえる新しい発展とも思われた。

WBSIそのものも、当時としては非常に民主的組織であったが、ベトナム戦争後半の米国社会にもたらされた財政的困難は、一部管理者と一般研究所員の間で深刻な対立を生みだした。この小さな研究所は、政府や民間委託のいくつかのプロジェクトから運営されていたが、財政緊迫はプロジェクト委託研究費からの管理運営費へのカット率をめぐって、組織そのものの「権力関係」の対立を生みだした。そして、WBSIの中の一プロジェクトであったロジャーズ・グループが、全くの理想を掲げて独立したのがCSPであった。

CSPで学んだことは、パーソンセンタードの哲学を組織運営に生かすことである。それは「権力支配」がなく、形式に縛られず（規約は最小必要なものに限った）、常に本音で語り合い、お互いを尊重しながら、変化に開かれ、新しい発展を支え合うような組織を作ることであった。

その組織づくりの経過を眼のあたりに見た私は、日本に帰国した

ら、ぜひこのようなパーソンセンタードの組織を作りたいと願った。残念なことに、CSPと異なり、それぞれ違う地域の、別の職場に属している。そこで、ワークショップを協同して行う実践団体としての研究会を作ることにした。最初は、京都のわが家でミーティングをもっていったが、スタッフの増加と、全国各地区組織の誕生で、スタッフ・ミーティングは各地に移動することになった。

大体、正月の二、三日を当ててスタッフ・ミーティングをもつ。そこで次年度のプログラムの大綱や各種の課題を決定する。さらに、夏季ワークショップを中心プログラムとして、できるだけスタッフの多くが参加することにする。お互いにコ・ファシリテーターとなってグループを促進することで、スタッフ相互の研修と信頼関係とチームワークを醸成してゆくことができる。われわれの組織は、あくまでもエンカウンター・グループが基本になっているという認識を相互に確認し合ってきた。

初期には、多数の者がCSPへ出かけて、自分の眼で彼の地の実情にふれ、ワークショップを体験的に学んで帰国したが、これが我々の運営への参考となり、内部的な更新となったように思う。現在までにCSPへ留学した日本人の殆んどは私たち研究会のスタッフである。即ち、筆者らのあと、柘植明子（一九七〇年）、村山正治（一九七二〜七三年）、東山紘久（一九七四〜七五年）、多田治夫（一九七五〜七八年）、足立明久（一九八二〜八三年）の諸氏がそれぞれ半年から一年半CSPへ滞在している。さらに、CSPのスタッフが主催しているラホイア・プログラム（エンカウンター・グループ・ワークショップ）へは、スタッフの殆んどが参加したのである。

代表の一年交代制も我々組織のユニークさであろう。事のなりゆきから、一九七〇年から七四年の五年間は私が代表をつとめた。多くの組織は、長期間にわたって代表者（会長、理事長、など）の交

代がないのを常としているが、我々の研究会は全スタッフが平等にコミットする組織を目指してきたので、一九七五年から各スタッフが代表を順番に持ち回ることにした。

代表の仕事は、組織として対外的に代表者としての責任をとり、内部的には研究会運営の議長役を果たすことである。

そのうち、次期代表を一年前に決めておき、現代表を一年間サポートする、そして次の一年を代表としてつとめるというルールに発展した。一九八五年以後は、任期一年では余りに短かすぎるというので、任期を二年に変更して現在に至っている。

今日までこの研究会がさしたる混乱もなく発展してこれたのは、中堅スタッフの多くが代表を経験し、組織のあり方と運営にある程度の共通認識をもち、一人一人が組織にコミットしてゆくようなあり方を醸成できたことがひとつの大きな要因になっていると思う。

しかし、危機が全くなかったわけではない。一九七六年のスタッフ・ミーティングは、正月のミーティングだけでは意思疎通が困難になり、組織の亀裂を回避するために、五月連休に再度三泊四日の集会をもった。

その結果、それまでは研究会全体としてプログラムと会計決算を行っていたのをやめて、最初は地区毎の独立採算制へ、さらには各プロジェクト（プログラム）毎の独立採算制への移行を決定したのである。そして、スタッフは、一年一回発行の共通プログラムに掲載したプログラム数に応じた製作費と、平等分担のスタッフ費を分担すれば最低の義務は果せることになった。その上で、本会のプログラムにも部外者と自由に提携してよいし、独自の創意工夫で如何ようにもプロジェクトを運営してよいという、完全なスタッフ自律の原則を決定したのである。

この結果は、長期的には各プロジェクトの創意工夫と強化が進み、全体レベルが向上したように思う。それまでは、経営状態のよくな

いプロジェクトを全体で支援する態勢をとったり、各プログラムがぶつからないように日程を調整したりしていたが、これら一切を自由化する方向へと進んでいったことは、活力を与えたように思う。反面、この結果からだけではなからうが、地区によってはワークショップ開催を断念したり、研究会から去ってゆく人も出た。

このように書いてくれば、私が常に中心にいて、大きな役割を演じてきたかのように受けとられるかも知れないので、この研究会はスタッフ一人一人がそれぞれに十分な貢献をしながら協力し合ってきた二十年であったことを強調しておきたい。そして、私の個人的感想をつけ加えることが許されるならば、初期、谷口正己さんが、金銭感覚に乏しい我々の研究会運営を、赤字を出さずに経営する点で力となってくれたこと、渡辺忠さんが、夫人の協子さんが事務局を担当してくれ始めたのを機に、二カ月一回の「スタッフ通信」を発行してくれ、ともすれば疎遠になりがちなスタッフ間の連絡パイプ役をかってくれていること、大須賀発蔵さんが、スタッフ・ミーティングが混迷する度に必ず皆の納得する発言をして救ってくれ、スタッフ全員の心理的安全感をもたらす大きな支柱として存在してくれていること、などである。

このように挙げてゆけば、スタッフ一人一人の貢献を次々と語らねばならないので、以下は割愛させて貰うが、毎年のスタッフ・ミーティングには殆んど全員が多忙の中を万障をくり合わせて参加し、全員協力の運営を維持してゆくことが出来ているのが、何よりも本会二十年を支えた賜物と云えるであらう。

三、事務局

一九七〇年から七八年までは、幸野美雪さんに事務局を担当して頂いた。幸野さんは、現在の京都画壇の祖と云われる幸野楳嶺（ば

いれい)のお孫さん豊一氏の夫人。御主人も日本画家として御多忙になったため、一九七八年に退任された。次の事務局担当者が見つからないので、畠瀬直子が一九七九年〜八〇年の二年間、ピンチヒッターとして担当した。一九八一年から、渡辺協子さんをお願いして、現在に至っている。

本会が現在まで維持、発展できた大きな理由のひとつは、事務局に恵まれたことだと思う。本会のように、各地区に散在しているスタッフ、ワークショップを初めてとして各種の事業や連絡を行うには殊更に事務局の重要性が大きい。正月のスタッフ・ミーティング、年一度の殆んどのスタッフが参加する中心プログラム、各種の発行物と通信、それに毎日のようにワークショップその他の情報を求める電話への応待など、事務局は平素の我々研究会の代表窓口を兼ねているのである。

もし、他団体が行っているように、ビルの一室を借り、専属のフルタイムの事務員をおくとしたら、我々の主催するワークショップは現在のような低廉な研修費では行えないであろう。かといって、情報化時代の今日、電話一本で情報を求められる事務局なしには、年間を通じてのワークショップその他の事業遂行には支障をきたすであろう。我々研究会の発展の陰には、想像以上に事務局の意義が大きい。

四、ワークショップ数の拡大

年表に見られるように、一九七〇年と七一年は、一〜二のワークショップを開催した創始期と云えるものであった。

七二年〜七六年にかけて、ワークショップ数は急速に増し、殊に七五、七六年は年間十四、五に達している。開催場所も全国各地にひろがり、しかも新しい名称を冠したワークショップ(例えば、相

互啓発、集中的イメージ・エンカウンター・グループなど)が次々に登場している。この時期を拡大・発展期と云ってよいであろう。

一九七七年から現在までは、年間二〇〜三〇のワークショップが安定して開催されるようになった。この時から始まった新しい企画としては、二十三時間エンカウンター・グループ(以下EGと略す)、非言語感受性技法、フォーカシングEG、教育のためのEGと人間中心の教育研修会、働らく人のためのEG、秩父巡礼EG、気功とEG、ファミリー・グループなど、アプローチもより具体的になり、現実の課題に適合した方向に分化している。安定・分化期と云ってもよからう。

五、ファシリテーター養成とスタッフ推せん

エンカウンター・グループの普及と発展のためには、有能なファシリテーターを多数養成することが必要であることは、初期から我々の常に意識してきた課題であった。

ファシリテーターになるためにはどうしたらよいか、という問合せや希望にも時に接している。それに応える形で、一九七四年、EGセミナー(京大薬友会館、毎週土曜日十回開催)、一九七五年、EGセミナー(大阪・福徳研修所宿泊)、一九七八〜八二年、山梨県清里での研修セミナー(一九八二年には十名のトレーニーが一般募集した四〇名の参加者グループを促進する経験をして貰った)、八三〜八四年には、推せんされたトレーニー・スタッフ、我々スタッフとコ・ファシリテーターとなってグループを担当したなど、現在まで試行錯誤をくり返しながら、ファシリテーター研修の機会を提供してきた。

これらの企画が現在立ち消えとなっているのは、ファシリテーター養成は一朝一夕では出来ないことを痛感してきたからである。

そして、公募した場合、応募者全員が必ずしもファシリテーターとして適任者ばかりとは思えなかった。そこで、我々スタッフが適任と感じた人を推せんの方がよりよいと考えるようになった。ファシリテーター養成は一時的研修で行うよりも、適任と感じた方に我々スタッフと共同でグループを促進する経験に参加して頂く仕方で、長期にわたって研修を深めて頂く方法がより妥当であると考えられるようになったのである。

初期の拡大・発展期には、「グループ」の急速な拡大に呼応して、安易にスタッフとして推せんしたために、短期間に挫折して、姿を消していった方もおられた。我々はこのような事態に大いに反省を迫られた。そのような苦い経験の中から、一九八一年のスタッフ・ミーティングで、スタッフ推せんの基準として次の五ポイントを認し合った。

- 一、現スタッフの誰かと共同で活動した経験をもつこと。
- 二、ひとりで、難しいと思われるグループを維持していった経験をもつこと。
- 三、現スタッフの五名以上からよく知られていること。
- 四、グループをともしたメンバーが、その人を「評価している」こと。
- 五、スタッフ・ミーティングに推せん後、一年後の会議で合意すること。

この五ポイントは現在でも生かしている。我々研究会は人的資源だけで成り立っており、相互の信頼関係を最重要事としているので、幾多の経験から生まれたこの基準を大切な合意事項としているのである。

*

六、外部への伝達

我々の研究会活動をアピールし、情報を提供するものとして、一年一回のプログラム作成を全員が協力して行ってきた。当初は色々なスタイルが工夫されていたが、一九八三年から現在のようなB5一冊綴じの小冊子に、年間ワークショップのあらましと刊行資料などを盛る形式にした。これは、毎年スタッフの一人が担当し、編集、印刷屋との交渉、発送までの責任をもつことにしている。

今ひとつ「人間関係研究会資料」という小冊子をNo.12まで発行している。一九七〇年のワークショップ時、体育室を借りて全体会の形で「身体接触を伴う人間関係促進の技法」を参加者に経験して貰った。当時、これは新鮮な経験として迎えられ、多くの方から「ぜひマニュアルが欲しい」と要請された。それで、関心ある人々のための参考にする形で、「人間関係研究会資料」という形で発行したのが始まりである。その後、この分野の資料を補う目的で、次々と資料を発行してきたわけである。この資料刊行は、創刊以来香川の小野修さんが担当している。

また、一九七〇年のワークショップ参加者のフォローアップとその後の交流促進のために「ニュースレター」を発行し始めた。一九七一年から一年二回の割合で、島瀬直子が担当した。その後、編集者は一九七五年小野修さんに、さらに一九七七年、木村易・増田實の御兩人に交代した。しかし、一九七七年末、No.13をもって途絶えてしまった。すでにワークショップが全国各地で開かれていたので、個々の会場への参加者間の連絡機能としては「ニュースレター」は適切なものではなくなっていた。無料配布誌というものの限界もあった。町には各種の情報誌があふれ、雑誌の創刊・廃刊がめまぐるしく交代する時代に入っていた。このような情報誌時代に、エン

カウンター・グループを中心とした人間関係分野に関心をもつ方々にミニコミ誌として登場することは大へん意義深いものがある。

しかし、定期的に編集し、発行を継続してゆくにはよほどのエネルギーと才覚を必要とする。丁度、新しくスタッフとして加わった小柳晴生さんが編集をかって出してくれた。このようにして「ENCOUNTEER出会いの広場」誌を、一九八五年から始め、小柳夫人欣子さんの協力を得て、現在№12まで刊行してきた。この雑誌が今後どのように発展し、成長してゆくか、本会の軌跡が大きく残るとすれば、そのひとつはこの雑誌の成長に表現されるのではないかと、私は個人的に考えている。

今ひとつ、本会の果たした対社会的イベントは、一九八三年春、カール・ロジャーズ博士とナタリー・ロジャーズを招いて開いたワークショップである。五泊六日のワークショップに百八十人の応募者があったが、ワークショップの内容を考えると、六〇人にしぼらざるをえなかった。ロジャーズさんは、中日に五百人の参加をえた一日公開ワークショップの両者とも、八十一才の老齢とは信じられぬほどの活躍をしてくれた。この企画は畠瀬直子が提案し、企画運営の中心になったが、スタッフ全員の一致協力が一大行事を成功裡に導き、ロジャーズ父娘にも満足頂いたことは一同の大へんな喜びであった。四年後の一九八七年二月四日にロジャーズさんが亡くなられたことを思うと、よい時に招いたものであった。このワークショップの詳細は「カール・ロジャーズとともに——カール&ナタリー・ロジャーズ来日ワークショップの記録——」(創元社、一九八六年)に記載されている。

七、今後の課題

二十年をふり返りながら、まだ果していないいくつかの大きな課

題に気づく。

第一は、国際的エンカウンター・グループの試みである。昨今、日本国内でも国際化の必要が常に叫ばれるようになった。筆者のラホイア・プログラム参加者の調査研究からも、「このような草の根的なワークショップが日本で出来ないものであろうか」という声が多くの人から聞かれた。(注1) 日本に多くの外国人が滞在するようになり、しかも日本人や日本文化に大きな戸惑いと摩擦を経験している様子を折につけ耳にするようになった現在、日本国内での外国人を含むグループ経験はぜひ企画したいものである。

第二は、組織体へのアプローチである。地域へのアプローチに関しては、村山正治、尚子夫妻を中心とした福岡人間関係研究会の試み(注2)、香川県での小野修さんの登校拒否児の親への試み(注3)、茨城県商工経済会人間関係研究所でのとり組みなどは、注目すべき成果をあげている。組織としては、大須賀発蔵さんの会社は早くから人間中心の経営を志しておられた。しかし、日本全体を見回すと、多くの学校、会社、官庁は大へん旧態依然とした所が多いし、むしろ昨今は管理強化、経営合理化でますます非人間化してきた組織が多いように見受けられる。我々の実践をもっと拡大、伝達してゆくことが大きな課題である。

第三は、日本におけるパーソンセンタード・アプローチに関する国際会議の実現である。一九八二年にInternational Forum of the Person-Centered Approachがメキシコで開催され、以後三年毎に開かれてくる。一九八六年にはAssociation for the Development of the Person-Centered Approachの第一回がシカゴで開催され、以後毎年開催され、同時にジャーナル「Person-Centered Review」(一年四冊発行)が刊行され始めた。一九八八年には、International Congress of the Client-centered & Experiential Psychotherapyの第一回大会がベルギーで開催され、以後三年毎の開催が予定されている。

このように、アメリカおよびヨーロッパを中心に、ロジャーズが蒔いた種は着々と芽を吹きつつあるが、日本への誘致はまだ受入れ準備の声も出ていない状況にある。そのような声は先方から上りつゝあると聞か、一九九〇年代後半にはこのような国際学会を実行できらるまでに漕ぎつけたものである。

他にも果したいことは一杯あるが、ここにあげた第一、第二、第三の課題は、近い将来ぜひとも達成してゆきたいというのが、次の「人間関係研究会三十周年」に向けての筆者の願いである。

人間関係研究会20年の歩み（年表）

年	プログラムと主要行事		本会刊行物	スタッフの異動		関連事項
	新プログラム、特記事項など	プログラム数		新入・退会	代表	
1970 (昭45)	・最初の全国公募による夏季WS開催。 8/10〜8/21、土、日を除く10日間、9時〜17時の通い方式。京都女子大にて。募集40、参加33。	1	・人間関係研究会資料No.1、2、3発行。 ・News Letter No.1、2発行。 (編集、畠瀬直子と英文)作成	(最初のスタッフ) 畠瀬稔、畠瀬直子、東山紘久、村山正治、中村良之助、谷口正己	畠瀬 稔	・9月、福岡人間関係研究会発足
1971 (昭46)	・札幌会場7/21〜7/26(5泊6日)募集33、参加13〜4名(?)、1グループにて実施。 ・摩耶山会場8/7〜8/12(5泊6日)募集51、参加52、4グループに。 この年初めて宿泊形式をとり入れ、夜セッションを重視した。	2	・News Letter No.3、4発行。 ・人間関係研究会資料No.4、5発行。	(新スタッフ) 小野修 小林勝司	畠瀬 稔	
	・摩耶山会場7/29〜8/3(5泊6日)募集52。 ・小WS4回。いずれも2泊3日。摩耶山9/22〜9/24(2グループ、26名募集)、京都3		・(新スタッフ) 大須賀発蔵 清水信介	畠瀬 稔	①1/8〜9(1泊2日)、6/3、7/1	

(注1) 畠瀬稔『エンカウンター・グループと心理的成長』(創元社、一九九〇年)の第七章「エンカウンター・グループ経験における日米比較研究——ラホイア・プログラム参加者の追跡調査を通して——」参照。

(注2) 村山正治、村山尚子「エンカウンター・グループによるコミュニティの創造——福岡人間関係研究会20年の軌跡・その1、その2——」(日本人間性心理学会第九回大会抄録、一九九〇年)参照。
(注3) 小野修「問題をもつ子どもの親たちのグループ——臨床家のためのマニュアル——」(人間関係研究会資料No.11)

1976 (昭51)	1975 (昭50)	1974 (昭49)	1973 (昭48)	1972 (昭47)
<p>・夏季WS、神戸・摩耶山、7/28〜8/2 (5泊6日)、募集60。</p> <p>・新名称のEG輩出。主なものは、ジェネラルEG、EGセミナー(宿泊)、高校生と大人のグループ、集中的イメージEG、相互啓発EG、青年のEG、夫婦のためのEGなど。</p> <p>・夏季WSを清里・清泉寮に移す。8/14〜8/19 (5泊6日)、60名募集</p> <p>・新名称EG</p> <p>TAによるEG</p> <p>学生のEG</p> <p>禅体験をともなうEG</p>	<p>・夏季WS、神戸・摩耶山、7/28〜8/2 (5泊6日)、募集60。</p> <p>・新名称のEG輩出。主なものは、ジェネラルEG、EGセミナー(宿泊)、高校生と大人のグループ、集中的イメージEG、相互啓発EG、青年のEG、夫婦のためのEGなど。</p> <p>・夏季WSを清里・清泉寮に移す。8/14〜8/19 (5泊6日)、60名募集</p> <p>・新名称EG</p> <p>TAによるEG</p> <p>学生のEG</p> <p>禅体験をともなうEG</p>	<p>・夏季WS、大津・西教寺、8/5〜8/10 (5泊6日)、募集60。</p> <p>・小WS3泊4日(茨城2、広島1)</p> <p>・2泊3日(広島1、摩耶山1、香川1)</p> <p>・エンカウンター・グループ・セミナー(5/7月に10回、京大薬友会館。スタッフ、足立、島瀬稔、直子、金藤、谷口。)</p>	<p>・夏季WS大津・西教寺、8/6〜8/11 (5泊6日) 募集60</p> <p>・小WS3泊4日を3回、2泊3日を2回。</p> <p>・西教寺2回、摩耶山、香川県青年センター、水戸各1回。(初めて近畿圏以外でWSをもつ)</p>	<p>回、4/28〜4/30、5/5〜5/7、11/3〜11/5 (各1グループ、13名募集) この頃より定員を上回る。</p> <p>・Dr. Martin Lakin (デューク大学) を開む</p> <p>・ミーティング、京大薬友会館(9/16)</p>
14	15	7	6	5
	<p>・News Letter No. 8、9発行。(No. 9より編集者小野修に交代)</p>	<p>・News Letter No. 6、7発行。</p>	<p>・News Letter No. 5発行。</p>	
	<p>(新スタッフ)</p> <p>多田治夫</p> <p>清水幹夫</p>	<p>(新スタッフ)</p> <p>北島丕、木村易、下迫和子、増田寛、飯塚銀次、岸田博</p>	<p>(新スタッフ)</p> <p>近藤邦夫、渡辺忠、中川紀子、足立明久、金藤昌吾、大須賀克己</p> <p>(退会) 小林勝司、中村良之助</p>	
村山正治	村山正治	島瀬 稔	島瀬 稔	
<p>① 1/10〜1/11 大阪・なにわ会館、5/1〜5/4 (3泊4日) 豊中・フクトク経営研究所。1月会合でまとめられず、組織の亀裂を解決するため再度集会。代表もう1年留任。</p> <p>② 本部会計での一括をやめ、地区独立採算制にした。地区として、北海道、水戸、東京、京都、阪神、北陸、四</p>	<p>① 1/11〜1/12 豊中・フクトク経営研究所</p> <p>② 代表の任期を1年制とする。初めて代表交代。</p>	<p>① 1/5〜1/6 京都・白河院(私学共済宿泊所)。スタッフ増大、プログラム数急増に伴い、初めて宿所を借りてのスタッフ・ミーティング。</p> <p>② 各地区のプログラム作成コーディネートと役割分担を決めた。即ち、(関東) 増田(中部) 木村(北陸) 北島(関西) 谷口(広島) 下迫(四国) 小野(九州) 村山(全体) 島瀬稔 (予算案) 清水、渡辺・夏季WSと小WSを一括、初めて1冊の印刷物にまとめた。</p>	<p>① 8/5、夏季WS前日、大津・西教寺</p>	
<p>・日本心理学会大会会期中に「グループ・アプローチ研究連絡協議会」を開催することになった。これが、後の日本人間性心理学会創設の母体のひとつとなった。</p>		<p>・第38回日本心理学会大会(広島)で、シンポジウム「心理的成長を課題とするグループ・アプローチ」第1回開催。以後3回まで毎年継続する。</p> <p>・日本マネジメント協会主催のラホイア・プログラム参加ツアー募集始まる。</p>	<p>ロジャーズ(島瀬稔・直子訳)「エンカウンター・グループ」ダイヤモンド社刊(同書は翌年創元社に移る)</p>	

1981 (昭56)	1980 (昭55)	1979 (昭54)	1978 (昭53)	1977 (昭52)	
<ul style="list-style-type: none"> ・夏季WS、清里、7/31〜8/5(5泊6日)、募集60 ・(新プログラム) 「しかし」EG、ウィークエンド継続EG、EG講演と映画の会、ファミリー・グループ、EGセミナー、近藤章久氏講演と交流の集い、夢のEG、びわ湖畔プログラム。 	<ul style="list-style-type: none"> ・清里プログラム7/30〜8/3(4泊5日)、Andre Awu氏を招き「ファシリテーター及びカウンセラー研修セミナー」として開催。募集40。 ・(新プログラム) 23時間EG、非言語感受性技法を中心とするEG。 ・清里プログラム8/2〜8/6(4泊5日)、Andre Awu氏2度目の来日。募集50。 ・(新プログラム) ・フォーカシングEG、秩父巡礼EG ・清里プログラム8/3〜8/7(4泊5日)「ファシリテーター・カウンセラー相互啓発セミナー」として開催。募集40。 ・(新プログラム)教師のためのEG経験と人間中心の教育研修会、学生のためのEG。 ・清里プログラム8/3〜8/7(4泊5日)、「ファシリテーター・カウンセラー相互啓発セミナー」として開催。募集40。 ・(新プログラム)からだとの出会い、からだからの出会い——竹内敏晴さんと—— 	<ul style="list-style-type: none"> ・人間関係研究会資料No7発行。 ・News Letter ・No12、13発行。(編集者はNo12より木村易、増田貴担当に。)以後News Letterは途絶えた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・(新スタッフ) 武内信子 	<ul style="list-style-type: none"> ・(新スタッフ) 飯塚銀次 岸田 博 清水幹夫 	
24	21	20	17	21	
		人間関係研究会資料 No8発行			
		(新スタッフ) 梶原伸一 安江晃太郎			
畠瀬直子	小野 修	大須賀発蔵	谷口正己	東山敏久	
<ul style="list-style-type: none"> ①1/17〜1/18有馬・有泉閣 ②・渡辺協子さん事務局担当。現在に至る。 ・「Stillだより」(2ヵ月1回)発行始まる。 ・スタッフ推せん5条件を確認。 	<ul style="list-style-type: none"> ①1/19〜1/20名古屋共済会館 	<ul style="list-style-type: none"> ①1/20〜1/21湯河原旅荘山乃(初めての関東でのミーティング) ②幸野さん退任の後を受け、畠瀬直子が'79、'80両年度の事務局を担当。 	<ul style="list-style-type: none"> ①1/7〜1/8豊中・フクトク経営研究所 ②発足以来の事務局担当幸野美雪さん退任。 	<ul style="list-style-type: none"> ①4/29〜5/1豊中・フクトク経営研究所 	<ul style="list-style-type: none"> 国、広島、九州を認めた。 ・1年前に次期代表を決め、現代表を1年間サポートすることを決定。
<ul style="list-style-type: none"> ・佐治守夫はか編「グループ・アプローチの展開」誠信書房刊。 ・国分康孝「エンカウナー」誠信書房刊。 	<ul style="list-style-type: none"> ・佐治守夫はか編「グループ・アプローチの展開」誠信書房刊。 	<ul style="list-style-type: none"> ・佐治守夫はか編「グループ・アプローチ」誠信書房刊。 	<ul style="list-style-type: none"> ・村山正治編「エンカウナー・グループ」(講座心理療法7)福村出版刊 ・ロジャーズはか映画「出会いへの道」あるエンカウナー・グループの記録——日本版日本精神技研完成、発売。 ・佐治守夫はか編「グループ・アプローチ」誠信書房刊 	<ul style="list-style-type: none"> ・村山正治編「エンカウナー・グループ」(講座心理療法7)福村出版刊 	

	1985 (昭60)	1984 (昭59)	1983 (昭58)	1982 (昭57)
<p>・この年から3年間は中心プログラムがなくなり、清里プログラムは地区の運営になる。</p> <p>・(新プログラム) グループ臨床カンファレンス</p>	<p>・清里プログラム8/5〜8/10(5泊6日)「バーンセンタード・アプローチの新しい試み」募集40</p> <p>・(新プログラム) ゲシュタルト・グループ</p>	<p>・清里プログラム8/3〜8/7(4泊5日)、「人間中心のコミュニティを求めて」募集50、fac. trainee 4名の推せん参加。</p> <p>・(新プログラム) 組織の中での「私」を考えるWS</p>	<p>・Carl Rogers/Natalie Rogers招待WS 4/30〜5/5(5泊6日)「参加者66＋スタッフ82」one Day WS 参加者50＋スタッフ。</p> <p>・清里プログラム8/1〜8/5(4泊5日)「人間中心のコミュニティを求めて」募集50。fac. trainee 6名推せん参加。</p> <p>・(新プログラム) 養護教諭のためのEG</p>	<p>・清里プログラム7/30〜8/7(8泊9日)「ファシリテーター相互啓発セミナー」10名募集と、8/2〜8/6(4泊5日)「ジェネラルEG」40名募集を統合・併用して開催。</p> <p>・(新プログラム) 実存EG、看護とEG</p>
	25	28	25	28
<p>・「Encounter」出会の広場」№3、4発行。(№3以後有料化する)</p>	<p>・人間関係研究会資料№9発行。</p> <p>・「Encounter」出会の広場」創刊、№1、2発行。(小柳晴生・欣子編集)</p>			<p>(新スタッフ) 見藤隆子</p>
<p>(新スタッフ) 早川千恵子 穂積清美</p>	<p>(退会) 足立明久 武内信子 梶原伸一 安江晃太郎</p>	<p>(新スタッフ) 小柳晴生 永原伸彦</p>	<p>(新スタッフ) 野島一彦 (退会) 岡部耕典</p>	
木村 易	下迫和子	渡辺 忠	増田 賢	
<p>①この年会合なし。再び正月に会合を変更。</p> <p>②WS中の被害事件を予防するため、プログラムに「現在治療を受けておられる方は治療者の同意を得て参加すること」の一文をゴチック活字で挿入することを決めた。</p> <p>・代表の任期を2年制に変更。</p> <p>・プログラムの定員割れが目立つ」との報告。平均参加率84・4%(スタッフだより)</p>	<p>①12/7〜12/9広島・もみじ会館</p>	<p>①1/8〜1/9金沢・私学会館 12/2〜12/4東京・芝彌生会館 (この年と翌年は、プログラム作成を早めるべく12月にミーティング)</p>	<p>①1/9〜1/10東京・国鉄高輪荘</p>	
<p>・日本グループアプローチ研究会シンポジウム 第1回開催(以後、毎年日本心理臨床学会自</p>	<p>・日本人間性心理学会第1回大会開催。</p> <p>・International Forum of the Person-centered Approach (第1回「メキシコ」)以後3年毎に開催。</p> <p>・ジェンドリン(村山はか訳)「フォーカシング」福村出版刊</p> <p>・日本人間性心理学会機関誌「人間性心理学研究」第1号発刊(編集局 九大)</p>	<p>・日本人間性心理学会機関誌「人間性心理学研究」第1号発刊(編集局 九大)</p>	<p>・日本人間性心理学会第1回大会開催。</p>	<p>・日本人間性心理学会第1回大会開催。</p>

1990 (平成2)	1989 (平成元)	1988 (昭和63)	1987 (昭和62)	1986 (昭和61)
<ul style="list-style-type: none"> 研究会発足20周年記念事業「エンカウンター・グループ・フォーラム―私たちの間、なおしと展望―」5/3～5/5(2泊3日、神奈川・伊勢崎・ニュー天野屋、30名参加。 清里プログラム8/5～8/10(5泊6日)、54名募集。 	<ul style="list-style-type: none"> 清里プログラム8/7～8/12(5泊6日)、募集40。研究会直営となり、スタッフ10名参加。 (新プログラム) 気功とEG 	<ul style="list-style-type: none"> (新プログラム) 働く人のためのEG 		
23	21	24	18	25
<ul style="list-style-type: none"> 「Encounter出合いの広場」№10、11発行 	<ul style="list-style-type: none"> 「Encounter出合いの広場」№8、9発行 	<ul style="list-style-type: none"> 「Encounter出合いの広場」№7発行 人間関係研究会資料№12発行 	<ul style="list-style-type: none"> 「Encounter出合いの広場」№5(カール・ロジャーズ追悼号)、№6発行。 人間関係研究会資料№11発行。 	<ul style="list-style-type: none"> 人間関係研究会資料№10発行 「カール・ロジャーズとともに―カール&ナタリー・ロジャーズ来日ワークショップ」の記録(創元社) 刊行
		(退会) 片山長生 山田宗良		下迫和子さん '86・12・2死去
野島一彦	見藤隆子	見藤隆子	中川紀子	木村 易
①1/20～1/21東京・西五反田・ゆうばうと ②本会発足20周年記念事業の具体化。フォーラム開催と出版準備を決定。	①1/14～1/16坂出市・瀬戸内荘 ②全スタッフがEG体験を共にすることと意志疎通が行われることを再確認、再び清里プログラムを本会直営とする。	①1/15～1/17東京ガーデンパレス	①1/9～1/11ホリデイイン・豊橋	
		①1/15～1/17東京ガーデンパレス ②「International Congress of the Client-centered & Experiential Psychotherapy」第1回大会(ヘルギー)以後3年毎開催。	・カール・ロジャーズ死去(87・2・4) ・大須賀発蔵「いのちの分けあいしもの」柏樹社刊。(第21回仏教伝導文化賞受賞) ・都留春夫「出合いの心理学」講談社刊	主シンポジウムとして(継続) ・Association for the Development of the Person-centered Approach (第1回大会、シカゴ)以後毎年開催。 ・Person-Centered Review 創刊(年4回)

私たちの問いなおしと展望

——エンカウンター・グループ・フォーラムを終えて——

増田 實

1. はじめに

一九七〇年の本会発足から満二十年が経過した。この二十年目をそのまま通過させずに、私たちの手で何らかの「表現」をしていこうということのひとつとして、人間関係研究会二十周年記念「エンカウンター・グループ・フォーラム」を開催することになった。

このフォーラムは、本会二十周年記念の他の二つの事業（二十年史刊行、記念出版）に先がけて、今年（一九九〇年）の春、本会スタッフはほぼ全員と本会に深く関心を寄せてい

る方々の参加を得て開催し、予想以上の好印象をそれぞれにもたらして終了した。

そこで、このフォーラムの概要を以下に報告的に記しておく。「私たちの問いなおしと展望」を題してはあるが、その詳細については他日を期して著わす予定である。（本会刊行資料《No.1～No.12既刊》に加えて公表したいと考えている）

2. 開催までの経緯

本会の発足二十周年が近づいた一九八八年頃から、スタッフのなかに「二十年に因んで

何かをやっては」という声がちらはら出てきた。「何かをする」という点では当時からほぼ共通の認識があったと思われるが、「何をするか」ということになると、スタッフそれぞれの考えはさまざまであって、この共通認識さえ揺り動かされるほど異なっていた。

本会運営の基本事項は、毎年一月に開かれる「スタッフ・ミーティング」で決められているが、一九八八年、同八九年のそれでも「二十周年の何を」が容易に定められなかった。スタッフそれぞれが宿題として持ち帰って考慮する、という事態が約二年間続いた。

この「何を」が決定したのは、一九九〇年の「スタッフ・ミーティング」においてで

あった。この前年、「イベント事業」担当委員が決められ、担当委員会は、その原案を作成しこのミーティングに提案した。その骨子は、スタッフ全員の参加するエンカウンター・グループの実施であった。現時点でわれわれに求められることは、われわれ自身の「求心性」ではないか、また、多忙になってきているわれわれの実施可能範囲はこの辺りでなかろうか、というのがこの提案の根拠であったが、この提案に対しては議論百出の様相を呈した。

この提案には修正が加えられ、われわれスタッフだけではなく、本会に深い関わりをもつ方々、強い関心を抱いている方々にも参加してもらい、われわれと共にこの二十年の節目に意味が生起するようなイベントにしようということになった。テーマもこれに相応して、という思いが多く語られ、「エンカウンター・グループ・フォーラム——私たちの間いなおしと展望——」が選定された。

「フォーラム」という企画は、本会では初めてである。フォーラムに対する漠然としたイメージは持てるが、その実態を確実に把握することは困難であった。フォーラムの実態が不確かなままのスタートでもあった。“学会レベルに至らないブヨブヨ”程度のところですから、という声があったが、最も近いイメージであったように思えた。

このようにして作られたのが、「人間関係研究会・二十周年記念、エンカウンター・グループ・フォーラム——私たちの間いなおしと展望——」（別記案内）である。この案内は、上述のように本会に深く強い関わりと関心のあると思われる方々にのみ送付することにしたので、フォーラム自体なかばクローズド（closed）方式で実施することになった。

3. フォーラムの内容

このフォーラムは、一九九〇年五月三日から同五日（二泊三日）、別記案内のスケジュール（案）と殆んど変らず実施された。

●第一日の「セッションⅠ」では、本会にかかわる“これまで”が語り合われた。“自己紹介的にすすめよう”というひとりの声を皮切りに、参加者のそれぞれが自分自身のエンカウンター・グループ体験そのもの、その体験から知見や発見、本会とのかかわり始めや現在の自己、印象に残ることなどを、それぞれの思いのままに言葉にしていた。

スタッフも含めた参加者全員（三十名）がひとつの大きな輪になり、それぞれが思いのまま、自由に発言しながらすすめられたが、“話を独占せず、自分も気持ちよく発言でき

た”という言葉が印象的であった。また、参加者全員が多かれ少なかれエンカウンター・グループ体験を得ていることが影響してか、「セミナー的知性」以外の情緒性も醸成した雰囲気を漂わせたオープニング・セッションとなった。

夜の「フリー・セッション」では、ファシリテーター論が語り合われた。木村易さんが提唱して始められたが、自ら自分のファシリテーター経験を振りかえりながら、自己のファシリテーター・スタイル（？）の問題点・偏りなどを提示した。それを手がかりに、ファシリテーターのあり方・メンバーへの関わりなどについて体験にもとづく話し合いが続けられたが、「グループ」におけるファシリテーターの存在意義が改めて問いかえされた感があつた。

●第二日午前の「セッションⅡ」は、私たちの“いま”を問いなおすことがその中心に据えられた時間であった。ここでは、小柳晴生さんと林もも子さんのプレゼンテーションがあり、それをベースに質疑応答を含めた話し合いが展開された。

小柳さんは、「現代におけるエンカウンター・グループの社会的意義」というタイトルの資料を準備し、①E・Gが効果追求的でない意味「脱強迫性」と「時間の消費」を、

②E・Gの目的や過程のあいまいさの意味、あいまいさの中の「自分探し」、③E・Gが集団で行われる意味、人による人への反応、④この概念化が私のファシリテーションに及ぼした影響、などに関して触れ、「E・Gは、変動する社会の中で生み出されたものであり、変動しつつある社会の性質を先取りしたものであり、来たるべき社会への適応を促進する機能を果たしていると考えられた。本論は、E・Gの推進者たちが漠然と感じていた『単なる治療ではなく』もっと大きな意味をもつという感覚を幾分か言語化したことにもなる」と結んでいる。

このプレゼンテーションは、エンカウンター・グループの実践や研究をすすめているわれわれに確かな認識と新しい局面を切り開く示唆を与えた、と思われる。

林も子さんのプレゼンテーションは、「私のエンカウンター・グループ研究の現在」であった。彼女は、数年前から「エンカウンター・グループにおけるコ・ファシリテーター関係の問題」について研究をすすめており、そのなかでもこれまでに公にしている部分をとくにわれわれに提示したが、「うまくいかないコ・ファシリテーター関係は、ファシリテーター各人の純粋性を妨げ、グループ・プロセスの中に不透明などごおりを作る場合がある」、「コ・ファシリテ-

ターも、自分も一人の人間としてトコトン、グループの中で関わりあうことができた方が、共に成長するグループ体験となるのではないか」、「オリエンテーションが違ったり、グループ観が違ったりする場合にも、ファシリテーターとして相手に暗黙のうちに期待しているものがくい違い、葛藤を生じることがあるようである」など、ファシリテーターのあり方に関し意味深い提言を示した。

そして、彼女は、現在、この研究をさらに発展させ、エンカウンター・グループ発展段階尺度の妥当性を確かめる探索をすすめている。

●第二日午後の「セッションⅢ」では、私たちの「これから」に焦点を合わせた二人のプレゼンテーションがあり、これをめぐって展開された。

大築明生さんは、登校拒否の子どもをもつ「母親グループ」の実践者であるので、このグループをすすめるなかから考えられるエンカウンター・グループの今後の方向を探る試みを提供した。

この「母親グループ」は、人間関係研究所（水戸市）の活動のひとつであるが、わが子の登校拒否などについてカウンセリング面接経験（継続も含む）母親が集まり「グループ」をつくるようになって始められ、そこで

は自他の事実がそのまま語られる雰囲気ですめられている。このなかで、参加者は、自分が見られる立場にもなり、自分自身を大切にすることに気づき、それとともに自分の子どもを肯定的に見ることができるようになっていく様相が述べられた。

このようなグループは、愚痴をこぼす母親グループと異なり、事実（自分）を探ることの相互性、安全ななかでの自己探究性が含まれており、母親相互の人的成長が期待できる。そして、このグループの地域社会への浸透・適切なPRが今後の課題となろう、と結んでいる。

第二のプレゼンター、田久保園子さん（ゲスト参加）は、「浄土真宗東京ビハラー」での電話相談、「癌患者とその家族との語らいの会」の経験から、人間の「いのち」に迫るあり方を問いかけた。

「ビハラー」とは、インドの古語で「安住すること」を意味するが、いのちの尊さに目覚めたものが老人や病人の苦しみや悩みそのものにかかわる実践活動をそこではおこなっている。癌患者やその家族と語り合うのは、そのなかのひとつの活動としてすすめられている。彼女は、「癌を言葉にただけで人は逃げ腰になる」、「癌は、淋しい病いである」、「病名を家族は語ろうとしない、語ることは関係を断ち切ることに思っている」な

ど、癌患者やその家族の切実な胸の内を聞くことが多い、という。そして、その人たちと接していくなかで、患者や家族は「どう生きるか」の答を自ら知っているようである、と認識するようになり、ただそばに居て「聞く」だけしかできないように思う。否、聞くことが求められるし、聞くことが「共に生きている『いのち』になるのではないか」と思える、とその経験からの実感そのものを披露した。

このプレゼンテーションは、参加者の心に響く声としても伝わり、あるものには自分自身の類似した経験・体験を呼び覚ますことにもなった。カウンセリングやエンカウンター・グループの今後を示唆する含意多い意味が彼女の経験そのもののなかにあるように思われた。

この夜の「フリー・セッション」は、畠瀬直子さんの主唱する「女性グループ」がメインとなり、女性パワーに圧倒された感があった。しかし、その内容を伺い知ることは、僅かしかできなかったもので、その事実のあったことに書き留めたい。

●第三日午前のフォーラム最後の「セッション」は、村山正治・尚子お二人のプレゼンテーションとこのフォーラムのふりかえりに使われた。

プレゼンテーションは、主に村山正治さんによってなされ、その間、尚子さんがさらに補足していく、という形ですすめられたが、「福人研（福岡人間関係研究会）を中心とする衛星ネットワーク」と「福岡人間関係研究会活動年表」を資料をもとに、エンカウンター・グループのフィロソフィ（哲学）をベースにした地域とのかかわり、その実践経過や課題・展望などが、われわれに問題提起をもたらしような意味をもって語られた。

福人研の活動は、人間関係研究会の「ひとつの実験」であると認識されるが、この活動の背景には、一九六〇年代の大学紛争の体験、カール・ロジャースから学んだことなどがあり、「自立と連帯」が中心テーマとなっている。

この活動の核になるものにMOG（月例オープン・グループ）があり、このMOGからそのテーマに沿っていくつかのプロジェクトや実践活動が生まれてくる。例えば、夏の冬のエンカウンター・グループ、グループ臨床カンファレンス、自然発生的小グループなどがそれぞれである。これらは相互に連帯し合い、自己表現の場となり、そこからさらに「衛星」としてのさまざまな活動が展開されている。それらには、「ホットライン・ディスカッション交友会」（血友病の人たち、定時制高校の人たちなどがある）、「主婦のための火曜会」、「酒話の会」、「準喫茶、タイヒ」、

「MEG」（ミニ・エンカウンター・グループ）などがある。

このような福人研の活動では、自己自身の姿勢を問い、自分の生き方を模索することがなされており、エンカウンター・グループを通しての「社会変革」的方向が生み出されている。そして、この実践活動は、同時に、研究のためのフィールドにもなっており、治療ネットワーク（therapy network）を形づけている、と言える。さらに、この活動のそれぞれには、「ここに来れば安心できる」、「相互に自分を大切にできる」、「自分が役立てられる」という意味でのコミュニティ（個有なコミュニティ性）が生起している。それは、心のふるさとのコミュニティである。

このプレゼンテーションは、参加したわれわれに多くのことを触発させた。組織のあり方、各地での活動のふりかえりや歩む道筋などへの示唆、新しい試みへの勇気等々、多くの発言を引き出した。

4. 参加者の感想

つぎに、このフォーラムの参加者の感想をいくつか話しておこう。この生の声は、フォーラムの中身・様相、その成果を別な視点から示してくれる、と考えられる。

*

●「全体的な印象としては、とても楽しく、言いたいことが言えて、とても良かったと思います。……われわれ『若手』としては、経験の長い方々とじっくり話ができて良かった……毎年やっていただければ……。印象に残ったセッションとしては、小柳先生の発表は刺激的でした。EGが何を目指しているのかももう少し時間があれば、より議論が深まったのではないかと思います。」(T・S)

●「第一に印象深かったのは、大柴氏、田久保氏の発表のセッションである。大柴氏の深く自らの体験を掘り下げた体験発表に感動した。これは、EGをよく知る者にできる発表である。それを聴く側もまた専門家である。本来の意味で傾聴の価値を知り、心理的安全を保証する風土を作ることが出来る者こそ、それを可能とすることが出来る。深いところさしのある実験だと実感した。」(S・M)

●「(田久保氏の発表は)自分の父親とのことが思い出されました。丁度七年前のロジャースのワークショップが終わった五月十日に父をなくしたことが重なり、何か因縁めいたものを感じました。……隔年でも開催していたできれば参加したいと思っています。」(Y・Y)

●「セッションに二人と三人のプレゼンテーションは多すぎるように思う。もしそうするなら、一人の時間をきっちり決めるべきだと思う。……これだけのスタッフと二泊三日、場を同じくできて、貴重な体験だった。これから是非続けてほしいし、私も参加していきたい。」(H・H)

●「全体の印象として、同じ土俵(理論的、体験的)で語れる人々の集いに参加した安心感があり、温泉つきのホテルの心地良さプラスで、エネルギーを得た。規模も三十名位だと私もメンバーに入れる感じがあつたし、他の方々の声が直に伝わる感じがした。オーブニングの一セッションは、それなりに全員参加が出来、それぞれの気持ちが出たのが良かった。」(M・N)

●「二泊三日にしては、ちょっとボリュームが多かったように思う。人数のこともあろうが、もう少しゆっくりと消化する時間、互いに確認しあう時間がとても良かったのでは、と思います。でも、様々な考えの人がいるということを確認できたことは良かったと思います。」(K・K)

*

5. おわりに

本稿は、本会二十周年記念事業のひとつであるイベント(エンカウンター・グループ・フォーラム)の概略的報告である。このフォーラムは、参加者の感想にもあるように、好評裡に終了したが、そのすべてをここに記すことができなかった。プレゼンテーションの中身についても十分なあらわし方ができなかったのも、オヤと思う向きもあるかと思うし、感想も限られたとり上げ方しかしなかったのも不満をもたれる方もいるかと思う。

これらの点についてはお詫びの気持ちでいっぱいである。前述したように、このフォーラムの全体は、後日、本会の刊行資料として公にしたいと考えているので、不十分な点はそのなかで補いたいと思う。「私たちの問いなおしと展望」の一端が本稿によって知られればと願うのみである。

ますだ みのる
●東京家政大学

[セッション 2]

EGの「いま」を、いくつかの角度から照らし出してみようとするセッションにしたいと思います。話題提供者は、次のような方々を予定しております。

- ・小柳晴生：「現代社会におけるEGの意義」
- ・林もも子：「私のEG研究の現在」
- ・見藤隆子、永原伸彦：「EGの現状と問題点」

これらは、公式のスキのない発表というよりも、自由にノビノビと、今、自分のなかで“うごめいている”ものを、生に近い形で出し合えるようなものにしたいと考えております。

(世話人) 永原、中川、見藤

[セッション 3]

エンカウンター・グループのこれからを語り合おうというこのセッションの中心テーマとして、われわれ世話人はエンカウンター・グループの地域・社会へのかかわり、そこにあるさまざまな切実な問題との接点を探ることをかけました。このセッションの構造としては論議が具体的なものとなることを願って、3人のリソース・パーソンに20分から30分ずつそれぞれの経験にもとづいて問題の所在を具体的に話して頂いた上で（短い休憩をはさんで）全体での討議に移る予定です。まずスタッフの村山正治さんにはこれまでの福人研の活動の経験をベースに、広く地域へのエンカウンター・グループのかかわりの将来について話して頂けるのでは期待しています。次に今日の日本の社会、特に教育の病理を露わにしている登校拒否の問題へのかかわりについて、茨城人間関係研究所の大築明生さんにご自分の父親としての体験を交えて話して頂きます。（ここでは是非小野さんの発言をお願いしたいと思います。）最後に浄土真宗の女性僧侶であり東京ビハラーに依って末期癌患者の訪問活動や癌患者家族会の活動などを続けておられる田久保園子さんに、そこで感じておられる問題について話して頂いて、老病死やそこでの援助の問題を一緒に考えられたらと思います。

従来主としてワークショップや教育分野（看護教育を含む）での研修を中心に展開されてきたエンカウンター・グループのこれからの課題として、ここでは地域・社会へのかかわりの可能性一つにしばってテーマとしてみたわけですが、もっと他に重要なテーマがあるというご指摘もあろうかとおもいますから、このことの当否を含めて実りある話し合いが行われることを世話人一同こころから願っております。

(世話人) 木村、早川、大須賀（発）

[セッション 4]

この時間は、とくに特別の計画はありません。これまでのセッションで言残したこと、もう少し聞きたいこと、あるいは大山参りなど、皆様のおこころ次第です。

以上です。

人間関係研究会・20周年記念

エンカウンター・グループ・フォーラム

——私たちの問いなおしと展望——

***** 《第2報》 *****

いよいよEGフォーラムが間近（ホントニ）になりました。総勢30名でEGの「これまで」「いま」そして「これから」について語り合うことになりました。

もう少し、詳しい内容をお知らせいたします。お心、お気持、お考えのご準備をお願いいたします。

なお、3日は、午後1時（スタッフ11時）に、小田急線伊勢原駅北口（第1報では西口とご案内致しましたが、訂正いたします。）からマイクロバスが出ます。

また、各セッションについては、記録に残し、後日何らかの形で世に問うことを計画しておりますので、テープ録音、写真を取ることをご諒承下さい。

スケジュール（案）

おおよそ次のようなスケジュールを考えておりますが、皆様と話し合いながら決めていきたいと思っております。

		9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
5/3						受 付		セッション 1 (これまで)			夕 食	フリー
5/4	朝食		セッション 2 (いま)		昼 食			セッション 3 (これから)			夕 食	フリー
5/5	朝食		セッション 4 ?		出 発							

[セッション 1]

エンカウンター・グループを通してさまざまな人との出会い、そして自分との出会いがあった。そして、その人たちは、自分は、今、どのように生きているのであろうか。“グループ”が、それぞれの“人”が、その“体験”が、一人一人にとってどのような意味があったのだろうか。

フォーラムの初めに当たって、まずは原点に立ち戻り、私たち一人一人のエンカウンター・グループとのかかわりの歴史について、じっくりシェアしたいと思います。ここでは全員がプレゼンターです。

（世話人）増田、渡辺

《20周年記念フォーラム発表》

現代におけるエンカウンター・グループの社会的意義

小柳 晴生

一、はじめに

エンカウンター・グループ（以下、E・G）は、一九六〇年代中頃にアメリカで創始された集中的グループ体験である。E・Gで生じていることを要約すれば、「安全で許容的な雰囲気醸成し、そこで人と人との心が通いあわせ、あるいは対立する中で、自己や他者についての理解を深め、自他ともに現状を肯定的に受け入れること」といえよう。これらはE・G独自のものでなく、既存の集団心理療法とかなり重なるものである。それにもかかわらず、あえて一九六〇年代にE・Gという小集団活動が生みだされ、八〇年代の

今日、世界各地で実践されるようになったことをどう理解すればよいのであろうか。

本論の目的は、E・Gが生起し拡大していった社会的背景と、E・Gが現代社会で果たしている役割を捉える試みである。それは同時にE・Gのアイデンティティを模索する作業でもある。ここでは、E・Gの現代的意義を筆者がE・GをE・Gたらしめていると考える①非効率性、②目的・方法のあいまいさ、③集団性、という三つの構造的特徴に分け、それぞれについて現代社会でどのような意味をもつのか検討する。

また、なるべく人間中心、人間尊重などヒューマニズムからの説明を極力避けた。なぜならヒューマニズムは今日最も広く流布されているためそれと気付きにくいの一つのイデオロギーである。イデオロギーであるため

に、何をもって人間中心とするか、人間的とはどんなことが人によって異なり、価値を共有する者の間では伝わるが、そうでない者との間に了解が成立しにくいからである。

二、E・Gが効率追求でない意味

―「脱強迫性」と「時間の消費」―

(1) 産業化社会を支えた強迫性格

E・Gが効率追求でないのは、その起源において過度に能率や効率にせきたてられ、あるいは能力主義に毒されて、自分を失ってしまうことに対する異議申し立てであったことからすれば当然のことであろう。この効率

追求でないという要素が、現代社会にとってどのような意味をもっているのであろうか。

最近、多くの識者が、産業革命以来二百年間続いてきた生産様式が現在変容しつつあり、それを支える適応的人格構造も変りつつあるという指摘がなされている。

まず、現代において適応的であると考えられる人格構造について見てみよう。Reich, C. H. (一九七〇)は『緑色革命』で、二十世紀初頭からの合理的生産システムに適応する人間は、「目標・能率・競争・過去と未来の管理に拘泥し」、外側を殻で覆われているので、非人間的な関係しかもてず、感覚に鈍感で融通がきかず、硬い態度を特徴とするという。

このような生活態度からの脱却が、一九六〇年代に世界を席巻しE・Gの発展を支えた人間性回復運動の主張であった。

Reich, C. H. が描いたのとはほぼ同様の人間像が、脱産業化社会論からも言及されている。その一例として山崎(一九八四)が『柔らかな個人主義の誕生』で述べている、産業化社会とともに生れた硬質の自我、つまり「生産する自我」が挙げられる。この自我は克己的で、感情に動かされること拒否し、「存在として一つの限定した目的しかもたず、もっぱらそれを実現するための手段として存在し、それを限定したただ一つの手段で実現するという点で、限りなく機械に近い存在」であり、

目的までの効率を重視するという自我の在り方である。

Reich, C. H. や山崎が描く人格は、いずれも強迫性格について言及していると思われる。Salzman, L. (一九七五)によれば「強迫性格は、今日最も多く見られるパーソナリティであり、その特徴は自分自身をコントロールし、かつ支配すること、そして自分の失策と弱さを認識するのを避けること」であり、人間の不完全性・誤謬性・人間性を自覚しないでおこうする、つまり全知全能であろうする試みであるという。

(2) 強迫性からの脱却

E・Gで追求される人間像は、これまで述べた強迫性とは全く異なっており、自らの不完全性や弱さを認め受け入れることである。とすれば、E・Gは強迫性からの脱却、脱強迫性という機能を果たしていると考えられよう。E・Gがめざす「人間的」とか、「組織などの人間化」という時の「人間的(化)」は、強迫的でなくなると表現した方がより適切ないように思われる。

都留(一九八五)は、『出会いの心理学』で、現代社会の特徴としてゆとりの喪失、効率主義による人間関係の稀薄化、不慣れた状況に弱くなった現代人(失敗を恐れる若者た

ち)、迷いの学習の不足など五つをあげ、現代社会を「出会い」喪失の時代と規定し、E・Gが、これらを補う体験の場を提供するとしている。都留が挙げた諸特徴は、強迫性の弊害について言及していると考えられるものであり、この点からもE・Gは効率追求的でないという性質により、強迫性からの脱却の機能を果たしていると考えられるのである。

島瀬直子(一九七七)のあげる「情緒性の再確認」の意義も、この文脈で理解できよう。強迫性格においては情緒や感情は、不確かでコントロールがきかないゆえに生活から排除されているものである。身体感覚など身体性の再確認も含めて、情緒の復活は脱強迫性の重要な指標なのである。

また、強迫性格の人は、過去と未来のコントロールに拘泥する。「いま、ここで」というE・Gにおける現在の強調もまた、脱強迫性への促しと考えられるのである。E・Gが効率追求でないという性質は、目的や過程のあいまいさ、現在の重視などのE・Gの特徴とも併さって、脱強迫性への変容を促していると思われる。

(3) 時間消費型の消費

E・Gが効率追求でないのは、これまで述べてきた強迫性からの脱却とはまた異なっ

た意味があるように思われる。近年家庭生活が電気製品による自動化で、生活を成り立たせるために必要不可欠な時間が急速に減ってきた。他方、産業においても内外から労働時間の短縮が求められており、我々はこの先大量の余暇時間に直面させられるだろう。

余暇も手に入れてみれば、それを有意義と感じるように使うということが極めてむづかしいものであることがわかってきた。これらの時代は、自分にとって充実しており、かつ時間を大量に使う過ごし方を見出す必要性がでてくるように思われる。これを時間消費型の消費という。時間をゆったりと使い、しかも充実をもたらすという点でE・Gはこれからのすぐれた余暇の過ごし方であると考えられる。

山崎（前出）は、消費を「効率主義の対極にある行動であり、目的の実現よりは、実現の過程に関心をもち行動」であり、「充実した時間の消耗こそ真の目的とする行動」であるという。そして、消費がこれからの脱産業化社会においては極めて重要な意味を持つという。この消費の概念は、E・Gの process-oriented な性質をうまく説明しているように思われる。そして「時間の消費」は、単に消費にとどまらず、この中でさらに述べた脱強迫性の作業と、次に述べる自己の明確化という重要な作業がなされるのである。

三、E・Gの目的や過程のあいまいさの意味―あいまいさの中の『自分探し』―

(1) 容器としてのE・G

E・Gが導入されて二〇年にもなるのに、相変わらずE・Gを実施する際に、目標はあいまいなままだし、過程もあいまいなままである。効率からいえば、およそ不経済なものかもしれない。このあいまいさは、自己探究を妨げるような目標を主催者が外から持ち込まないために生じているものである。E・Gは参加者が比較的自由に使える時間と空間という「容器」であり、目標を持ち込むのは参加者自身であり、参加者の使い方によって意味も効用も異なるものなのである。

E・Gは、このあいまいさゆえに成果が不確かで不安定であると批判されることがある。しかし、先に述べた脱産業化社会の目的探究的な性質から見ると、あいまいさはこれからの時代に極めて重要な意味を持っていることになる。

山崎（前出）によれば、基礎的な欲望が満たされた後の消費は、美とか精神的快楽などの価値を目指すものであって、その際、消費

者が知っているのは、「何か美しいもの」「何か面白いもの」という漠然たる願望であり、厳密な意味での目的ではないから、目的指向的な行動は起こらない。自分の願望に気付くのは氣に入った商品を見（出会い）した瞬間であって、ここでの行動は目的探究の行動であるという。

(2) あいまいさの中の「自分探し」

E・Gにおいても、多くの場合探究の始まりにおいては、参加者自身何かを望んでいることはわかっている、何を望んでいるかは明確になっていない。従って、探究の方法もわからないし、また目的指向的な行動は起こりえないのである。このためにE・Gは、方法においても目的においてもあいまいにならざるをえないのである。自分が何を望んでいるか気付くことが出会いと考えられる。

つまり、あいまいさの中で「自分探し」と呼ぶのがふさわしいような、欲求の明確化という重要な作業が行なわれているのである。この作業は、快・不快、充実・空虚という感覚を羅針盤に行なわれる。E・Gでは、自分の納得のいくように行動するように促がされるが、単に快適な体験を追求しているのではなく、欲求の明確化という体験を通じて、自己そのものの明確化に取り組んでいると考えら

れるのである。

日本ではやくE・Gを取り入れた学生相談の分野では、E・Gを「自己発見セミナー」と名付けて実践したが、本質的な命名であったと言えよう。その一人である対馬（一九七七）は、現代社会が多様な価値観の同時的存在などのために「自分とは何か、自分はどうかすればいいのか、将来はどうなるのであろうか。」という自己同一性について、青年のみならず混乱をきたしやすい状況にあり、これをE・Gに多くの人が参加する理由であるとしている。対馬は、否定的な文脈で述べており、これは当時の代表的な見解でもある。

しかし、先に触れたように「目的探究的な世界を生きようとすれば自らの感覚を頼りに進まざるをえないし、複数の人間関係の中に身を置くようになって、役割以前の自己を意識せざるをえなくなれば、好むと好まざるにかかわらず「自分探し」という自己探究を続けざるをえないのである。

(3) 知恵を育てるE・Gのあいまいさ

Gendlin, T. & Beebe, J. (1968)は、「現代社会では、自発性の要求される範囲が著しく拡大されている。あらゆる場面において、自発的で、直接的で、非計画的で、個々に工夫さ

れた行動が要求される割合が高くなっている」と述べ、E・Gはこうした変化に適応しようとする工夫の一つとみなしている。この言及は、E・Gが目的探究的な生き方に貢献するという筆者の考えと極めて近いものである。

あいまいな場面を生きてゆくために必要な資質は、刻々と変化する事態に対応できる柔軟な対応力であり、判断力であり創造性であり、これらは総称すれば知恵といっているであろう。E・Gのあいまいさは結果として、知恵を育てるという機能を果たしているように思われる。

E・Gは、現在、教育の分野でもっとも熱心に取り入れられているが、知識偏重に偏りがちな現在の教育において、E・Gの知恵を育てる機能はきわめて重要なものといえよう。さらにいえば、「知識よりも知恵」で説明するだけでは不十分であり、より長期的に展望した場合、産業化社会の目的追求的な生き方から、脱産業化社会の目的探究的な性質への変更を反映したものと考える方が適切であるように思われる。

四、E・Gが集団で行なわれる意味 — 人による人への反応 —

(1) 地縁・血縁から自ら求めた関係へ

現代が激しい人口流動や核家族化、都市への人口集中などによって、これまで人々を結びつけてきた地縁・血縁によるきずなが弱くなってきたことは誰しも認めるところであろう。地縁・血縁のように自ら選びとったのではない人間関係が稀薄になってきたことを孤独になったととらえることもできよう。しかし、地縁・血縁は同時に個人を拘束する臍帯でもあった。山崎（前出）は、こうした事態を人間関係が稀薄になったのではなく、自分の選択による人間関係や集団の形成が可能になった状況として肯定的にとらえている。

山崎（前出）は、これからは、「単に豊かで平等な生活を求めるだけでなく、ひとりひとりが異質な個人として処遇を受け」（これも人間化の具体的な例と考えられる）、「具体的に他人の注目と気配り」を求め始めた時代であるという。人による生身のサービスマンや、具体的他人の注目と気配りは、小規模な範囲でしかやりとりできないために、今後は多様な小集団の時代になるという。別の表現をすれば、産業化社会では「誰でもよい人Anybody」であった存在から、脱産業化社会は、人々が「誰かである人Somebody」であることを要求しはじめ、大量生産による複製

のサービスから「人による生身のサービスを要求する時代」であるという。（「誰でもよい人」とは平等であるかもしれないが取り替え可能であり、Toller, A.（前出）がモジュラー人間と呼んでいるものである。）

昨今、趣味や関心、個々人が直面する問題を媒介として非常に多くの小集団が生まれている。こうした集団は、ある時は趣味を、ある時には社会的関心を媒介にしており、表面的には個々の趣味や関心が第一義の目的のように見えながら、実は、存在が薄らいだ地縁・血縁の代りとなる人間関係そのものが目的でもあると思われる。

E・Gもまた、こうした新しい人間関係を求める一つの表現型と言えないだろうか。しかも、普通は意識化されない人間関係への欲求を直接的に満たすことも可能であるという意味では、現代社会に生きる人々の欲求をより適切に反映した集団であると言える。かつて地縁を支えていた「井戸端」にかかわって、E・Gは新しい「社会的居間」を提供しているように思われる。

(2) 小集団による満足の相互確認

先にE・Gには「時間の消費」という側面があると述べた。ところが、消費に伴なう表現には規程がなく、互いに満足を確認しあう

他人の目が必要であるという。このために消費行動は、グループという形をとらざるをえないことになる。消費は、具体的な他人の目がなければ、不安のともなった際限のない「みせびらかしの消費」（山崎（前出））になつてゆくという。

小谷（一九七七）が「現代社会では適切な反応を相互に得るといふ機能が低下している」と述べているが、これは、具体的な他人の目をもてない状況についての言及と考えられる。小谷のいうE・Gの「力動的反応性の回復」機能は、消費に伴なう相互の満足を確認する機能として理解できるのではないだろうか。

また、対馬（前出）は、「自己表現好き」の説明において、大量生産的な画一性的環境の中で、E・Gが「自己主張する機会を提供している」とし、都留（前出）は、E・Gや感受性訓練は、平凡な中に「お互いに少しでも違うところに気付き、それをアプリシエイト（appreciate）（賞認）しあう感性を育てる」と述べている。

これらもまた、「誰でもよい人Anybody」から「誰かである人」へという大きな社会変動の文脈で理解できるように思われる。E・Gは、「誰でもよい人」から「誰かである人Somebody」になるプロセスであるともいえるし、「人による生身のサービス」を相互に提供しあう場と考えられ、人々の欲求を極め

て適切に満たす機会となっているのである。E・Gの機能のなかでも、この表現の機会の提供と相互の反応は、これから極めて重要な意味をもつものとなる。

(3) これからの小集団の在り方を学ぶ機能

E・Gは、人間関係への欲求を直接的に満たすことや、アプリシエイト（appreciate）（賞認）しあうという満足を与えながら、同時に、所属するものにとって満足のいく集団を形成する知恵や技術をも伝達しているのである。これらの知恵を、手間暇かけてグループを、手作りするという過程をとおして学ぶのである。しかも、E・Gで目ざす集団は、情緒性を重視し、リーダーシップについても、対立を解決する方法においても従来とは異なっており、これからの小集団の在り方を示唆しているように思われる。

五、この概念化が私のファシリテーションに及ぼした影響

① ベーシックE・Gの再評価…これからも次々と新しい技法が提案されるであろうが、ベーシックE・Gが本質的な変革力をもつものであるとの自信をえた。

② 新しい余暇としての機能の再発見…たっ

ぶりと時間を使って人と人との関わりや、表現とその反応を楽しめるグループをつくりたい。

③「成長・強迫からの開放・グループは成長しなければならぬものでなく、充実した時間と場所を提供するものであり、社会の中での学校というよりは居間である。

④模索の援助にこそ意味があることの再確認。E・Gの意義が集団で模索する楽しみにあることを再確認した。

六、おわりに

本論では、E・Gの生成や拡大発展の社会的基盤や現代社会において果たしている役割について、脱産業化社会論を援用して検討を試みた。従来、社会が非人間化したために生じた「親密で真実な関係への飢餓」欲求がE・Gの拡大を支えてきたという説明に代表されるように、否定的な要因で説明されてきた。本論では、E・Gを非人間化とは異なったより大きい社会変動が発展を支えたと見ることもできる可能性を提示した。断片的ではあるが、E・Gの生成・拡大を、産業化社会から脱産業化社会への移行という社会変動と関連づけて説明した。

E・Gは変動する社会の中で生みだされた

ものであり、変動しつつある社会の性質を先取りしたものであり、来たるべき社会への適応を促進する機能を果たしていると考えられた。本論は、E・Gの推進者たちが漠然と感じていた「単なる治療ではなく」もっと大きな意味をもつという感覚を幾分か言語化したことにもなる。

参考文献

- 一、Gendlin, T. & Beebe, J.: EXPERIENTIAL GROUP Instructions for Groups. Gazda, G. M.(Ed.): Innovation to Group Psychotherapy. p. 190-206, 1968 (小野修訳)・体験グループ・グループのためのインストラクション。人間関係研究会資料No五、一九七二。
- 二、畠瀬直子・ジェネラル・エンカウンター・グループ。村山正治編：講座心理療法七、エンカウンター・グループ。福村出版、二三四一頁、一九七七。
- 三、笠原 嘉・アパシー・シンドローム・岩波書店。一九八四。
- 四、小谷英文：精神的健康とエンカウンター・グループ。沖原 豊、西本幸男編：精神衛生。福村出版、二四九-二六四頁、一九七七。
- 五、国分康孝・エンカウンター。誠心書房、一九八一。
- 六、村山正治：アメリカにみる二十一世紀への潮流(三)エンカウンター・グループ運動。教育と医学二一(一)一九七三。
- 七、村山正治：エンカウンター・グループ。序論・村山正治編：講座心理療法七、エンカウンター・グループ。福村出版、一一二二頁、一九七七。
- 八、Reich, C. A.: The Greening of America. 1970. (邦高忠二訳：緑色革命。早川書房、一九七二)
- 九、Rogers, C. Carl Rogers on Encounter Group. 1970. (畠瀬 稔、畠瀬直子訳：エンカウンター・グループ。ダイヤモンド社、一九七三。
- 十、Salzman, L.: The Obsessive Personality. 1975. (成田義弘、笠原 嘉訳：強迫的パーソナリティ。みすず書房。一九八五)
- 十一、Toffler, A.: Future Shock. 1970. (徳山 二郎訳：未来の衝撃。実業の日本社、一九七〇)
- 十二、対馬 忠：グループ・アプローチとは何か。佐治守夫、石郷岡泰、上里 一郎編：グループ・アプローチ。誠信書房、一一二頁、一九七七。
- 十三、山崎正和：柔らかな個人主義の誕生。中央公論社、一九八四。

出会い百選 ⑨

出会いと歩む

晶瀬直子



なぜなのだろう。研究会の歩みを振り返っていたら、学生時代に見た映画のシーンが浮かんできた。それは、人類史上はじめて人工衛星を打ち上げ、自信に満ちて歩んでいた時代のソ連映画で、十歳を過ぎたばかりの少年が「人々の中へ」と言って広い世界へと歩み出すシーンである。この国に生まれ、血縁や地縁にがっちり守られて育った私には、とても不思議な神秘的シーンであった。

清水の舞台から飛び降りる
気持ちだった

カウンセリングを学ぶ目的での留学だったのに、ロジャーズさんはエンカウンター・グループに打ち込んでいた。一九六七年のことである。一ドル三六〇円時代に太平洋を越えてきた以上、それに頭を突っ込むしかなかった。当時、私は全てを変える必要に迫られていた。まず、おしゃべりで、人と語ることに

戸惑いなど感じたことのなかった私なのに、なぜか無口になりがちなのである。「あら、空が青い。この花、はじめて見るわ」と、なんでもいから口を開こうという決意が必要だった。それからまいったのは、常識が通用しないこと。私は、日本の常識で人々と接していたわけだ。口を開くと、注目を浴びるのにも弱った。私達が、奇妙な発音の日本語を耳にすると、悪意はなくても思わずそちらを振り返るように、人々が私を注目するのである。明るい彼らゆえ、くっつくなく、のびのび好奇の視線をあびせる。そうすると、存在全体がグッと萎縮する。なんとも、困った。

異国にいる気持ちの整理ができないまま参加したのは、研究所のスタッフが主催したエンカウンター・グループだった。アパートとは目と鼻の先ほどのキヨリだった。日本人というガチガチの鎧を身にまとった参加である。でも、メンバーは、完全なひとりの人間、個人だった。彼らには、私の鎧が見えなかったようだ。

一個人として存在しているとは、ああいうことを言うのだろうか。あの国にいると、嫌でもそうなるのだろうか。抱き合ったり、キスしたり、足の裏を見せて座り込んだり、行動レベルの違和感にさらされ続けた初体験だった。

心理屋さんばかりだと
エンカウンターにならない

ロジャーズさんが担当していた大学院の
コースのEG参加者は、全員心理学専攻者。
驚いたことに長い沈黙が続き、グループが拘
着状態で前進しない。まさか、相手の心理を
探っているとも思えないが、きわめて慎重で
面白くない。私は、心理学者の偽らざる一面
を見たと思った。さまざまな生き方の人と交
流しながら人生を歩もうと痛感した。面白く
ない人間になりたくないから。
後でカールに、この感想を話したら、「実
は、そうなんだ。難しいんだ」とのことだっ
た。

人と触れ合い、どんどん英語力がつく

夜間高校、家庭教師、いろいろ努力したが、
EG参加が一番英語力をつけるのに役だった。
言葉は、深いふれ合いの中でこぼれ出すもの

のようだ。お勉強としてやっていると、限界
がある。英語力の伸びを確認しながら、本当
に得がたい体験をした。学ぶということは、
自然に成長することだったとは、日本では気
づかなかった。ただ、「ジャップ」呼ばわりさ
れて、家に帰ったことがある。戦後二十年
ちよつと、まだ人々の心の傷が癒えてなかつ
たのだろう。彼は今、ブッシュさんくらいの
年齢の筈だ。

面白かったのは、日本人が私一人だと、ト
イレの鏡などで自分の顔を見て、「あれっ？
私、こんな偏平な顔だったかしら？」と思
うこと。人間の視覚は、とても環境に影響さ
れやすい。それから、日本語が完全に消えて、
英語で考えだすこと。家に帰った途端、日本
語になってホッとした。あれは、ちよつと不
安なものだ。

三つのショック

あげればきりがないので、三つだけ話した
い。「こんな資源の豊かな国と闘ったのか！
負けるに決っているじゃない！ 戦後のあ
の苦しさは、こんな国と闘った結果か！」

先の世代の人々との心の距離が明確に敷かれた。私達は世界をすっかりウォッチングして、二度と誤りを犯してはならない。こんどこそ、正倉院も、京都も全てを失うのだからと。

つぎは、日本ではえらそうにしている「日本男児」がきわめて弱く、奥さんを置いて来ている人などは、ほとんどノイローゼということ。「女、子供が」と事あるごとに言われた世代に属するので、私にとっては信じられない現実だった。ノイローゼになっても、私に会うとえらそうにする滑稽な学者もいて、この人たちでは世界の舞台は動まらなないと痛感させられた。世界に通じる日本人は、今から育てる必要があると。

一番ショックだったのは、「日本人は、アメリカに来ると大きく育つ。日本の中では、どうも縮こまってしまふ。特に学者の世界ではそうである」ということを何人もから聞いたこと。そのアメリカに居たので、ニコニコ話してくれたが、それがよいショックだった。京大は彼の地では影が薄く、ほとんどが東大出身者だった。そうやって、ゆうゆうと人の及ばない実力をつけて帰国すれば、確かに人生愉快だろう。でも、そんな根性の狭さでつけた実力なんてたかが知れてる。日本人が日本で大きく育てなくて、何の益になろう。

生命を生み出す「性」を授かった私は、可能性をみんなにと思い、留学なんてできない人々のお役に立たなくてはと、けっこう古風な結論を得た。

あー、風通しのいい人間関係を
作りたい！

「予定は未定にして、しばしば変わるものなり」を我が信条として愛し、学生結婚をやるーい気持ちでやり、出産、育児のための休学など京大の禁を犯すようなことを次々やった私は、その時二十七歳。若い学生として、学ぶアメリカの若者をウォッチングした。「のびのび、年長者の目を意識しないで、もっと内なる思いを率直に交換して学べたら日本であって、大きく成長できる！」

カリフォルニアの明るい光の中で、懸命に日本の研究室を思い出した。すると、暗いじめじめして風通しの悪い人間関係が浮かんできた。それをガリと変えることが、未来のためにぜひとも必要と思えた。もちろん、私は安保世代で、二十万人という信じられないほど多くの人々の声が国会の壁にはねかえさ

れるのを見たので、それほどオブティミスティックではないが、すこしずつやって見る価値はあると思った。(安保のことでは、日本人を味方につけてなかったら、アメリカはベトナムに踏み込まなかったし、デタントはもっと早かったかなとおもう。) EGは、願ったりのアブローチではないか！

戦中の母の手、 デモして歩くスポック博士

英語力をつけるために夜間高校の英語を受講して、アメリカ女性と親しくなった。不思議なこともあるもので、しどろもどろの英語の私が、テストだけはいつも彼女より上だった。先生から「日本の英語教育を尊敬します」と言われた時は、キツイ冗談としか受け取れなかったが、彼は真面目な顔だった。

その女性は、今から高校の単位をそろえ資格を取り、大学に進みたいとのことだった。誠実そのものの人で、研究所ではお目にかからない根性の主だった。高校生の息子さんが居ると言う。「じゃ、戦争のこと心配ですね」思わず言うと、「あなた、分かってくれます

か」と私の手をヒッシと握ってきた。あの必死な思いは、一生忘れられないだろう。私にとって、戦争は遠い昔のことだったので、息子の命を心配する気持ちもイメージでしか考えられなかったからである。

それから「スポック博士の育児書」でお世話になったその人が、デモの先頭を歩いているのも、印象深かった。日本では、明るく手を振りながら歩く学者なんて想像できない。ロジャーズさんも、晩年、平和のために飛び回っておられたが。

エンカウンター・グループ上陸

多分、日本でEGをやったのは、私達が始めてだろう。「女性の自己実現なんて、危険ですよ」なんて言う人がいたり。のびのび発言していると、ニタニタ笑っている教官がいたり、日本は日本だった。だから、私はいつもグループで力をもらって、出会った人々の事を考えて、ゾットとする人々の姿はなるべく見ないようにして過ごしてきた。あーあ、五十歳まで、思春期みたいなことしてたのかな。

よくまあ、年若く未熟なファシリテーターを受け入れて下さったこと！

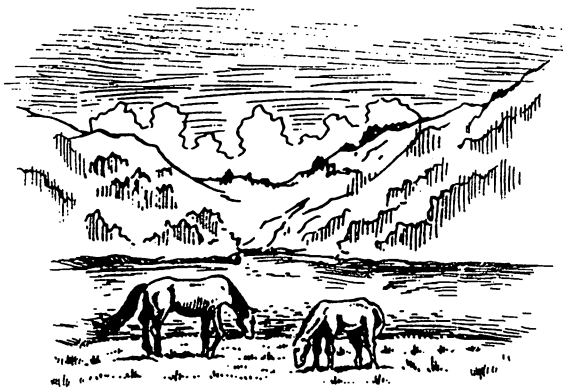
歩みをふり返ると、感謝あるのみだ。

今、日本男児達は（責任を引き受けている世代のおじさんのこと）苦しんでいる。あまりの価値観の変化に、考えると考えが分裂するのだと思う。分裂は耐えがたいので、壊れたレコードのように昔と同じ事を言う。でも、それでは事がすすまない。「今は、女性がズケズケ言った方がうまくいく時代だそうですよ」こういって、場をなごませ、直接的発言をしつづけている私がいる。

これが出るのは、みなさんに受け入れていただいて、人間を恐がるという感覚が私の中から消えたからだとおもう。

「心理学者は人間の心と心の葛藤を見つけてきたのだから、その経験を国と国の深刻な葛藤に役だてなくちゃ。心理学も、世界のために役だたなくちゃ」可愛がっていただいた恩師ロジャーズさんの声が耳のそばです。地球は本当に狭く住みにくくなってきた。小さい国のなかで、ぶつかりながら和を保ってきた民族の知恵が、地球人のために役立つかもしれない。自分を恐れず、人間を恐れず、国家をうとんげず、風通しのいい環境づくりをしたい。

あの、映画少年のように、ひとりの人間として人々の中に、あらためて歩み出したい自分を見つけた。



ゲシュタルト・セラピーの訓練を受けに行っていたときの話(3)

福井康之

「仏の顔も三度まで」という先人の教訓もある、この話もこれで終りにしたいと思う。最後なので、実はこれから書くことを、ほんとうは一番話したかったということを告白して始めたい。と同時に、これは私自身の問題なので、他人が興味を持ってくれることでもないし、体験したことはもう足掛け五年も前のことになるので、過ぎた時代の話を今さらという感じがしないわけでもない。ところがである。

近くの書店に行くと、藤原新也の『アメリカ』という四五〇頁もある本が新刊書のコーナーに数冊積んであった。九月十一日第一刷（初版）なのに、積んである本はもう二刷で

ある。ロスから大陸横断してNYへ至り、南を廻ってロスへと、キャンピングカーで、もっとも、彼によるとアメリカ人はモーター・ホームと呼ぶそうだが、一周りして、アメリカという国を、アメリカ人と接した実感から探っている本である。

パラリとめくって数行読み、また、パラリと繰り返して、はて、五年経っても、アメリカは変っていないという印象を持った。

締め切り過ぎている頼まれ原稿を片付けて、くだんの書店へ出かけた。積んである本の一番下から初版本を取り出して買ってきて、今朝から大急ぎで読んだばかりである。

初版本にこだわるのは、目下、古本屋を周っては、芥川賞と直木賞の受賞作品の初版本を集めている癖がでたのと、コミックと文庫本で占拠されてしまっているおおかたの古本屋で、かろうじてそれ相当の値が付いて書棚に並べてくれるハードカバーの小説類は初版本だけで、二刷以下は二足三文だという事情による。

さて、ゲシュタルト・セラピーの勉強に行ったことは前回報告した通りまじめにやってきたつもり。しかし、これはオモテの目的で、ウラの目的というものがある。秘かにと考えているやつで、案外この方が本人にとっ

て重要だったといふことが多い。しかし、タ
マエを語って、ウラの目的はあまり明らか
にしない。ウラ話とか、こぼれ話といったも
のではない。自分にとっては、こちらの方が
大事だったというやつだ。

それは何かというと、一言でいうと、アメ
リカを自分の目で確かめに行きたかったとい
うこと。こういういい方では人に通じない。
私にとって、アメリカというのは自分自身と
いってよい。これは私と同世代の人しかわか
らないと思う。

第二次大戦が終わったのが、小学校五年生の
夏である。少国民の御奉公の一つとして、小
学校上級生は町内（隣組という各家庭を国家
に組織化している最低単位）の新聞配達を各
自が分担していた。終戦の日は、朝から新聞
販売店（当時は違った名前になっていたはず）で、皆が待たされた。その日に限って
朝刊が販売店に届かなかった。朝七時頃から
正午過ぎまで、じっと店の前の道路の日影に
座って、皆が待ち続けた。何か異変が起って
いるのだという予感があった。敗けるとは
思っていなかった。でも、何か変だった。分
裂病者の古典的妄想である「世界没落感」と
いった感じの雰囲気満ちていたといつてよ
い。

で、例の玉音放送というやつだったわけ。

こちらの方は全然記憶がない。何を言ってい
るのか聞きとれなかっただろうし、解説なし
に判るわけはなかったから。だから、本当に
聞いたのかどうか憶えていない。憶えている
ことは、その日、朝から待っている間の世の
中全ての音が消えてしまったような、あの静
寂、あの静けさというもののだけである。今あ
る私というものは、あの時の静けさというも
のを原点として出発させられてしまった。そ
して、私の中へアメリカというものが怒濤の
ごとく流れ込んでくる。

日本人に生まれてよかったと信じていた自
分が、あの日から、なぜアメリカに生まれな
かったんだろうという悲しみを背負い、アメ
リカ一辺倒にさせられてしまう。アメリカは
天国だった。神様はアメリカにしかない。
アメリカへ行行って来たという人は、まるで天
使のようにまぶしかった。その後、反動的に
世間はアメシヨン（アメリカへ小便をしに行
て来ただけの意）と馬鹿にするようになった
が。

新制中学第一期生で、優等生見習いであつ
た私は、戦後教育の花形であつた社会科に
よって、私のバックボーンを作りあげた。教
えてくれる先生は、何となく心もとないところ
ろがあつたが、好奇心と向学心に溢れた（あ
たりまえである。小学生のときは勉強させて
くれないで、畠の芋作りに炎天下狩り出され

空襲警報で逃げまどい、一冊の冒険小説を借
りるため往復一里は歩いて友だちの家へ行つ
た。）若き魂は、アメリカン・デモクラシー
のエッセンスを直観的にものの見事に身につ
けてしまった。

アメリカに敗けたおかげで出来た新憲法は
世界一理想的なもので、この精神を貫くこと
が、荒廃した日本をアメリカ以上の天国にす
ることができると疑いもなく信じた。と
にかく、アメリカは私にとって大先生であり
われらを導く師であつた。

ところが、この大先生は、わが熱きまなざ
しを裏切つて、マッカーサーを帽子屋の看板
男に格下げし、朝鮮戦争を始めた。日本も右
へならえである。大先生が酔っ払い始めて、
私の内部も分裂してしまった。アメリカ国内
にマッカーシズム（反共旋風）が吹き荒れる。
それと反比例して、私はマルキシズムに傾倒
していく。

面接の初期やグループ・セッションの前半
で、カウンセラーやファシリテーターが矛盾
した態度を示したなら、クライアントやメン
バーは動揺し、不安になる。アメリカは私を
混乱させたまま、ベトナム戦争へと突入して
いく。若者たちの反乱とベトナム敗退。

六十年代後半から七十年代にかけての西海
岸の人間性開発運動に、われわれは、
再び、アメリカン・デモクラシーの甦えりし

不死鳥の姿を認めた。にもかかわらず、八十年代に入って、イスリンは閑古鳥が鳴き、エンカウンター・グループも退潮して行った。

アメリカを超える理想国になるはずだった日本は、アメリカに振り廻されて、行方も知らず波間に漂い、私は五十歳を過ぎてしまった。どうしても決着をひとまずつけに行きたかった。十五年前に二十日間ほどロスへ行き、ラホイヤ・プログラムの一部に参加しては来たが、その時は単に観光客にしか過ぎなかった。

小さい時からのあこがれだったあのアメリカに住んでみたかったのである。これは私にとって、まさにアンフィニッシュト・ビジネスだったのだ。

若い世代の藤原信也君は、新鮮なカメラマンの目で、見事にアメリカの断面を切り取って見せてくれている。しかし、やはり、あくまでも旅行者のレンズを通してではない。彼はマクドナルドのハンバーガーをコークと抱き合せて食べさせられる。大味で不味いアメリカの食事を、女のいなかった開拓時代の人手不足のせいだと彼は論じる。私も、腹を膨らますだけの移動食を、未だに愛用している一群の変った民族がいるのだと思う。

しかし、そこからアメリカを論じると間違える。そこに住み着くと、ハンバーガーを食

べる必要はない。私は電気釜でメシを炊いて十か月食べていた。デンバーではベスの旦那のジョージはベジタリアンで、ハンバーグのミンチ肉を食べない。確かどこかのインディアンの主食だと言っていた小麦粉で作ったらしい薄いギョウザの皮の一廻り大きいやつを焼いて食うのが好物だ。彼は生粋のアメリカ人だ。大抵のスーパードには東洋人や中近東の人のための食料品コーナーはあるし、小さいながら専門店もある。デンバーのダウンタウンには隣り合せて二軒、日本人の食品スーパーがあつて、週一回は買物に行った。

住んでみたといっても、住民登録をしたわけでもなく、^{レジスター}帰化したわけでもない。ただ、デンバーに半年、ロスに四か月いただけだ。わずかな経験だけで論じると客観性を欠く。単なる印象に過ぎないし、そんな見聞は他人の役に立たない。ただ、私にとってどうだったという話にすぎない。以下、そのつもりでお読みいただければ幸いである。

デンバーという地方都市とロスという大都會を比較できる機会に恵まれたのは幸いだった。私の住んでいる松山と大阪といった感じだ。しかし、その違いは日本の比でない。デンバーは開拓時代の遺跡をその周辺に残しており、人情や習慣も中流家庭は良き時代のイングランドの伝統を大切にしている様子で

あった。一方、ロスは見捨てられた大都會の末路の様相を示しており、路上は紙屑が舞い散り、ダウンタウンは崩壊寸前の無人ビルをメキシコ人が占拠し、一階で露店を営業している。一帯は英語でなく、スペイン語の喧騒に満ちあふれている。近辺にある全米一を誇る公共図書館であるセントラル・ライブラリーは、楽しみにしていたのに、その年の春、四月末に浮浪者の失火で全焼してしまっていた。西部最大のカウンティ美術館のギャラリーには、ロスのシンボルの双子ビル一帯が海中に没した様を描いた絵が掲げてあった。

全焼した中央図書館はその絵に面影を留めるのみである。市内に住居を持つ白人はほとんどなくなり、郊外へ移転してしまっている。ロスの中心街は全滅するのかとビジネスマン風の男にたずねてみたら、「なに、北側から建て替えている」とこともなげに言う。アメリカなどと一括して論じられるものではない。

他の都市は推測するだけだが、おそらく都心部へ来れば世界中の食品が入手でき、世界中の人に会えるということだ。今まで会ったことのない人種の人に会えるので、顔を眺めているだけでも結構楽しい。特に、顔に関心のある最中なので、これほど人間はバリエイティに富むのかと関心する。

コーカサス系の青年は世界一の美男子だといわれている。彫りの深い端正な目の美しい顔を見ていると、日本人の顔を外国人はどう見ているのだろうかと考え込んでしまう。

バックして車をぶっつけてしまって、停車したら、後ろから巨漢がやってきて、まず、あなたは何人かと聞かれてしまった。日本人は、東洋人一般と見て区別できないようだ。日本の仏像にあるような顔をした人間が、細くくると曲ったナマズのヒゲの様なものまでがそっくりなので感心してしまった。そうだろうと思うだけで、分類学者でもないのに、人種がはっきりしないし、混血も多いだろうし、人種の差というより、個人差の著しい人たちの集まっているところと考えるようになった。もっとも、この個人差にはその個人の持っている価値観・行動原理というものが、各国の伝統的な文化に深く根ざしているのので、各国の文化に通じていないと解らない。そんなことは出来ない相談だから、結局、その個人を通じて、その国を知ることになってしまう。

に通った。このときは、まだ車がなくて、バスを乗り換えて通ったのできつかった。ここで正規に入学している各国の若者たちと出会う機会が持てた。

アラブから来ている学校の先生がいて、煙草を喫うので、日本の煙草をあげると持てなかったらしいという。聞くと、今、断食期間中なので喫わないという。モーツァルトが好きだという子は、一週間ずつまとめて母親がドイツの新聞を送ってくれるといっている。赤毛の陽気な子はフランス人だというのが、南米から来たという。イスラエルから来たという子は他人としゃべらないが、私に近づいてくる。日本の大学へ行きたいのだそうで、日本のほうがアルバイトをして暮すには、アメリカより楽だという情報を確かめたいので、アドバイスしてくれという。日本の若者もいて、国立大学の入試に失敗したので、こちらの大学へ入るのだという。コミュニティ・カレッジは入試がなくて、だれでも入れる。教養過程に単位を揃えて、普通の大学へ編入する手があるという。

の子もいて、学校制度の柔軟さにも感心する。課外にボランティアの人が話し相手に来ていて。その一人で、神学を専攻した独身の神父希望の三十歳くらいの男はホットライダースらしく、完全装備のデカイBMWのバイクで、国内だけでなく海外までぶっとばしに行っているようだ。

要するに、さまざまな人がいるということだ。日本で日本人だけにつきあっていると、他人も自分もあまり変りがないので、違った意見を述べると異端視され、感情的な反発をされる。「和を以て貴し」とする聖徳太子来の日本人人間関係の原理の生きている中で、人はそれぞれ違うのだという前提の発想は生まれにくい。

アメリカン・デモクラシーの根本原理は、それぞれお互いに違っている人間同士が相互理解するため、十分論議を尽くして、相手の立場を尊重しながら、全体として一致して何かをやるためのコンセンサスを得る知恵である。最終的にどうしても一致が得られないときに、多数決で決めざるを得ない。

日本では、多数決の原理はすでに決まっている結論を承認させるための手打式の代替となっている。集会では提出される原案に賛成の者だけが集まる。会議の定数が決まっていたり、組織のメンバーで会議をするときは、

前もって過半数の人数になるように根回しがしてあり、少数派は前もって何も知らされず、会場で議論をしようとしても、発言の機会が封じられて、すぐに多数決で決めてしまう。会議は議論する場所ではなく、手打式の会場としてしか機能しない。人の意見を聞く耳がないので、事柄を多角的に見る眼が育たない。少数派は議論することを断念して、ゲリラ戦術に頼るしか道はない。

戦後世代のわれわれの力の及ぶところでない。日本には個人がそれぞれ違うのだということから出来ているデモクラシーの理念が、そもそも育つ土壌というものを持っていなかったというわけだ。がっくりときてしまう。国際舞台での日本人の活躍の場合は、あらかじめ方針を決めてゴリ押しするには人数が足りないのです、大国の方針に追従するしかなく、一方は、少数ゲリラ派として、赤軍派のように令名をはせるしかない。

そうなるってしまいうもう一つの大きな違いを発見してきた。どこの公園に行っても、料金を払うようになっていく。公園といっても、日本の街角にある子どもの遊び場のたぐいではない。大抵は大きな湖の周りに緑地帯があり、家族連れでピクニックなどをしている。キャンプ場で料金を払うのは、それ相当の設備を使用する料金だと納得は出来るが、公園

を散歩するだけでも、湖で一日中泳いでいても、料金は同じで、およそ三〜四ドルくらい。入り口に監視員が居るところもあるが、居ない入り口には料金の箱があり、規定通り自動的に料金を入れる。国立公園でも同じで、一回五〜六ドルする。しかし、年間の利用券が一〇ドルで何回でも行ける。それはいいとして、次のように書いてある。「この公園はわれわれのものであり、われわれで維持しよう」と。すなわち、日本のように税金のみで維持していい。それが必要な人は、その責任を分担し、使わない人まで巻き込まない。必要ならご一緒にどうぞというわけ。

公園へよく釣りに行った。釣る場所は指定してあり、そこ以外では、いくら魚がいても釣ることはできない。それぞれの目的のために場所が保障されている。鱒を釣るのが主たる目的だが、なかなか釣れない。一日いて一匹釣り上げれば上首尾。釣りあげた人はうれしくて、見物にくる人毎に見せて大騒ぎしている。収獲より釣ることを楽しんでいる。通りかかる人は必ず立ち停って、釣れているかと思えるのは日本と同じ。釣餌といっているのはミミズのことで、この餌は何でも釣れる。キャット・フィッシュという猫の顔をした魚、実は鯰のことだが、これがよく釣れて困る。市街地近辺の池は入場料なしで、子どもたちがこの魚をよく釣っている。夕方

になると池の周りを散歩する人やジョギングで何周もしている人などでにぎやかになる。

ロスでは桟橋から海釣りをする。釣る場所はやはり指定してある。ピヤは本来遊園地なのだ。まず擬餌針でイワシやアジなど餌になる小魚を釣る。それでタイやヒラメなどを釣る。冬期だったのでシーズンオフで釣れなかった。釣っている人はいるが、釣れても小さいと「来年会いましょう」と逃してやる。

火力発電所のそばの海岸は冬でも水温が高いので魚が集っており、四十〜五十センチくらいの鯖が、イカの切り身で入れ食いで釣れた。不味くて食べられたものでないので始末に困った。モーターの作業員のメキシコ人が欲しいというので、丸ごと冷凍しておいて、毎日煮て食べるという。道理でそのような人たちが、ドンゴロスの袋に何杯も詰めて車で運んで帰っていた。関係のない話が続いた。

居住地区を珍らし気にウロウロ散歩したりしていると、必ずといってよいほど声をかけられる。何をしているのか、何処へ行くのかと。三月末、着いたばかりのロスで、ヒマワリが咲いていた。珍らしいので写真をとっていたら、何をしているといわれた。「サンフラワーが季節外で珍らしい」というと納得して、うまく撮れという。

歩いていても、ただ通り抜けるだけだと正直に返事をすれば、すんなりと納得してくれる。言葉で表現したことを信頼し、責任を持つという大らかなところは樂觀的だが、個人の権利が侵害されたり、危険を防止するということを自分たちで当然やるという姿勢には感心した。暴発事故が頻発するので禁止の方向にあるといっても、銃を所持しているということと体が、その姿勢を示している。ポリスなんかをあまりあてにしていない様子である。日本人は自分で出ていって確認しないですぐに警察に電話する。日本のテレビの刑事物は、素人は手出しして怪我をするな、事件は警察に任せ一辺到で、アメリカのテレビはアクション売物だが、ポリスは素人離れたプロの腕が見せ物になっている。

人をあてにしないで、自分でやるということが徹底している。しかし、協力してやる必要があるので、地域で生活するには近隣とのつき合いに熱心だ。対等な立場で協力するわけで、地域の有力者に挨拶に行くとか、仲間に入れてもらうからには、ここのしきたりに従いますと下手に出ないといじめられるのは日本だ。アメリカ人は気にいらなければすぐ引越をする。引越すとハウス・ウォーミング・パーティを開き、近隣と早く仲良しになりたいという意志表示をする。パーティ

好きというのではなく、パーティは必要性からやる。

子どもを学校へやる時も、学校は入学前に見学会を開き、親はいくつかの学校を見学し、方針の合う学校へ子どもを入れる。日本人は住んでいる場所に自分を合わす。アメリカ人は自分に合ったところを探して住む。もっとも経済的にそうはいかない人もいるだろう。しかし、皆で決めていることは守る。

スーパーへ買物に行くと、レジで相当待たされる。皆、気長に順番を待っている。何しろ何日分もまとめ買いするので、手押車のカゴに溢れるばかりで、計算したら、小切手で払うから、身元確認のカードをチェックし、払う方は金額とサインを記入し、割引きのクーポン券があり、手間のかかることおびたらしい。キャッシュだけとか一〇点以内とかのレジも設けてある。

ある日、一〇ドル以内と標示されたレジで、若い女の子が毅然とした態度で、一ドルと何セントかオーバーした男に、受け付けを拒否していた。男はたかがといった様子でねばっていたが、ついにあきらめて、別の行列の後へすぐごと引き下っていった。こういうとき、他の客のまなざしは女の子を支持し、男を非難しているのが、何といっても気持がよい。すでに計算済みなのだから、そのまま通してしまっただけが拒否しているより時間が早

いにもかかわらず、断固通させない女の子の態度に好感が持てる。

買物が多いから、サービスに店員が袋に次々入れて、手押車に積み込んでくれる。そのときに必ず毎回一人ひとりに「ペーパー・オア・プラスチック」と聞く。初めてのとき、何とことかわからなかったたので、モタモタしていたら、詰める袋は紙袋かビニールの袋か聞いているとのことだ。どちらでもよいようなものだが、客の考えを尊重している。帰って帰る便利さだけでなく、無駄な紙を使わない主義と石油製品を乱費しないし、燃えないゴミを区別する主義があるわけだ。ゴミの回収のため、住宅街の街角には小型のコンテナが置いてある。新聞紙などは別のコンテナと区別して入れる。ゴミ回収の費用も地域費として、家賃と一緒に払う。

それぞれが自分の信念にもとづいて生きていくように、他人の信念を尊重する。これが自由というものだと思う。自由とは他人を尊重することだ。銀行や郵便局へ行く機会は多い。トイレで順番を待つ時の日米の違いとして指摘されているが、日本ではそれぞれの窓口で別れて順番を待つ。運が良ければ、別の列で先に待っている人より早く済むことがある。アメリカ方式はそういうことは起こらない。列をつくる順番待ちの場所があり、空い

た窓口へ、一列に並んだ先頭から順に行くので不公平がない。番号札をくれて順に空いた窓口のところへマイクで呼び出すというところもある。ビザの書き替えに行ったり、車の登録に行ったときもそうだった。スーパーで肉の秤り売りを買うときも番号札をくれる。

アメリカ人は行列好きとか、呑気に待っている見えるが、そうしていることが最も公平で安心していられるという保証があるからだ。レストランでも、最近では日本でもそういうところがあるが、入り口で待って案内してもらう。いくら人が待っているようと、食事している人は悠然と自分の権利を行使している。気長に待っている人も自分の権利が来るまで、他人の権利を尊重している。上役が病気にでもなったら退めれば、自分が課長になれるのになんて考える日本人とはえらい違いだと思う。お互いに個人の権利を尊重するという精神構造の違いだろうか。

際限なく例証が続くそうなので、話を飛躍させる。日本に居てアメリカを見ている限りわれわれはアメリカを国家としてしか見ることはできない。そこに住んでいるアメリカ人は国家と対立している。国の権限は小さいほどよい。国家の権限を制約するために、とりあえず州単位でものごとを決めている。

国民の祝日は決まっていますが、二月十二日のリンカーンの日は南部諸州では休まない。

帰りぎわのロスにいるときだったが、一月十五日は黒人の権利擁護の主張のため暗殺されたキング牧師の誕生日で、祝日にしよう、そのときは、州単位でもなく、各自の職場で休むかどうか意思表示することになっていた。休むところは張り紙をしていた。国中が一致してやるということはないのだとしみじみ思った。何事も国会で多数決で決めるという政治のルールが民主主義の根本だと思っていれば、逆なのだ。個人が意思表示をして決めるシステムを作り、育てていくことが第一義であって、代表が多数決で決めるのは止むを得ないからそうしているに過ぎない。できれば、そうしたくないのだから、批判的になるのは理の当然ということだ。

ベトナム戦争で、アメリカが敗退したとき、自由主義諸国が敗れたと思ったが、そうではなかった。アメリカの国家、すなわち政府の政策が国民を裏切ったのが原因だ。その時期、アメリカでは家族の崩壊が進展した。国家の基本単位としての家族が見捨てられたというわけだ。

ちょうど、アメリカでは、家族の崩壊というより見直しが行進し、その余波で、子どもたちの家出と誘拐や性的虐待が社会問題になっていた。アメリカで生じる社会事象は十年後の日本に生じるというジンクスがあっ

て、今のアメリカを見ておけば、十年先の日本が予測できるのではないかと、出かける前は期待していた。日本でも今後ランナウェーが生じるだろうから、その対策をどうすればよいか調べて来ようというわけだった。このジンクスはもう意味を失って、せいぜい二三年後くらいで確かに生じるものもあるという程度のものだと判った。ランナウェーの問題は、日本とアメリカの国家構造が違うので生じないと思っていたが、アビューズの問題はすでに宮崎の事件が生じた。

到着してロスで一週間ウロついていた間に、子どもたちに声をかけても、皆逃げて行く。怪しい人の誘いに乗らない教育の徹底しているのには感心した。その後、書店や玩具店でのこの種の本が多くあるのを発見した。すでに三歳くらいの子どもから、怪しい人が来たらどう逃げるかの訓練の手引書がある。親がいろいろの場面を想定して、特に父親が怪しい人を演じて、どういわれるとどう答え、どう逃げるかをゲームの形で実習する。

買ってきた本に“Protect your child”というのがあり、今見てみると、信頼できる人としてでない人を見分けるテストが載っている。例えば、近所を歩いていて、停っていた車に人がいて、親の許可なしに乗ってよいのか？体に触って秘密の遊びをしようという人があったらどうするか？とか、具体的なもので

ある。

親だつて信頼できない。何故なら、義理の親と住む子が増えているからだ。立ち読みした本で、ショックを受けたが、同時にウーンとうなった記述に、母親の連れ子の子どもへの忠告^{アドバイス}というのに「君の父親が君を大切にしてくれないからといって悲観するな。君の新しい父親は、君の母親が好きだから結婚したのであって、君が好きで結婚したわけではないのだ」と書いてあった。

子どものときから、こんなにきびしいからこそ、懸命に住みよい社会を願うわけだろう。お互いに助け合つていける友だちを得ることを大切にするわけだ。だれかに頼るという生き方は社会から拒否されている。アメリカ人はだれでも、ちよつと親しくなると友人^{フレンド}だという。友人の多いのが自慢だ。日本人はどれだけ自分が有力者や権威のある人を知っているかを自慢する。対等な人間関係を大切にしているか、人を頼つて生きるかの違いだろう。受け身でなく、他者を思いやり、愛するというポジティブな態度になる。

青年たちは微笑ましいほど胸を張って、肩をそびやかして歩いている。日本へ帰つてきて、東京の街を歩き、まっ先に気になったのは、日本の青年がひざを曲げて、前こごみによろけそうにガクガクと歩いている姿だった。渡辺和博君の説を敷衍化すると、新人類とい

う病気を流行させた「おたく玉」というのが、宇宙のいづこから東京オリンピックに参加して、生まれたばかりの赤ん坊たちにとり付き、私がアメリカへ行っている間に、東京から全国津々浦々へ害毒をまき散らしていたようだ。筆が滑つていけない。

いくら保守的で変化の少ないアメリカだといつても、七十年代始めから八十年代の後半の頃までの十五年間に何が変化したのかという関心と、何故にエンカウンター・グループが衰退したのかを重ね合せて考えていた。

アメリカでベストセラーになったという『アメリカン・マインドの終焉^{クロウニング}』を拾ひ読みして、一つ気が付いたことは、二十年前のアメリカでの性の解放は、案の定、今に至り、女性の物化という結論に到達し、フェミニズム運動の進展とともに、追放の憂き目にあったということだ。ハリウッドにはボルノショップは影をひそめ、トップレス劇場は観光用にほんの片隅に追いやられてしまっていた。

男女差別の撤廃はセックスの問題なのではなく、ジェンダーの問題として、正確に認識されるようになった。たとえば、社会的に男性が従事している職業は全ての女性に開放されるべきであることは当然として、女性のできない職業や男性の独占していた職業は消滅すべき運命にある。軍隊や危険な肉体労働、

プロスポーツなどの女性に不利な技能を必要とするものはやがてこの世から姿を消す方向をたどる。アメリカの女性たちは女性の権利を獲得することに通じるあらゆる差別撤廃を叫び、実現してきた。日本ではこの問題はこれからであり、十年は遅れている。道で出会った黒人女性の自信に満ちた光り輝く美しさに、この十五年の変化が象徴されている思いがした。

エンカウンター・グループの衰退は、もうアメリカではその役割を終えたということだ。初期の頃は女性が自からその性^{セックス}を解放することも、受け身でなく、ポジティブに対等に男性との人間関係を持つという姿勢を定着させる手段として意味があった。

人間性^{ヒューマン・ポテンシャル・ムーブメント}開発運動は人間の可能性の追求ということであつた。理念的には今もあらゆる可能性の探究として意味を留め得るが、当時は何の可能性を人々が求めているのか、目的の不明確なまま、手段が先行している運動であつた。その手段から目的が湧出してきて、一切の社会的慣習や抑圧への反発といった姿を運動の目的と信じさせた。今になって解ってきたことは、おそらく、かつて人類が必要としなかった可能性、すなわち、男性に不要だった優しさとかいたわり、あるいは慎しみ、気遣い、繊細な感受性等々、女性の特質とされたものの、一方、女性には抑圧されて

いた率直な表現、大胆さ、勇氣、放縱、自活、冒險心、豪放闊達等々、男性の美德とされた特性といったものを開発することにあつたのだ。

生物学的な役割としての性差は残存しているても、女性同士でも、男性同士でも、あるいは男女間でも、その関係には性差のない相互対等で平等な人間関係を形成し得る能力の開発だったのだ。それを達成するためには、男女の性差を問わず必要な自他・相互の理解、相互の尊重、受容の能力、共感性、積極性といった能力の開発が当然含まれていた。

自己愛から脱脚し、責任を担える主体となる自己変革、他人とコミットする能力、嫉妬や所有欲の放棄等々をも包括して「自己実現」と称していたわけだったのだ。

人間性開発運動がアメリカ社会へ果していた役割が終り、人種、男女、職業、学歴、収入、市民権等々の一切の差別撤廃運動へと発展的解消していく過程の中で、エンカウンター・グループも運動として役割を終え、同じ運命をたどったといえる。運動の中に取り込まれていたさまざまなサイコセラピーの流派は、本来のそれぞれの立場のセラピーの実践と新たな理論化へとグループ・アプローチが再統合されていっているのが現状であるといえる。

日本でのエンカウンター・グループは運動

として展開されたわけではないので、グループ・アプローチの技法の導入という形での関心と実践は、人間関係の調整や促進の技能習得の場として活用され続けていくだろうと思える。

エンカウンター・グループをリードしてきた日本の世代が、アメリカン・デモクラシーの洗礼を受けた世代であるので、閉じられたスモール・グループといった世界の中で、自己陶醉していないように、これから、どのようなグループをやっていくけばよいか、新たな問いかけをしていく必要があるだろう。

少し長く書き過ぎているようだ。私にとつてのアメリカ体験が、あの終戦の日の静けさからの出発をどう整理して結着をつけるか、まだまだ違った角度から書き綴りたいことも多く残っている。しかし、とりあえず、今、言っておけることは、出かけるまで持っていた私にとって父親像のようだったアメリカのイメージが、住んでみて、その国の人々に触れることにより、その本心が理解できるようになって、青年が親を一人の人間として見られるようになるように、私自身が思想的に自立していくための人生の旅の展望台からの眺望の機会だったということだ。

私には、うすうす気付いてはいたが、まだ他人を思いやる暖かさが不十分だとか、孤立

を恐れず勇氣をもって行動することから逃げているといったことなどがいくつかあることが解った。残った人生で一つずつやり遂げていきたいと決心して帰ってきたにもかかわらず、一向に実行できていないではないかと自問することしきりである。

真直ぐ胸を張って歩かず、前かがみで踴躍とよろめいて歩いているところみると、そう簡単に結着はつかないものだと思える。アメリカからの借りものだったバックボーンが、これを機会に自分のものとなるように、これからの人生を生きることに、再び、いつか地球のどこかの地点に立って、新たな眺望をする日の来ることを祈りたい。

(了)



〔訂正〕連載第2回(No.11)27ページ中段5行目④RetrojectionはRetroflectionの誤記でした。

「夢」を巡り歩いて（二）

一、舞踏ということ

仙台の天守閣自然公園で開かれた第四回蟬丸舞踏合宿^①に参加したが、これで私は連続三回目の蟬丸合宿体験となる。朝六時から夜の六時までの練習、まる一週間の肉体訓練、一日に二回の玄米粥、味噌汁、サラダの食事……。ただ、今年は蟬丸が中心になって結成した黒藤院（こくとういん）という舞踏集団の旗上げ公演の準備もあって、例年と比べると蟬丸自身のエネルギーは合宿よりも公演の方にかかっていたようだが、それでも合宿の内容はしっかりと「肉体訓練」ではあった。

だが今回の合宿では、私の関心は合宿の中身よりもむしろ、自分の属する舞踏集団「古舞族アルタイ」の第一回東京・大阪公演^②の

葛西俊治

成功とその他の身体訓練の方にあった。アルタイの主催者・小島一郎自身は、暗黒舞踏の土方巽の系譜にある「北方舞踏派」の生き残りとして、小樽の地に居を構えながら十年以上の舞踏生活を送ってきたが、数年前から開始した「古舞族アルタイ」という集団を率いての公演は一昨年の一九八八年に始まったばかりだった。私は一九八九年の三月からアルタイに籍を置き、研究生発表会とそれに引き続き北海道公演（私は室蘭・札幌・小樽での舞台に参加）を受けて企画された東京・大阪公演は、主催者の小島にとっては勿論、駆け出し舞踏手としての私自身にとっても大イベントといえた。

公演に向けた定期的な練習と同様に、蟬丸合宿も重要な練習の機会であったが、そのほかにも小樽運河付近や札幌のビヤ・ホールなどでのパントマイムの実演や、投げ銭を拾いながらの路上での白塗りパフォーマンスをこなしながら、私にはどうしてもこの東京・大阪公演には出なければならない、という一種強迫的な思いがあった。さしあたりは「挑戦」という言葉で片が付くのだろうが、別にT O

KYOの観客や舞踏評論家とかに「挑戦」するつもりはなく、ただ自分自身の「夢」を舞台という公衆の面前でただだけ生きることが出来るか、という「挑戦」であった。

*

……ひどく恐ろしい。

今自分が夢を見ていると知っていて、まだ見ぬ前の夢に私は恐怖している。何一つ形をなさないが、恐ろしさに身体が固く冷たくなっているのを感じる。

起きようか?!と思うが、身体はもう動けなくなっている。

一体この恐ろしさは何なのか?どうしてこんなに私は怯えているのだろうか……。

しかし、無理に目を覚まして起きてもその恐怖からは逃げられないと観念した私は、諦めて夢を見ることに決心した。

すると……途端に夢が現れた……。

真っ暗い闇の中に、机が一つある。

片袖に引き出しのある木の机だが椅子は見当たらない。

恐怖はますます大きくなる。

机の上を見ると、小さな写真立てが反対向きに置いてある。



その写真立てに入っているものを見れば全てが分かる、と私は知っている。

恐ろしさに体が縮こまる。

もうこんなことは止めてすぐに目を覚まそうと思う。

しかし、体は動かない……。

何度も迷った挙げ句、机の向こう側に行くことを決心する。

向こう側に回って、写真を覗き込むことを決心する。

そして……

夢の中の机の周りを回ろうと思った途端、写真が数百倍の大きさになって私の前に出現した。

無表情の女の顔が私の視界をおおった。

……全ての感情が停止した虚無の顔……

……真っ黒い目が私を見つめている……

無表情の顔に隠された憎悪が、逃れることの出来ない恐怖となつて私を圧倒する。

胸が締め付けられ息が苦しくなった私は、目をあけて跳び起きた。体ががたがたと震え、身体中にびしょりと冷たい汗をかいている。

薄い夏掛けではもぐり込むことも出来ず、恐ろしさに怯えてうずくまったまま、目を必死に開け続けて明るくなるのを待った……

……

「僕、セのつくもの知ってるよ」

母は叔母の手前もあって、私に素早く目配せする。

「ランドセルだよ……」と子供の私は言うが、本当はセムシが答えなのだ。

風呂上がりには飲むカッゲンが楽しみだったのはまだ覚えている。

叔母に連れられて近くの銭湯に行くと、子供の私は叔母と一緒に女湯に入った。他の大人達に混じって洗い場に座っている裸の叔母の姿は、私にはまるでツルのように見え、いつも不思議でならなかった。

*

私のソロの踊りは、裸体に全身白塗りをし、アルタイ主宰者の小島の指定したように石膏で固めた白い下着を腰につけた状態で踊るのだが、それは自分にとっては実はどうでもいいことだった。私が願っていたことは、そういう舞踏的演出とか表現とかには関わりなく、関節がねじ曲がり筋肉が固まりぎこちなく変形する私の身体をそこでただ生きることだった。

昨年の北海道公演以来の私のソロの踊りは、多少の変更があったけれど、実質的には特に振りつけもない、ひたすら身体が捻れ動くのに任せただけの代物だったが、それが「成功」（公演での演目として）だったかどうかは分からないし、そのことにもあまり関心はない。あるとき、評論家だったか詩人だったかが、あの動きで何を表現しているのかと尋ねてきたことがあった。私は「特に何も表現するつもりはないです」と答えたが、それからの話が全く噛み合わなかったことは言うまでもない。ともかく、東京公演にわざわざ出て見てくれた舞踏通の知人から「あの奇形の踊りはよかった」と真正面から言われたとき、私はほっとして思わず涙がにじみ出てしまった。夜、一人で何やら身体を動かしていると、しまいには骨格

や筋肉を歪めながら捻るように身体が動き出していくこと、それが「私」ということでしかなかったから、そういう異様さをそのままに受けとって貰えたことが無邪気に嬉しかった。

二、からだのリアリティ

心の問題から「からだ」へと関心が移ったのは、「こころ」について考えたり、悩んだりをしていて、そういうことを続けてきて「だからどうなんだ!？」という疑問があったためだと、今ならば言える（……少なくとも口先だけでは）。自分の小さい頃からの傾向だと思うが、いつも「頭」「心」とかの自分自身のことにかまけていて、いっこうに「外部」「他者」「世界」へと出て行かないことが気になってはいた。いつまで経っても悩んだり苦しんだりできる……そういう意味では、心の苦しみは自分自身がそれによって生きている実感を得ることのできる一種の「傷口」という楽しみのように見えてきていた。

勿論、そういう苦痛・サガを背負って生き続けて行く人もいて、それにもひどく共感してしまう。だが、ある時、私は自分の「苦悩」が「からだ」によって透かされて以来、悩み苦しんでいること自体のリアリティをふいに失ってしまった……のかもしれない。

一九八二年の夏、私は本当に偶然にも、すなわち、特に参加できるような資格も特徴も何もなかったにも関わらず、カール・ロジャーズのワークショップに参加させて貰えることになった。

ロジャーズ本人とは、しかし、エレベータの中で遭遇して、私が着ていたTシャツの英語が読みにくそうに尋ねてきたことくらいし

か起こらなかったが、私はロジャーズやヒューマニスティック・サイコロジに惹かれて集まってきた人達と話をし戯れることで十分に集まりを満喫していた。そういうワークショップの最中の私にとつての最大の出来事は、竹内敏晴に出会えた(遭遇した……と書くべきだろう)ことだった。

あるセッションでは、三人で組を作り、互いにカウンセラー、クライアント、チェック係になって傾聴や介入の仕方について実習するということが行われていた。私は偶然にも竹内敏晴と中年の女性と組むことになった。

クライアントとしての竹内敏晴は「渴えること」について深く静かに語っていたが、私にはカウンセラーとしての訓練も技術も何も存在せず、黙って耳を傾けていただけだったと思う。

役割が交替して私がクライアントとなった。話し出すうちに、語る内容が徐々に「夢」のこと、叔母のことへと移行し、私はしまいには随分ひどく嗚咽していたようだった。そんなとき、上体をやや前屈みにして聞き入っていた竹内敏晴がふいに身体を起こしながら私の肩に手を当てる。「もう少し身体を起こすように」と静かな声で諭した。上体に息が入るように……と言ったかどうか記憶では定かではないが、そんな説明もされたように思う。

私は諭された通りに上体を起こした。すると、会場の壁、床、窓、椅子や机などの事物が、記憶の中に潜り込んで泣いていた私の生々しいリアリティとは全く無関係に、ただ静かに「そこに在る」こととして突然目に飛び込んできた。海中に沈んでいたものが急に空中に浮上したように、何か別世界に突入したようなショックがあった。目に入ってきた冷静な事物の存在に私は呆氣にとられ、嗚咽も引込み、もう涙の流れ出てくる心境にもなかった。それまで「気持ち良く?! 嗚咽していた」自分というのは一体何だったのだ

ろうか……そういう疑問としてこの体験が固定されるまで、このときの衝撃はしばらく尾を引くこととなった。

A・シュッツの多元的現実論という見方に触れたのはそれからすぐ後のことだったと思う。多重に存在するリアリティ間を飛躍(fly)しながら我々は生きている……という指摘は、私にはすっと胸に収まることだったし、そういうようにして、自分にとっては苦しい「世界」から風のように抜け出てしまえる……という軽さが有り難かった。勿論、「抜け出る」と言っても、たんに逃れているだけに過ぎない、と指摘されれば全くその通りなのだが、胸の中に僅かでも軽々とした「空間」を維持できるということは、ややもすると直線的にしか物事を捉えられない自分には貴重な視点であった。

そして、「からだ」ということが、たとえ「こころ」ということからの逃げでしかなかったとしても、触れることや動くことを通じてこの手や足や身体に響いてくる他者や事物の確実な手応えは、私にとって一つの確かな「リアリティ」の世界であり、生々しく豊かな世界として一挙に展開して行くこととなった。

三、こころとからだのレッスン

ロジャーズのワークショップ後、何度か竹内敏晴のレッスンに参加する機会があった。その後、たまたま同様な関心を持ち始めていた数人の仲間と一緒に、野口体操や竹内敏晴のレッスンを実習するための集まりを始めることになった。迂余曲折は随分とあったのだが、この集まり以降、会の名称や形式は様々に変わりながら、私はそういう体験の場を運営して今日に至っている。

ところで、集まりを始めてしばらくすると、野口体操なり竹内敏晴のレッスンではない自分自身の考え方・方法が次第に醸成され始めた。それまでのレッスンや運営についての疑問、自分なりに了解できることとできないことなどが徐々に積み重なっていった結果、ある時点で転機が訪れることになった。

呼び掛けのレッスンを試みていた時のことだった。二十歳くらいの女子大生が三十歳くらいの男性の背後から声を掛け、もし声が「届いていたら」その男性が振り返る……という設定のレッスンを行っていた。場に立った二人を除いて、他の参加者達は周囲に座ってレッスンの展開を息を吞んで見つめていた。

そのレッスンに入る前に相当念入りに野口体操などを行ったせいだろう、その若い女性は畳の上に咲く柳か海藻のように天井へとフワッとぶら上がった態勢にあった。そばから見ていても感受性が身体一杯に開いているのが分かるほど、その女性は柔らかくしなやかな呼吸の中にあった。多分、そういう身体の緩みと優しさという普段とは異なった身体の在り様が効いたのだろう……何度も呼び掛けでも一向に振り返ってくれない男性の背後に立ちつくすうちに、その女性の身体が徐々に震え出してきた。呼吸も荒くなり、長い間合意をとってようやく発せられる呼び掛けの声もおののき震え出し、一つの限界が近付いていることが見え始めてきた。

「危ないぞ」と私は自分に警報を出しながら立ち上がり駆け寄るのとほぼ同時に、その女性は突然キーンと叫びながら畳へと崩れ落ちた。聞く者の耳に突き刺さる脅えきった叫び声だった。すぐに飛び出してきた何人かで抱き支える腕の中、眼差しも表情も固化したままその女性はブルブルと震えていた。ふいに、彼女と一緒にきていた若い女性が「……」と、よく聞こえない声でつぶやきながら、座ったその場所でも急に崩れ落ち始めた。そばに寄る間もなく、その

女性は目を見開き、腰が抜け崩れ、指先と手がマヒしたように奇妙に硬直し始めた。

たまたま参加していた整体やマッサージの心得のある人の協力を得ながら、その二人を何人かで抱きかかえながら暖め、触れ、マッサージし続けた。数十分もそうしているうち、呼び掛けをしていた女性は次第に血の気を取り戻してきたが、それを眺めて崩れ落ちた方の女性の硬直とシビレはなかなか去らないでいた……。

ワークという場では、様々な人が様々な感じて動いて行き、自らの考えと感受性と性癖とで何事かを失い、あるいは何かを学び手に入れて行く。その中であって場面の展開、促進に携わっていた自分には、しかし、参加者全員に神経を配るなどの能力のないことは最初からはっきりしていた。私が辛うじて行ってきたことは、せいぜい、危険なことを注意を払って最悪の状況でもその人のそばに「居る」ことくらいだったが、その緊張も激しい疲労をもたらし、ワークが終わってからの一週間ほどは毎日のような下痢と睡眠不足にさいなまれていた。また、最初は自分自身のための「体験学習・実習」の場として始めながら、実際にはいわば促進者と参加者という明確な役割分担も固定化し、気が付かないうちに当然視された「責任」も私には荷がかちすぎていた。

そんな状況に陥りつつ、自分にはより深い体験とか修行とかが必要だということが深刻な事実として現れてきたとき、私はその集まりから降りることを決心した。

四、夢の中へ

それまでのワークなどの活動を停止し、ぶらぶらとした状態が続いていたとき、「山海塾・蟬丸舞踏集中合宿」という案内に出喰わした。最初は舞踏という言葉には不気味なイメージを抱いていたが、野口体操なども練習として多分組み入れているに違いないと考えて、「肉体訓練」という目的には年齢的に躊躇しながらも「合宿」に飛び込むことにした。一週間の合宿で約10kgの体重減を経験しながらなんとかやり抜いた過程で、「舞踏」ということが自分の胸にすくと収まってくる気配を感じたのだが、それ以降、私の生活はまさに舞踏三昧ということになった。

土方巽の著書も最初のうちは只の狂人の寝言のようにしか読めなかったが、舞踏の練習を続けているうちにすこしは身体ということが見え出したのだろうか、まるで暗合を読み解くように意味が一举に閃くことが起こるようになった。……「はぐれた身体を取り戻すこと」「犬の静脈に嫉妬すること」「舞踏とは必死に突っ立った死体である」……。ただの無意味綴りの文章がキラキラと輝いてくるのは本当に愉快な、そして幸せなことだった。勿論、土方巽の本意を捉えていたかどうかは分からないが、それこそ「はぐれていた」自分がようやく他の人間に見つけて貰えたような安堵感に満たされ、舞踏の記事を読むときや練習をするときに私には至福の時間となった。

土方巽が生まれ育った風土の厳しさ。田の畔に放置された小さな



籠に入れられ、折り畳まれたまま感覚を失いどこかに消失してしまった赤ん坊の脚。無い脚を探す根深い恨み。片足が三センチ短いという土方巽の足……。

そういった記述に私はどうしてなのか懐かしさと優しさを感じてしまうのだ。手首、肘の間接がやや変形し抜けがちな私の腕が共感してしまったせいかもしれない。あるいは、ツルのような姿態で銭湯の洗い場をゆっくりと歩きながら子供の私を洗ってくれたオバのイメージと共感するせいかもしれない。そんなとき、私はつくづく、舞踏に、そして、土方巽にイノチを救って貰った……と思うのだ。

私は今、「舞踏」という夢の中にいる。この世には実在し得ない夢の中に深く深く眠り込み、その安らぎの中に憩っている。いつ目覚めるのか、いつまでたっても醒めないのか、そういうことも今は問題ですらない。butohという土方巽の夢に抱かれている私はそのままで幸せなのだ。

「現実」よりも深い夢の中へ向かう……

註

- 1) 山海塾・蟬丸第四回舞踏合宿 仙台天守閣自然公演 一九九〇年八月十八〜二十五日。
- 2) 古舞族アルタイ第一回東京公演 日暮里サニーホール 一九九〇年九月二十七日
同第一回大阪公演 LOFT PLANET 一九九〇年九月二十九、三〇日。
- 3) 雑誌「ENCOUNTER」一九九〇、No.一一、四九〜五〇頁からの抜粋。

思い出すままに

幸野 美雪

一九七〇年（昭和四十四年）、関西カウ
セリングスクールに通い出したあの頃の生き
生きとした感動はいまだに忘れることはでき
ません。それまでのどの学校の授業よりも魅
力的で、講義のある日が待遠しく思えました。
幾つかの疑問が自分の中で整理され、納得さ
れて、栄養になってゆく実感の素晴らしい勉
強。それが私とカウセリングとの出会いで
あり、今の人間関係研究会の発祥の頃との出
会いでした。カウセリングスクールの事務
局の方から「京都の人で、畠瀬先生の事務局
を手伝ってくれる人を頼まれているけれど」

のお話を即座にお断りしました。私は主婦で
若くもなく、事務的才能は特に無いように思
うと辞退致したのですが、封筒の宛名書き位
でいゝそれにグループに参加できる（これは
無理なことでした）と云う魅力にひかれてお
受けしたようなことでした。

思えばこれが私の生涯の大きな宝となる沢
山の出会いを頂くことになったことを思う時、

感謝の思いで一ぱいになります。事務局の八
年間、夢中で唯先生方のおっしゃる儘につい
てきたことです。畠瀬先生御夫妻、谷口先生
には、手とり足とり面倒を見て頂いて、さぞ
かし、もどかしい思いをされたことゝ思い返
して恐縮しております。

何回かミーティングを繰返し、いよ／＼
ワークショップの会場探し（グループと云う
ものを理解してくれる）、参加者集め、経営
面のこと、あれこれ苦勞されたことを思い出
します。

見事な百万ドルの夜景を眼下に見た摩耶山
上の国民宿舎でのエンカウンターグループで、
はじめてグループというものに接し、新鮮な
驚きと発見を覚えました。参加者も、まだ若
い時代にあった先生方も、試行錯誤を繰返し、
二泊三日、三泊四日のグループが少しづつそ
のグループなりに固り、成長してゆくのを見
つつ、始めて疎外感というものの辛さを経験
したり、ファシリテーターの先生達の苦悩を
まぎ／＼と感じたり、戸惑うメンバーの声を

聞いたたり、唯幸いだったと思うのは、私が先
生方より年長であり、事務局から出かける先
生方を母親的な気持で送り出すことができた
事と、事務局で出来ることは何でもさせて頂
こうと、云う気持に切替えられたことと思ひ
ます。

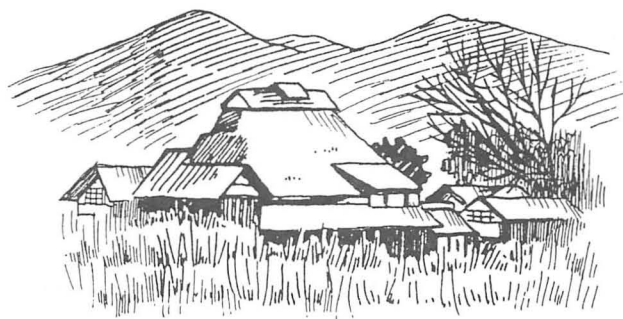
グループからはみ出て、帰りたいと云いに
来た人にお茶をすゝめて、何となく相手に
なっているうちに又グループに帰る人。それ
でも帰る人。でもそれなりにその人達のホッ
としたお顔が印象的でした。

古い伽藍と静けさと、広々としたお庭とお
題目の西教寺。こゝでも何年かグループをさ
せて頂きましたが、よくもあんな規則重視的
な処で受入れて貰えたと思議でしたが、と
う／＼グループの在り方が理解の限度を越え
終ることになりました。今でも裏山に沢山咲
いていた山藤の美しさが眼に残っています。

グループにはいませんが、幾つかあるグルー
プの何とない様子がそれ／＼に伝ってきて私
には充実した日々でした。

お手伝いさん共々家族全員で参加された畠
瀬先生御一家。関西から、遠い九州から、北
海道から、四国から、関東からと、一様に真
摯な情熱に溢れていらした先生方のその時そ
の折のお姿が今も眼に浮んでまいります。

八ヶ岳に囲まれた信州の野の香り一ぱいの
清里。放牛の牛の列に立ちすくんだ清里。



チャペルのある清原寮はほんとうに美しい所でした。こゝはもう半永久的に(?)夏のワークショップが続いている会場ですが、私がいました頃はまだく不便なそれだけに、野外に出て山登りや遠足など楽しいプログラムがありました。思い出があちこちして、私も事務局にいる間に一度だけ、イメージエンカウンターに参加させて頂き、もう忘れましたが、ダメージエンカウンターでしたと先生に報告したことを覚えています。グループは事務局をやめてから参加しようと切に思ったことです。

思い出せば雲が湧くように限りがありませんが、事務局の八年の間に、人間の様々な姿を見せて頂き、祈りにも似た気持で相対する時、深い処で響きあう人間というものの愛しさ、切なさ、そして無限の可能性を持つと教えられたその事が本当だと感じられることが沢山ありました。と共に外側の人間の持つしたたかさも感じ何か安心したことでした。

生意気は云っても、私はほんの少しこの勉強を齧っただけで、ともかく事務局を何とか続けて先生方に御迷惑がかからぬよう役立ちたいとそれだけでした。事務局にいる間に沢山の眼を開かせて頂いたこと、それが自分の深い欲びにつながることも貴重な体験でした。長い間先生方の御好意に支えられて、充実した日々を過ごさせて頂きました。

事務局を離れて十年余り。世の中も社会も家庭も変わりつづけています。グループの在り方も今ではどのようなものか、私にはわかりませんが、最近では「カウンセリング」と言う言葉があちこちで聞かれるようになり、この道も随分開かれてきたんだなと思います。草分け的な存在であった研究会が二十年という足跡を持たれたこととどれほど社会に貢献され重い存在であることを今、沁々思います。現在立派にあちこちで御活躍の先生方の若かりし頃のお姿を思い浮べると感無量の思いが致します。

畠瀬先生御夫妻、村山先生、小野先生、東山先生、谷口先生、大須賀両先生、中川先生、下迫さん、小林勝司さん、渡辺さん、清水さん、近藤さん、(さんづけ御免なさい)増田先生、木村先生、北島さん、次々となつかしいお顔が浮んできて、お顔が見えてもお名前前の浮ばない方達も、お倅にお過し下さるような心からお祈り致します。そして又どこかで昔話の出来ることがあったらと、そんな偶然も望みながら、京都嵯峨の里から思い出をお送りしました。

エンカウンターと研究会と私

——ここで経験した真実さは後戻りすることはない——

渡辺 忠

エンカウンター・ショック

「渡辺さんは随分Iさんに苛立っているようです。IさんにはIさんなりの言い方があっていいんじゃないですか」。ファシリテーターの畠瀬稔さんのこの一言がエンカウンターグループとの出会いでした。

目の前で困惑しているIさんの心など全く考えずに、「カウンセラーくさい」という枠から見たIさんの言動に、無性に苛立ち、その感情をぶつけていた自分が急に覚えてしまったのです。その晩に見た月が、中空に浮いているボールのように本当に球形に見えたのを覚えています。一九七二年九月、神戸の摩耶山でのことでした。

それまでの二年間、国鉄労研で管理職を対象にした感受性訓練 (Sensitivity Training) のトレーナーをしていました。

今思えば乱暴というか無責任というか、心理学専攻であること、一回STにメンバーとして出、二〜三回オブザーバーをしたことで、次からはトレーナーとして、人の心に踏み込む「仕事」をしていたのですから。しかもSTの理論、そのトレーナーとは何か、その根底にある人間観や仮説についての検討も十分にせず、先輩トレーナーの言動を見よう見まねで、「本音を言い（大抵は懺悔?）、感情を表出する」という目標（枠）をクリアするまで一人一人を順に追い詰めるのです。

「訓練」である以上、目標があり、それに到達する方法論が明確でなければいけませんから、その意味ではこのやり方はそれなりに理屈に合っているのかも知れません。最初のSTで私自身が、自分の感情の存在と動きを意識化できたという、新鮮な体験をしたことも事実です。

しかし個人的なポジティブ体験とは別次元の問題として、「技術」や「能力」でなく、人間の「人格」「生き方」「尊厳」にかかわるこ

とが「訓練」事態に馴染むのかということ、それに携わる自分が、どこまでその重大さを認識し、相応の研鑽を積もうとしていたか、STのトレーナーとしての行動は、本当に自分の人間観、生き方や人格と矛盾はないのか、矛盾があるならそれにどう対処するののかの自己チェックをしていたか、トレーナー、トレーニー関係と不可分の、人間存在の基本的な関係のなかで、自分を変わず相手だけを変えようとするところに真の成長はあるのか、相手の内的世界への配慮はどこまでされていたか……いろんな疑問が湧いてきていました。そしてそれらの全てが、何とも言えない「後ろめたさ」のフィードバックとして心の中に溜って行きました。これらの課題を抱えながらのエンカウンターグループへの参加ですから、冒頭のショックは当然の帰結だったと思います。

エンカウンターホリック?

当時、国鉄労研で同じような疑問をもたれていた先輩の清水信介さんに連れられて参加した摩耶山での冒頭の体験は、STと対比して、前述の疑問を自分の課題としてより一層考えるきっかけとなったと同時に、エンカウンターグループへののめり込みの始まりと

なったのです。

そして翌年の五月の西教寺でのワークショップに、研究会のスタッフとして参加しないかとの誘いがありました。いまだにどういう規程で自分が招かれたのか知りません。

いきなりファシリテータをするということは、STトレーナーの時と同様、無自覚、無責任な行動ではありましたが、とにかくショックの消化のため自分自身を何とかしなければという切迫した気持と、そんな自分を受け入れてくれる臨床領域の人たちや研究会への興味から、二つ返事で飛び込んでいました。

ところがそれからの数年は、逆にグループの中で、ファシリテータとして自分をストレートに表現することへの恐怖心と自己規制意識からくる自らの防衛の壁に、随分と頭をぶつけることになりました。

この心の壁の取り壊しは、ベルリンの壁のように劇的なものではなく、東洋思想との共通性をバックにした大須賀発蔵さん、克己さん初め、研究会の多彩なスタッフとファシリテータ経験をすることによって、そしてグループの中の『根本のところでは皆な優しく温かい』という安心経験の実感の少しずつの積み重ねによってだったようです。

また、研究会のワークショップ以外の場では、C.S.P.のラホイヤ・プログラムで『主体

性』とか『自律性』とは何かを、立教のJICEのTグループでは『観る』ことを、上智のカウンセリング研究所での二年間では『感じとる』ことと『意図』の大事さを体験しました。

研究会を中心としたこれらの体験は、エンカウンターグループのファシリテータとしてのあり方だけでなく、『本業』の組織風土変革の実践研究に、さらに実生活の中での人との交わりの中での自分の心のあり様の意識化にも影響しています。

このようなエンカウンターグループ研究会⇄私の連鎖が、今の私のかんりの部分を形づくったといっても過言ではありません。そしてそれは、ロジャーズさんが『出会いへの道』の中で述べている「ここで経験した真実さは後戻りすることはない」という名科白を、ある種の感慨をもって思い出させます。

私の異業種カルチャーセンター、研究会

それにしても、研究会とのお付き合いも十七年、多分、純粹の学術的な「研究会」だったらこんなに長くは居なかったような気がします。発足当初はエンカウンターグループを自ら体験しながらその意味やら効果を研究するということにウエイトがあったようですが、

私が参加した頃からは、スタッフも急増(?)し、一種の社会的運動体としての性格が強くなりました。つまり、公開のワークショップに参加する色々なバックグラウンドのリアルな人たちと出会うことによって、世の中から刺激を受け、また世の中に何らかの影響を及ぼしている集団、そんなところにも引力を感じます。

これは、私の社会的な活動エリアの中で、本業と家庭や友人との中間に位置づくもので、ある意味で異業種のカルチャーセンターといったところかもしれません。

社会心理学的に面白い、研究会

もう一つの引力は、研究会が、エンカウンターグループへの関心を共有する“人”(スタッフと呼んでいます)の対等で自律的な結び付きで出来ていて、高邁な目的やカッコリした役割権限機構のない、何とも頼りない柔らかな集団であり、組織・社会心理学的な関心をそそるところです。

年齢や社会的地位にほとんど関係なく、会の代表やら年間プログラム作成担当、研究担当、本誌の編集者などが一年交代で分担します。固定しているのは本誌の編集事務局と研究会事務局ぐらい。

そもそも研究会のスタッフ自体の資格（？）も、厳密には規定されていません。社会的な責任という意味で「エンカウンターグループを単独で促進できること」ということがありますが、それも基本的には、スタッフの誰かがその人の「人となり」や活動経歴などを見て、スタッフにしたいと推薦し、異論がなければご本人をお誘いするといった具合です。退会も自分の意志が尊重されます。この点では今だに「自分は資格があるのだろうか」という思いが付き纏っています。

比較的ハッキリしているのは、スタッフは二十人前後以上は増やさないということぐらいです。研究会スタッフは各地に散らばっていることもあって、それ以上の人数だとお互いの心の共有部分を広げるのに時間がかかるからです。

これらの組織運営上の原則は、二十年の試行錯誤の結果です。エンカウンターグループのファシリテータの集団といっても、価値観の違い、感情のズレ違いはありますから波風がないわけがありません。

それでも崩壊しなかったのは、まずは、ちょっとカッコ良すぎますが、スタッフ間に根底のところでお互いの違いを認め、尊重しているからでしょう。また、個人的にも社会的にもエンカウンターグループの意義を感じているからでしょうし、エンカウンターグ

ループの“老舗”としての研究会に所属していることの誇りのようなものもあるでしょう。さらにいえば、スタッフは研究会で“生活”していませんし、規模的にも経済的にも家元制度のような組織拡大政策をとっておらず、各ワークショップもそれぞれ独立採算で、



90' 清里プログラムでのスタッフ

全体にかかる経費は各スタッフが等分に負担するやり方ですから、自然に利害対立の要素をできるだけ排除していることにもなっていると思います。

いろいろ紆余曲折ありましたが、これから融通無碍な研究会であってほしいものです。

事務局の実態？

本誌No十一の『出会い百選』で面映ゆく紹介されましたが、一九八一年から私ども夫婦で研究会事務局を引き受けています。発足当初からの幸野美雪さん、畠瀬直子さんの後を引き継いだわけですが、二人ともこの手の仕事は初めて。事務局の仕事は、メインは年度の全体予算の管理と各地で活動するスタッフ間のコミュニケーション・ネットワークの促進、ロジャーズ・ワークショップや清里プログラムなど特別な企画の事務局、そして対外的なインフォメーションです。

ところが、具体的な事務処理をする段になると、二人の間で、研究会の組織的なルーズさ、人件費軽視の非採算性など基本的なところでの考え方の違いが顕在化し、しばしば火花が散ることもなります。どちらが勝つかはご想像にお任せしますが、副次的にはこのことが、私ども夫婦の共有体験となり、二人の相互理解に何程か役に立っていることは否めません。感謝。

こんな実情もご存じなく、就職を申し込まれてくる方、わざわざ訪ねてこられ看板も出していないフツウの家なのでビックリされる方、他の『自己啓発セミナー』の苦情を持ち込む

方、二時間近く電話相談をする人、女性週刊誌からの取材申し込み、一年分のワークショップ・プログラムを電話で読み上げてくれという人などなど、いろいろな人と出会いました。でも皆一所懸命です。

やっぱりエンカウンターが好き

そんなこんなで十七年、いろんなワークショップを経験し企画してきました。しかし、他者とのインターアクションの中で自分のペースで自己を見つめ、自分なりに主体性を養う「修養」目的のエンカウンターグループでは、やはり、ゆっくり無理のない心の開き合いの促進によるベィシック・グループが、一番性に合っているようです。

あまり「文化的孤島」になりすぎず、時間の制約のなかで一定の集中性を保ち、日常性を軽視せず、ことばに頼りすぎず、ファシリテーターになりすぎず、ときには理屈も言い、オロオロもし、ワッハッハと笑い、ググツツと泣き、本物の孤島や山の中の一軒屋で自炊しながらのグループや外国の人とのグループもいいなと思ひ、ゆくゆくはじぶんちで、とも思う、そういう人になりたい。

●わたなべ ただし
鉄道総合技術研究所

エンカウンターグループとの出会い

大須賀 克己

私が人間関係研究会の中でエンカウンターグループを中心に活動し始めてから、もうすでに二十年の歳月が流れます。「光陰矢の如し」と言いますが、正に時は疾風の如く去って行きます。

私がどうしてカウンセリングやエンカウンターグループに興味をもち、人間関係研究会との関係をもつに至ったかについては、母や兄が大いに関係しているようです。

私は茨城県の小さな村に生まれたのですが、終戦後間もなく、当時は何の文化活動もありませんでした。その様な田舎に、兄は東京より仏教の先生方呼んだりして、近くのおじいさん、おばあさんを集めては講演会等を開いておりました。又身近な人で精神的に落ち込んでしまった人を東京の精神科医に連れて

いったようなことも度々でした。

このような兄と私との間には、常に人間についての話が中心になりました。そのためか、私は大学に入っている時「不安の概念」という著書で知られているデンマークの実存哲学者、ゼーレン・キェルケゴールに興味をもち、哲学を学ぶことになったのです。それ以来人間の心への関心が今だに続いています。

そして私が二十五、六才の頃カウンセリングに出会ったのです。それは、ロジャーズ博士を日本に紹介したローガン博士が学長となっていた今の茨城キリスト教大学の前身として、シオン学園があったことも一つでしょう。兄とローガン博士がキリスト教と仏教について話し合ったのは四十年前程ではなかったかと思ひます。そこでは、三十年程前カウ

ンセリングのワークショップが盛んに行われていたのです。

私の母親も含めて三人がカウンセリングに大変興味を持ったのです。私はその当時大学を出て勤めていたのですが、ますますカウンセリングに興味を持ち、アメリカで勉強することを決意しました。

一九六四年、丁度東京オリンピックの開かれた年でしたが、私は渡米いたしました。兄が訪ねて来るのを待って、ロジャーズ博士とお会いすることができたのです。ロサンゼルスから南に下り、ほぼ三、四時間のドライブでしたが、彼の研究所はラホヤという美しい海岸に静かに存在しておりました。

私共を迎えたロジャーズ博士の柔和な面影が、今だに心から離れません。その当時私は、一対一のカウンセリング療法しか考えておりませんでしたので、博士がグループについて述べることに大変新鮮なものを感じました。

まだエンカウンターグループと彼自身は呼んでおりませんでしたが、今考えてみれば、正にエンカウンターグループに集中していた時ではなかったかと思うのです。

それからしばらくして、私はカウンセリングについての様々な疑問を博士に投げかけました。しばらくたって彼から手紙をいただきました。シカゴ大学で彼と共に研究していたヘイ博士を私に紹介してくれ、そこで学んで

欲しいと言われました。しかしその時は事情があつて彼を訪ねることはできませんでした。

このように、ロジャーズ博士やカウンセリングについての関心は、私が大学時代に実存哲学者であるキェルケゴールを学んだ事ともつながり、それも大きな動機の一つであつたと思います。カール・ロジャーズ博士はキェルケゴールに大変興味を持ち、彼のカウンセリングはむしろ実存的なものを基礎においていることを感じたからです。一方私自身、性格的な弱さを感じていましたので、自分を他国にはうり出したいような気持もありました。

このようにして私の生活はロジャーズ博士との出会いから出発したのですが、カウンセリングについてはむしろ自分自身のアメリカに於ける中で学ばせられたとも言えます。更に、エンカウンターグループやゲシュタルトセラピー等を経験して、一九七一年に帰国致しました。

帰りますと、ただちにエンカウンターグループの要請がたくさんありました。すでに兄が日本において様々なグループを発展させていたからだと思います。いずれにせよ、エンカウンターグループは新しいものであったためか、次第に多くの人々の関心をひきつけていったようです。

私は帰国して間もなく日本カウンセリングセンターの専任カウンセラーとなり、友田不

二男先生と共に全国のカウンセリングワークショップをまわりました。そこではエンカウンターグループという研修名でないことが多かったのですが、私のグループだけは何時でもエンカウンターグループの雰囲気を持っておりました。

このようにして、ある時には日本一多くの時間をエンカウンターグループの研修に費やしたと言えるほど様々な体験を得ることができました。その時に得た体験が現在でも私のセラピストとしての基礎を作っているようにも思います。

現在は、気功という一見カウンセリングと関係ないような療法とカウンセリングを統合し、「気功カウンセリング」として行っています。従って精神だけではなく肉体上の治療も行っています。この経験は私のカウンセリングにとって新たな意味をもたらしました。言語を中心として考えているカウンセリングのあり方に対し、宇宙生命として働いている「氣の力」を考えずにはいられません。それを抜きにしては、ロジャーズ博士の提唱するクライエント中心療法が成り立たないということです。いずれにしても、人間関係研究会と共に私のエンカウンターグループの歴史が存在していると思つている今日この頃です。

研究会二十年のなかで

——私自身を「私に」——

増田 實

私の人間関係研究会へのかかわり始めは、

一九七二（昭和四十七）の夏である。この年、本会は、神戸・摩耶山の国民宿舎を会場にして五泊六日の「エンカウンター・グループ」

（七月二十九日～八月三日）を開催しているが、私は、これに初めて参加した。この参加が私を今日に至るまで本研究会にかかわりをもたせるようになるとは思ってもみなかったが、これは、その実質的なキッカケとなった。

実は、この前年（昭和四十六年）私は、札幌会場開催の「エンカウンター・グループ」

（七月二十一～二十六日、五泊六日）の案内を人伝てに入手し、参加申し込みをしていたのであるが、都合がつかずに参加を見送っていたのであった。このときの開催案内書は、何かよくわからないが魅きつけるものがあっ

たのを覚えている（しかし、一枚の印刷物で、頼りない気もしたが……）。また、私の参加キャンセル連絡に対し返信があり、残念であること、次回の参加を待つことなどが記されていて、心暖かくなるのを感じ、この会に対して私の気持ちがいよいよ強く近づいていくのを覚えていた。

この年のエンカウンター・グループには参加できなかったが、私の本会へのかかわりは、思い起こすと、このときが初めてであったのかも知れない。

摩耶山でのエンカウンター・グループは、私にとってたいへん印象深い経験であった。この参加申し込みの折、当時カウンセリングに関して種々のご指導やお世話を頂いたり共同研究や実践をすすめていた故飯塚銀次先生

から、「一緒に行かないか」という連絡を受けた。このとき、「あゝ先生もエンカウンター・グループに関心をもっているんだな」と思い、また、私への誘いのようにも思えて嬉しかったが、何故かお断わりし、自分ひとりで申し込んだ。会場では、結果的に一緒になるのをわかっておりながら、何か自分ひとりだけで行きたい気がしていたのである。

ひとりだけでそこまで行くことの不安や心配があったし、神戸からバスとロープウェイを乗り継いで行くときの心細さがあった。こんな不安や心細さをもちながら、何故よくわからないエンカウンター・グループに参加するのだろうか、と自分自身をあざ笑ってもいたのであった。

しかし、このようにして、自分ひとりで参加したことが、私にとってたいへん大きな意味のあることになったのである。それは、あとでわかってきたことであって、そのときには全くと言っていいほど気がついていなかった。ひとりで参加するということは、それへのエネルギーを多く使うが返ってくるものも多い、そして、それは自分自身の肥こやしになる、ということをも改めて強く気づかされたのである。

「グループ」セッションのなかで起こったことの細かい点についてはその記憶が薄れているが、先輩風を吹かせて（私にはそう感じ

た) 私にかかわっていたあるメンバーに対して激しく(?)ぶつかっていたことがあった。このとき、ファシリテーターのひとり私のその気持ちに触れることばを出したが、それが私の心の支えになったのを鮮明に覚えている。(しかし、そのことばがどのような表現だったか、いま思い出せない。)

そして、その後のセッションのなかで私自身、何か自由に動けるようになった気がしていた。「私自身になっていった」のかも知れない、といま思う。エンカウンター・グループにその前年から関心をもちながら、それについて事前の学習(と言っても当時その材料は皆無に近かったが)を殆どしないで参加したが、そのことがかえって私自身を知的概念による囚われから放させ、自由にさせていたのかも知れない。

摩耶山での「エンカウンター・グループ」を終えて、その帰路、私自身軽やかになり、私自身の内側ではのぼのとした暖かさが湧き出てきているのを感じていた。何ともことばに表わせない開かれた感じが自分のなかに広がっており、見えるものも違って見えていたことが、印象深く残っている。

私の内面が動き出し、長い間眠っていた私の感覚や感情などの「感」が目覚め始めたように、いま思える。そして、感動を味わうことができるようになったのではないか、とも

思えるのである。

これらは、私自身に対しての私の驚きである、とともに、私自身への気づきでもあった。おそらく、エンカウンター・グループの体験とはこのようなことではないだろうか、と思った。そして、この体験は、私自身にひとつの肉面的な節目をつくるように作用した、と考えられるのである。

この「グループ」の終了時、私は、もう少しこの体験的な学習を深めてみたい、という気持ちが起こり、ファシリテーターであった畠瀬稔氏に「ラ・ホイア」行きの希望を伝えたところ、慌しい時間のなかで快くその所在や村山正治氏の滞在などを教えてくれた。

同氏のこの好意的な示唆は、私に対してよりいっそうの勇気づけとなった。また、「ことばが十分でなくても、ラ・ホイアではなんとかなりますよ」と言われたが、このことばは、私の行こうとする気持ちに安心感を与えるよう働いた。これらは、私の「ラ・ホイア・プログラム」への参加を、希望から現実へ近づける大きなキッカケとなったのである。

つぎの年(一九七三、昭和四十八年)の夏、私は、「ラ・ホイア・プログラム」に参加した。この概略は本会の資料(№七「ラ・ホイア・プログラムへの参加経験」)に記してあるので省略し、印象に残っていることひとつを書き記しておきたい。それは、村山正治氏

との出会いである。

同氏とはサンディエゴ(San Diego)の海岸沿いにある「ホリディ・イン」で初めてお会いした。当地に着いて左も右も不案内のまま、ホテルから電話を入れたところ、同氏は車を自から運転して来てくれた。全く見知らずの私のところに来てくれる、ということに、それだけで私は感激し嬉しかった。そして、初めての出会いがあったのである。人とのつながりの不思議さも感じさせられた。

その後、「ラ・ホイア・プログラム」への参加中、同氏は、おにぎりを持ってUCSD(カリフォルニア大学サンディエゴ校舎)の会場にも来てくれた。キャンパスの芝生のうえで食べたこのおにぎりは、本当においしかったし、おいしさ以上の味があった。それは、心の味であった。この味を、私は忘れられないでいる。

同氏には、その他当地でいろいろとお世話になった。そのすべてが記せないのが残念であるが、エンカウンター・グループへの参加というかわかりが、このような人と人との「つながり」、「広がり」、そして「深まり」を生むようになることに驚きと喜びを感じないわけにはいかないでいる。

一九七四年(昭和四十九年)夏、本会ワークショップに、私はそのスタッフとして参加するよう依頼を受けた。当時の本会代表、畠



瀬稔氏からの誘いでもあった。私は、スタッフとしてやれるかどうか不安であったが引き受ける返事をした。しかし、不安は募るばかりであった。

このワークショップは、琵琶湖畔の西教寺を会場とする「エンカウンター・グループ」（八月五日～十日、五泊六日）であったが、村山正治氏とペアを組むことになり、本会のファシリテーターを初めて経験した。同氏との組み合わせは、私の当初の不安を軽減させてくれた。そればかりでなく、自由に動ける自分を生ましめてくれた。そして、このときの「グループ」経験は、これまでファシリテーターとして経験した「グループ」のなかでも、最も印象に残るひとつになっている。

このときの「グループ」は、メンバー相互の衝突、対立もあり、やや激しい波立ちのなかで推移していったが、その後半のセッションで、ある女性メンバーが『わかった』なんてそんな簡単に口に出せないわよ』と言ったことばが、私のなかにいまもって強く残っている。

このことばは、私に対して向けられたものではなかったが、かの女の心の訴えの声として響いた。私も、不用意に時折「わかった」ということばを使っていたのを思い、胸にグサリときた。いま私は、ひとの心が「わかる」ということなどあり得ないと認識し、わ

からないから「わかる」ように近づいていこう、近づくことを少しでもやっいていこう、と思っているが、そのときは、この「わかる」ということを安易に使っていたのではないかと心苦しくなる。

実感としてかの女のこのことばから得たものは、大きかったし、このグループ体験を通して、ファシリテーターもメンバーに支えられて共に人間として相互にかかわっていくところに個人の内的成長が見出される、という実感があった。

本会二十年のなかで、私の心に残ること、想い出、学んだことなどは、まだまだ沢山あって書き足りない。その二～三コマを書き記したにすぎないが、このなかに私の人間関係研究会へのかかわりのルーツがあったのであり、私の内的成長への節目があったように思える。

このとき、私は三十代であった。この三十代は、私にとって「迷い」の時代であったが、この「迷い」が私自身を「私」にさせてくれたように、いま思える。

白い蝶

見 藤 隆 子

あれは、アンドレ・オーさんの二回目の清里プログラム参加の時であった。一九七九年夏、プログラムが始まる前の二日間をスタッフは清泉寮のキャビンに泊り込んで、打合せや、お互いの心を調整するために使っていたと思う。

オーさんは椅子に坐り、我々は適当に輪になって床に坐っていた。

その時、ドアも窓も開いていないのに、一羽の白い蝶がどこから来たのか、ファッと、オーさんの肩に留った。

オーさんは、ヘレンだ、と云われた。私はドキッとすると共に、オーさんのヘレンへの純粹な愛に触れた思いを、あの世からヘレンが蝶の化身として今、目の前に居るという感動に打たれて、言葉を失っていた。

ヘレンとは、その年、一九七九年三月に亡くなられたカール・ロジャーズの奥様の名前である。

一九七八年秋、私はオーさんのお世話で、カルフォルニア、ラ・ホヤのCSP (Center

for Studies of the Person) に二週間滞在した。

私がCSPに居た僅かの間に、オーさんは、ハワイに移られることになり、そのサヨナラパーティーがカールロジャーズの家で開かれることになった。幸せなことに、そのパーティーに私も呼んで頂いた。

CSPスタッフの間を回覧が廻り、ポットラック(持ち寄りパーティー)に、自分は何を持って来るのかと書くという、合理的なアメリカのパーティー方式を初めて知り感心したが、私は何も食べ物を用意できないのでパスしてしまった。しかし後で、果物でも持って行けば良かったのだと悔んだ。

ロジャーズのお宅は、サンディエゴ湾が一望できる見晴しのいい高台にあった。

一歩足を踏み入れて驚いたのは、日本の細かい彫刻を施した屏風や、掛け軸など、日本美術のコレクションかと思う品々であった。ロジャーズの言に依ると、これ等は自分ではなく、頂き物なのだとのこと。日本

人は人にプレゼントするのが好きですね、と云われた。まさかロジャーズのお宅にお邪魔できると夢にも思っていなかった私は、何も持って行かなかった。

居間は、二十人位の人が入ると一杯になる位の感じの広さであった。その部屋の真中に、車椅子に坐ったシワクチャのおばあさんが居た。初め、私はロジャーズの母親かと思ってしまった。ところが、それがヘレンだった。

頭脳はしっかりとしておられ、CSPスタッフの一人一人と、話をしておられた。

私も簡単な自己紹介をしたが、小さな弱々しい声を振り絞るようにして話して下さるのが、なんとも痛々しく、胸が潰れる思いであった。

元気に光り輝いているロジャーズと、その蔭で、総てをロジャーズに捧げ、自分の人生を自分の感情のまゝには生きなかったヘレン、と思うのは間違いだらうか。

人間尊重の心理学(創元社、島瀬直子訳)の中で、ロジャーズは次のように云っている。

『この十年、苦しみと多くの喜びを味わいました。一番大きなことはヘレンの病氣です。特に過去五年非常に重いのです。彼女は痛みを直視し、制限された生活に勇氣を持って取り組んでいます。(中略)絶望と希望が交叉する困難な時期を過ごしました。(中略)彼女は引きこもりを克服し、自分の目的を持つ

たより正常な生活をする方向へと意志の力によってすばらしい前進を示しました。これは容易なことではありませんでした。』

ヘレンの病気がなんであったのか記憶が定かではない。しかし痛みに堪えて生きておられたのだ。

娘さんのナタリーの本の中にある女の生き方と、ヘレンの生き方を比較して、ヘレンの病いを思うのは間違いだろうか。

ナタリーがそうであったように、夫に自分を捧げるだけの生き方では、自分の何かを殺す故に、病として表現されてもおかしくない。そのヘレンを、オーさんは知っていたのではないだろうか。

勿論、ロジャーズが、ヘレンに犠牲を要求するなどということは全くなかったと思う。

ヘレンのロジャーズへの奉仕は、ヘレンの意志であったであろう。それでもどこかでナタリーが気付いたような自分を生きることへの葛藤があったのではなからうか。

病いと戦いの跡を皺に刻み込んでいるとしか思えなかったあのヘレンは、あれから半年の後に、安楽の世界へ旅立たれたのだった。そして更に半年後、ヘレンは、白い蝶となって、私の目の前に居たのだ。

みとう たかこ
●東京大学医学部保健学科

滝体験が残してくれたもの

早川 千恵子

私が人間関係研究会と出会ったのは、十五年前の一九七五年である。その年は丁度、現在の仕事に就職し再出発した年でもある。その秋、学生相談研修会に参加した私は、分科会ではじめて、エンカウンターグループを経験し、何か心を動かされるものを感じた。

「何かがある」という思いで、講師の増田實氏にお願いして、人間関係研究会のプログラムを手に入れることができた。研究会との縁は、こうして結ばれた。

それから四、五年の間は、夏になると毎年のように研究会のワークショップに出かけて行った。カウンセリングを学び始めたばかりの頃で、手探りの苦しい時代であった。私が今、カウンセラーとして大切にしていることの土台は、その頃のグループ経験の中で養わ

れたと思っている。どれも忘れ難い経験であるが、今回は、はじめて参加し印象深かった常陸太子温泉のワークショップについて、記憶を辿りながら書いてみたいと思う。

それは一九七六年の夏であった。私にとっては二度目のエンカウンターグループである。水戸からローカル線に乗り換えて約二時間、常陸太子はひどく遠い道程に思えた。緊張で身を堅くしながら、私は雨の降る太子駅に降り立った。美しいご婦人が人間関係研究会においでの方は…と書いた紙片を持って立っておられた。おずおずと声をかけると、「お待ちしました」と静かな声で迎えて下さり、傍らにおられた穏やかな中年の紳士が早速、車で会場に案内して下さいました。思いがけない

出迎えがうれしかった。緊張が少しとけて、これからの六日間が楽しみにもなってきた。

そう言えば、申込金を送った時も、手書きの丁寧な返事をいただいたことが思い出された。この会には、木目細かな手作りのぬくもりと、故郷に帰ったような安らぎがあると思った。

今、手元に残されている当時の古ぼけた日程表を見ると、だんだんに色々なことが思い出されてくる。実に盛り沢山のスケジュールが懐しい手書きでビッシリ書き込まれている。オリエンテーションと全体会で一日目は始まっている。二日目は朝から、「私のグループ観とファシリテーター機能」と題してシンポジウムが行われている。現在のスタッフ幾人かの他に、穂積登氏や足立明久氏の懐しいお名前が見える。三日目、四日目も近藤章久氏の特別講演や村山正治氏の研究発表が続いている。最後に「E・G体験と日常生活の関連性をめぐって」という全員参加のプログラムもある。スモールグループはこれらの合間や夜に9セッションとつてある。その他のにも、もちつきやセンソリー・アウェアネス、滝見物など実に盛り沢山の内容が詰まっている。まだお若かったスタッフの方々の意気込みが伝わってくるようだ。まだある。毎夜十時〜十二時はフリータイムだが、広間にアルコールが用意されていると書き添えてある。グループが終ると三三五五集まって夜お

そくまで話しこみ盛り上っていたことが思い出される。

この時のワークショップが私にとって印象深く忘れられないのは、この多彩なプログラムにあるというよりは、私自身がこのワークショップで、深い体験をしたからだと思う。それは滝に打たれるという神秘的な経験に象徴されていた。

ことの発端は最初のセッションにあった。あるメンバーがグループは麻薬のようなものだと言われた。私は驚いた。そんなはずはない、もっと健康で肯定的な意味があると思う。前回のグループで自分が解き放されて自由になったことで、自己洞察や他者理解が深まり、自分自身が広がり、とても意味のある体験をしていたから、麻薬とはとても思えなかったのだ。今回参加したのも「自分やひとをもっと見たいし、知りたいからだ」と意気込んで言った。それをじっと聴いておられたファシリテーターのO氏が「見えているとは思っているだけではないのか」と言われた。「見えているとは思っているだけ」という、このO氏の言葉に、一瞬間を殴られたようなショックを受けた。何も見えない暗闇に放り出された感じがした。混乱していた。眠られぬ夜が続ぎ悶々としていた。一つ一つのセッションが長く苦しかった。どうしてこれほど大きなショックを受けた

のか、その時の私には分らなかった。ただただ、根底からゆきぶられ、大地震に遭遇したようなショックと混乱の中にいることだけが確かなことだった。この得体が知れない気持ちをどうしたらよいのか、どう表現したらよいかわからなかった。その時、グループにそれをそのまま投げ出して話せていたら、もっと早く楽になっていたと思うし、また違ったグループ体験ができていただろうと思うのだが、そのときの私には、そんなことは全く考えられないことであつた。自分自身でなんとか早くこの気持の処理をして、早くグループの中に入りたいと、あせりもがいていた。グループの人たちには、当然そんな私の気持はわかりにくかっただろうし、わけがわからず困惑しておられたと思うのだが、無理に引っぱり出そうとしたり、切り捨てようとせずに、グループの中にそっと暖かく置いてくれたことがとてもありがたかった。四日の間、私はこの得体の知れない感情の渦の中にとっぷり浸たり、それに向き合わざるを得なかった。辛く苦しいことではあったが、それが大きな転換のきっかけになったと思うし、滝体験にも繋がる意味のある経験であつたと今は思っている。

ワークショップも、いよいよ終りに近づいた五日目の朝になって、にっちもさっちも行かなくなった私は思い余り、やっとのことで

〇氏が打ち明けた。〇氏は「ふーん。そうだったの」と一言。あっけなかった。それで何かが見えてきたわけではなかったが、気持ちに余裕ができて、少しらくになった。そして午後の自由時間には、みんなで袋田の滝を見物に出かけた。滝はすごい迫力で、全身がゆさぶられるようだ。周囲に咲いている白百合の花がなんとも清楚で美しい。大きく美しい自然に触れて、心が広がったようで、気持ちがよい。しかし、あのこだわりが無くなったわけではない。胸のうちを覗くとモヤモヤはあり、やはり気は重い。もう少し歩きたいと思った。〇氏が夢想の滝に行こうと言い出し、幾人かの人たちがそれに続いた。私も一緒に歩きはじめた。道は次第に狭くなり、遂に無くなってしまった。あとは川の中を歩くしかない。ズボンの裾をまくりあげ、脱いだ靴を手にはら下げて水の中を歩いた。水は冷たく、ゴツゴツした石で足が痛い。気がつく、〇氏と同じグループの人が四人だけになっていた。ますます川幅は狭く、回りの山が迫ってくる。岩に掴ったり、鎖を伝わったりしながら、やっとのことで小さなほこらに着いた。こんなところにお不動さま(?)が祭ってあった。手を合わせて少し下ったところに夢想の滝があった。思ったより小さな滝だ、われわれ以外に人影はなくひっそりしている。なんだか秘境に迷い込んだようでワクワクし

てくる。

ふと「滝に打たれたい」という衝動にかられた。そう呟いた私に〇氏は「入れば」と事も無げに言われた。「そうか! 入りたければ入ればいいんだ」とひどく素直にそう思えた。そのまま、何の抵抗もなく水に入り滝壺に近づいて行つた。思ったより水しぶきの威力はすごい。よろけるからだをなんとか支えて、やっと立っていられるところに身を置いた。ドウッドウツと凄まじい音を立てて、滝がからだを打ちつける。息が止まりそう。水が苦手な私は、呼吸を整えるのに必死の思いだ。なぜか、回りに振りまわされ右往左往している自分がしきりに思われる。いつか一所懸命に念仏を唱えていた。合唱している小さな自分の姿が浮んできた。そしてやがて、それは腹の底の方へ沈んで行つた。何もない静けさ。時が止つたようだ。どの位過つたのだろうか。ふと待っていて下さる人たちのことが浮び気になりはじめた。もったこうしていたいし、からだも思うように動かないのだが、やっとそこを離れてゆっくり縁に戻ってきた。

余韻の中でまだぼんやりとしている私の冷えきつた肩に暖いものが触れた。人の手だった。暖かいものがからだの中に沈んでいった腹に落ちたと思った。そこには〇氏がおられた。グループの人たちの暖かい眼差しがあった。ホッと、そんな風に迎えられることが

うれしかった。帰り道は全身びしょ濡れになった後だったので、これ以上濡れる心配がなく、なんとも気楽に川を下った。こだわりが去って見違えるほど軽くなった心身が、とてもホカホカしていた。

この滝体験が私に残してくれたものは大きい。それを言葉にすることはできないが、確かなある感覚が大事なものとに残されている。あの時、何かが腹の底に落ちていったあの確かな感覚を、今でもはっきり思い出すことができる。私が私自身になる感覚と言いかえてもいいだろう。自分を見失いそうになった時、今でも努めて思い出す感覚である。

大自然の懐に身を委ね、その偉力を膚で感じた時、小さく孤独な一人ひとりの人間を通して貫いている大きなものを、私は力強く感じることができた。沢山のエネルギーをいただいた感じがした。それは暖かな人々の支えがあったからだと思う。



●はやかかわ ちえこ
日本女子大学

人間関係研究会とのかかわり

——清里プログラム、アンドレ・オウ博士との出会いを通して——

穂 積 清 美

人間関係研究会とのかかわりといえば、私にとってはエンカウンター・グループの初体験でもあり、多くの影響があった一九七八年と一九七九年の「清里プログラム」がまず第一にあげられる。

当時、私には幼い二人の娘がいて四泊五日家を空けるのは大変だった。夏休みだったので実家の母に子供達を預けてやっと参加できた貴重な時間だった。

その頃の私の精神状態はかなり傷ついていて自信がなかった。結婚して十年。個性の強すぎるというかアクの強い夫と、それに影響を受けやすい未熟な私との間にはかなり片寄った関係が出来ていた。又、二人の生れ育った家庭環境の違いも大きく、当時の私達はこのギャップを認識するというより、お互い違うことで相手を受け入れようとしな

い傾向が大であった。例えば、主人の家庭は母親が自分の夫はさておいても子供の面倒をみるという家庭環境で、私の夫が子供の頃小児マヒのような病い

にかかったとき、母親は寝ずに夫の足をもみ続けていたという。

私の家庭はというと父が権力を持ち、母を自分の思うように従えて、子供達も大切にしてくれたのだが、どちらかというと若い頃の父は、母と二人の生活をととても大事にし、どこへ行くにも母を連れて行ったので、幼い私達はお手伝いさんまかせにされたこともしばしばであった。子供の頃の私は、いつも一緒に仲のいい夫婦をモデルにして、結婚への夢を描いていた。

これほど環境の違う二人が一緒になって、お互い自分が正しいと思っていだら一つ一つがうまくいくはずがない。例えば、子供が風邪をひく。私は実家の我が家流に「暖かくしてよく寝かせていれば治るでしょう。」と達観していると、夫は、自分の母親が寝ずに看病してくれたことと比較して、そういう私を責め続けた。果ては私のことを「冷たい血が流れている」とまで言った。

全てがうまくいってなかったということとは

ないが、周囲の人達方からも「異常に子煩悩」と言われている夫は、特に子供のことに關しては、私に対して不信任感が強かった。このように夫から不信任をもたれていたは、良い母親になるのも容易ではなかった。又、当時の私は、そういう夫の指摘を鵜呑みにして、自分を責めるという、今思えば何とも未成熟な部分が多かった。

こういうことの積み重ねで私はすっかり自信を無くしていた。子供の母親であるという自信のなさほもとより、他の人間関係にしても、常に「自分は間違っているのではない、人間としてきちんとしていないのではないのか」と自己批判的になっていた。

この頃、先に述べた「清里プログラム」に参加した。最初に参加した時の終了時の印象として、私は、「自分は精一杯やっている。これでいいんだ。人の中で思う存分自分を出しても認めてもらえる。受け入れてもらえる」という強い感じをもち「受容された体験」を、実感として感じ取ることができた。同時に、初対面では「偉そうで近寄りにくい人」とか「知らない人」だった人々が次第に親しく、かけがえのない大切な人に思えてきた。人間の存在に對しての深い思いが実感できた。このことは当時、対人関係で防衛的だった私にとっては、一大転換で「人をとていとおしく思えて、愛せる」ようになった貴重な体験

であった。

家に帰るといつもと変わらない子供達が私の胸に飛び込んできた。私は二人の子供を抱きしめながら寝かしつけた。

翌年、アンドレ・オウさんが見えるということでも又参加した。「去年、大分自信を取り戻したけど、一年経つとやはり垢がつくのだなあ」というのがその時の私の実感だった。日常生活はそう変化したわけではなかったで、以前と同じように又自信喪失に陥っていた自分がいた。そして人に接するときの、ぎこちなさ、身動きのとれなさがあったことを再確認した。

アンドレ・オウ氏はカール・ロジャーズの流れを汲む学問的立場を持ち、直感力の優れた、とても大きな包容力を持っている。それでいて気さくで近寄りやすい人だ。

彼はホールで全員とコミュニケーション・セッションをもった。そのなかで私の印象に強く残っている「イメージ」を使ったものがあった。清里という所はともすがすがしく、そよ風の音、木々の緑、うぐいすの声、そして静けさがある。それらをバックに彼は、イメージで「あなたが一番安心していられるところ」という世界にゆっくりゆっくりと導いていくくれた。「その場所は座りごこちがよく、周りの景色もあなたの気に入っている、あなたがとても安心できる場所ですね」と

優しく確かめる。「そこに、wise man(賢人)がやってきます。その人はもう一人のあなたです。その人はあなたについて、どんなことでも知っています。あなたの良いと思っるところ、嫌だと思っるところ。どんなことでも知っています。あなたは勇気をもっ



・ 79年、清里でのパーティー

アンドレ・オウ氏と共に

私はその時「私のwise man」に全てを打ち明けた。彼は「あなたは充分努力している。それ以上自分を傷つけなくていい。自分を認めていい」と言ってくれた。これは、今思うと私自身の自己受容体験であった。

このような形でオウ氏と共に居ることで、彼から多くの影響を受けた。彼が特に強調したことは「パーソナル・パワー」ということだった。「個人の中には必ずその人の力がある。力は外から与えられるのではなく、その人からでてくるもの」という。気が落ち込んでいて元気がない時はあせらない。「待つことの大切さ」待っていれば必ず「パーソナル・パワー」が出てくるとしきりに伝えて下さった。又、彼は人の「positive」な面に働きかけるのにすごく長けている。というより、彼の本性そのものが相手のpositiveな面を感じ取り、それを伝えようとするのだと思う。

このようにしてオウ氏や、研究会のスタッフの人々、そして参加者との間にどんな一体感が育っていき、自分自身や他の人を大切にする風土が出来上がっていった。

最後の夜にパーティーが開かれたが、フリーチャイルドが高まって、元気になりすぎた私達は、オウ氏の少し禿げ始めた額をピチャピチャたたいたりして、彼と共に心ゆくまで飲んだり歌をうたって楽しんだ。

この時、オウ氏から教えて貰ったK&G概念

は今でも私が自信喪失になりそうな時に役にたっている。それは「パーソナル・パワー」「待つこと」「ポジティブな面への働きかけ」そして「私の中の wise man」である。

合宿から帰って私は自分の体験したことを夫に話した。夫は殊の他アンドレ・オウ氏に関心をもち「会いたい」と言った。合宿と一緒に参加した数人を誘って私達はオウ氏と再会した。八月二十日、日本料理を囲みながらの楽しい話し合いだった。たまたま当時の私の日記にその時印象に残ったことが、少し記されていたのでそのまま書いてみる。

『オウ氏は清里での彼より、よくしゃべり茶めつたっぷりでリラックスしてみえた。(中略)私は彼に、以下のことを伝えた。「私はオウ氏と私の夫に関して、根底にはある似かよった暖かさや包容力を感じる。しかし、人に接する時の、二人の極端な違いとして、オウ氏は相手の good な面を positive に受け取り、夫は bad な面を、negative だとして批判する。十年間、そのように言われ続け、私はすっかり自身をなくしてしまっただが、二回のエンカウンターに出て、自分の中から power を感じることができるようになった。

今までは、私は私自身が成長するということは、外側にあるいいものを獲得するという感じでいたが、最近、自分の中にあるものを

育てていくという感じに変わってきた。」

オウ氏はそれに対して「ご主人が今まで伝えたかった事を、あなたは今とてもよく分かるようになってきたようにみえます。私にはあなたの方のカップルの変化がとてもいい感じに思え、そのような話を聴いてとてもうれしく思う」と笑顔でおっしゃっていた。

このことで私は又、何となく自分の中で変化するものを感じた。今までの夫のやり方に対するこだわりが割と取れたことだ。皆と別れてから、その夜、相変わらず毒舌を言う夫に対して、私は言葉だけではない感情が受け取れて、以前よりは穏やかに聞けた。

私はこの日記を読み返して、当時はきっとオウ氏が言ってくれたことに、物足りなさを感じたのではないかと思った。彼は「あなたは成長できて良かったですね」とも「問題点に気が付いたのですね」とも言わなかった。「ご主人にそう言われ続け、大変だったんですね」とも言ってくれなかった。彼は唯、「二人の変化がとてもいい感じで、その話を聞いてうれしい」とだけ言った。私達二人の間の positive な面だけをみて positive に応答しただけだった。グループの中で彼がとっている行動を、日常彼は自然に行っているのだった。

いろいろな話をした中で、私の日記にこの部分があえて記されているのは、私にとって、そういうオウ氏のことを特に印象に残っ

ていたからだと思う。

人間関係研究会のスタッフの人達や、そこに集う仲間との関係の中で、私はアンドレ・オウ氏から受けるものと似ているものを感じることがある。

十二年前の二つの「清里プログラム」の体験がきっかけで、その後いろいろな形で研究会の人々とのかわりがあった。そして、私は研究会のスタッフの人々の個性にひかれ、そこに集まる仲間との触れ合いに魅力を感じてこまできた。私が「何だか知らないけれどひかれていたもの」は実は、アンドレ・オウ氏から感じられた「大きな包容力」のようなものだったと、今思えてきた。

「人を大切にする」と一言で言えば、ごく簡単なことだけれど、知らず知らずに私達はある人々、そして自分をも傷つけている。人間関係研究会の運動はこの社会では小さいのかも知れない。しかし、一人一人の体験の中では大きな意味をもたらしているものと思う。

私は「大きな包容力、大らかさ、人を大切に思う」人々との間で、自分が影響を受けていくことがうれしい。グループ体験というのは、日常の中で発酵し続けている実感がある。

私と人間関係研究会

野 島 一 彦

私が人間関係研究会のことを初めて知ったのは、二十年前の一九七〇年、大学院生（修士課程一年生）の時である。当時からエンカウンター・グループに関心を持ち、福岡人間関係研究会のグループに参加していた私に、（最初からこの会のスタッフをしておられる）村山正治先生が、教えて下さったのである。その時の印象としては、偉い先生方の会なのだろうなと思った。

そして一九七二年七月二十九日～八月三日の神戸摩耶ロッジでの「一九七二年度第三回夏期エンカウンター・グループ・ワークショップ」に出たのが、この会のプログラムへの初参加となった。私が入ったグループのファシリテーターは、大須賀発蔵先生と清水信介先生で、とても信頼感・安全感の高いグループであった。メンバーには、この『ENCOUNTER出会いの広場』の№3の「出会ひ百選」で紹介されている石戸ハナさんもおられた。

第二回目のこの会のプログラムへの参加は、一九七三年八月六日～十一日の西教寺での

「一九七三年度第四回夏期エンカウンター・グループ・ワークショップ」であった。私が入ったグループのファシリテーターは、畠瀬直子先生、近藤邦夫先生であった。私にとってはあるメンバーと対決できたことが今でも印象に残っている。メンバーには、現在この会のスタッフをしておられる中川紀子先生もおられた。

その後一九七六年度のこの会のプログラムに、村山正治・野島一彦・山田宗良がディレクターとなり、「相互啓発 エンカウンター・グループ」（一九七六年八月二十五日～二十九日、福岡県立平原青少年野外訓練センター）を開催するという案内を載せていただいた。私の名前がこの会のプログラムに出たのは、これが最初であった。

私がこの会のスタッフに加わらせてもらうようになったのは一九八三年度からである。その折に当時のこの会の代表増田實先生からいただいた「人間関係研究会規約」（一九八一年一月十七日承認）によれば、目的は、「本会は、人間および組織の自己実現的な成長発

展と人間関係の改善・促進に関する研究的・実践的活動をすすめる。」で、事業は、「(一)機関誌、資料の発行、(二)ワークショップ、研究会、研修会の開催、(三)内外諸団体との連絡・提携、(四)その他」となっていた。気持をひきしめて、慎んで加入させていたのだ。

スタッフになってすぐの最初の仕事は、「人間関係研究会 国際コミュニケーション年特別記念事業 Person-Centered Approach Workshop with Carl & Natalie Rogers」（一九八三年四月三十日～五月五日、国立婦人教育会館）であった。他のスタッフの方々との協力しながらの運営をとおして、深く親密な心のつながりを持つことができた。（ちなみにこのワークショップの記録は、畠瀬直子・畠瀬稔・村山正治編『カール・ロジャーズとともに』（創元社）に収められている。）

この年の夏には、この会の最大のプログラムである「清里プログラム」（一九八三年八月一日～五日）に初めて参加した。まずは清里という地のすばらしさに感動した。この年の清里プログラムはファシリテーター養成を構想して三年目ということであった。私は、小柳晴生さんと組んで一つのグループのファシリテーターを務めた。

この会の（年に一回の）スタッフ・ミーティングに初めて参加したのは、一九八三年十二月二日～四日の「一九八四年度にむけて



1972.7.29～8.3

神戸摩耶ロッジ

夏期エンカウンター・グループワークショップにて

のスタッフ・ミーティング」(芝 弥生会館)であった。ロジャーズ・ワークショップの記録のこと、八三年度の活動報告、八四年度の活動予定などが活発に話し合われた。このような会を運営していくというのは結構大変だなあということを強く感じさせられた。

一九九〇年はこの会の二十周年という大きな節目にあたる。このような大事な時にあたり、私は一九九〇年度～一九九一年度のこの会の代表をお引き受けすることになった。これまでのこの会の歴史を考えると、とても荷が重いのであるが、自分にできるだけの努力を精一杯していきたいと思う。

幸いにこれまで二十周年記念事業としての「エンカウンター・グループ・フォーラム——私たちの問いなおしと展望」(一九九〇年五月三日～五日、伊勢原市・天野屋)、「清里プログラム'90」(一九九〇年八月五日～十日)は、各担当スタッフの御尽力で好評のうちに終わった。また『ENCOUNTER出合いの広場』の二十周年記念特集号も本号担当スタッフのお陰でこのような形で発行された。あとはこの会で本を刊行しようという企画が残されているが、多種多様なスタッフの長年の貴重な体験が結集されれば、きっと面白いものができるであろうと期待している。

畠瀬 稔著

「エンカウンター・

グループと心理的成長」

(一九九〇年八月創元社刊)

エンカウンター・グループを日本に紹介し、実践研究の第一人者である畠瀬稔氏が、これまでの研究成果を「エンカウンター・グループと心理的成長」としてまとめ、創元社より出版(五〇〇〇円)されました。

エンカウンター・グループ生成期の歴史は、当時ロジャーズ氏のもとに留学していた畠瀬氏ならではのものです。本書の主要なテーマはエンカウンター・グループの参加者に及ぼす影響を説明することであり、現象学的方法により「多数回参加」、「日米の比較」、「教師における事例研究」などのさまざまな側面から光が当てられています。

エンカウンター・グループに関する研究書として初めての単著でもあり、今後の発展におおいに寄与するものと思われます。



人間性心理学研究第八号発行

特集 からだ、こころ、ことば

その全体の仕組を求めて――

人間性心理学研究には、エンカウンター・グループに関する研究をはじめ、フォーカシング、来談者中心療法、体験過程療法などについて掲載されています。一九九〇年一二月発行の第八号に、次のグループ関係の論文が掲載されています。広瀬 寛子 「看護学教育における集

能的グループ体験の教育的機能」

林 もも子 「コ・ファシリテーター関

係に影響する諸要因」

尾川 丈一・飯島 修治 「エンカウ

ンター・グループにおける『ス

リーテン』導入の試み」

『人間性心理学研究』は、学会誌ですが会員以外の人も講読できます。個人二〇〇〇円、機関三〇〇〇円、送料は五〇〇円です。ご希望の方は、村山正治先生まで連絡下さい。

(〒812 福岡市東区箱崎6-19-1 九州大学教育学部 心理教育相談室気付)

福岡人間関係研究会

『エンカウンター通信』

二二〇〇号記念特集号発行

一九七〇年以来、毎年一〇号ずつ発行されてきた福人研の『エンカウンター通信』が二二〇〇号をむかえるにあたり、三六二頁という大部の記念特集号が一九九〇年八月に発行されました。

福岡人間関係研究会発足当時の生々しい状況や、二〇年間の軌跡などが再録されており、日本における地域密着型エンカウンター・グループの貴重な歴史資料となっています。これまでに掲載されたエッセイや詩、小論、本格的な論文から一〇〇編以上が再録されており、福人研が培ったネットワークの厚みがそのまま伝わってくるものです。

ただ、一般には頒布されておらず、案内だけに終らざるをえないのが残念です。

エンカウンター・グループについて論文を書かれた方は、編集事務局まで抜刷りなど送付いただければ幸いです。この欄で紹介します。

一九九〇年度人間関係研究会 ワークショップの御案内

今年度も残り少なくなりましたが、これから全国各地で三プログラムが開催されます。

神奈川足柄で「学生のためのエンカウンター・グループ」(定員二十名)、滋賀高島で「琵琶湖畔プログラム」(定員四十名)、愛知岡崎「ゲシュタルト・ワークショップ」(定員十二名)と比較的規模の大きいプログラムが用意されています。どうぞご参加ください。

91年度プログラムは、三月にできます。過去二年間の参加者には研究会から送付しますが、宛先不明で返送が多くあります。住所など変更された方はお知らせください。プログラム御希望の方は、72円切手を同封の上、左記までお申し込みください。

▼申し込み先

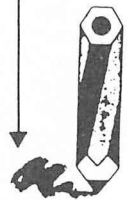
〒145 東京都大田区上池台1-34-26

渡辺方 『人間関係研究会事務局』

☎03-729-3622(20時~23時)

郵便振替番号・東京9-37428

編集だより



■講読申し込み方法

講読は、原則として定期講読制です。年間講読料は、一五〇〇円(送料込み)です。No.13からお申し込みの方は、この年間講読料を、郵便振替か現金書留にて編集事務局宛お送りください。

単品購入希望の場合、送料および購入方法は左記バックナンバーと同じです。

■バックナンバーの購入方法

No.6、7、8、9、10、11は残部があります。ご希望の方は、各号の合計代金に郵送料を加えた金額を、郵便振替か現金書留にて編集事務局あてお送りください。

郵送料は、一冊まで二五〇円、三冊まで三〇〇円、五冊まで三五〇円、八冊まで四〇〇円です。これ以上の場合、連絡いただければお知らせします。

- No.6(一九八七年二月発行) 五〇〇円)
- No.7(一九八八年七月発行) 六〇〇円)
- No.8(一九八九年一月発行) 六〇〇円)
- No.9(一九八九年七月発行) 六〇〇円)
- No.10(一九九〇年一月発行) 六〇〇円)

特集・教育とエンカウンター・グループ

No.11(一九九〇年七月発行) 六〇〇円)

特集・私のエンカウンター・グループ

と観とファシリテーション

■次号の案内・一三号は平成三年七月発行予定、四月末が原稿締切です。

E・Gでの体験、研究レポート、本の感想など、各地の活動や会の紹介など、お気軽に編集事務局までお寄せください。また、本誌についてのご意見・感想もお寄せください。

■編集後記・本号は人間関係研究会二十周年特集号として、会のスタッフの原稿が中心となりました。二十年の歩みをふりかえることで、これから進む方向を切り開ききっかけになれば幸いです。今後とも魅力的な特集を組んでゆきたいと思っています。

■12号編集委員・増田 實・永原伸彦・小柳晴生 (編集事務担当) 小柳欣子

■講読申し込み先・〒761-01 高松市屋島中町383-3・507『人間関係研究会 編集事務局』小柳晴生・欣子

☎0878-4316444

▼郵便振替

振替番号・徳島8-36521

加入者名・人間関係研究会編集事務局

ENCOUNTER

出会いの広場 No.12



発行所 人間関係研究会 1991年1月20日
〒145 東京都大田区上池台1-34-26 (渡
辺方) 編集事務局 〒761-01 高松市屋島
中町383-3・507 (小柳方)
印刷 株式会社 美巧社 高松市多賀町1-8-10

ENCOUNTER

No.12 1991. 1

Celebrating for our 20years of History

CONTENTS

A way of FreedomAndre Auw
Reminiscences and Tasks in Future.....Minoru Hatase
A Report of the Memorial ForumMinoru Masuda

Research Paper

Social Meanings of Encounter Group in These Days.....Haruo Oyanagi

Encounter Essay(9)

Encounter is My Home Land.....Naoko Hatase

Gastalt Therapy Training Program in U. S. A. ;

In this Way, My Fraining Began(3).....Yasuyuki Fukui

A Pilgrimage of Dream(2).....Tosiharu Kasai

Communication Bulletin

My Recollections as it isMiyuki Khono

Encounter Group. Our Society. Myself.....Tadasi Watanabe

Caught in Encounter GroupKatumi Ohsuga

From my RecollectionsMinoru Masuda

A White Butterfly.....Takako Mitou

My Monument ; Waterfall Experience in E. G.Tieko Hayakawa

Relationship with the SocietyKiyomi Hozumi

Our Association and MyselfKazuhiko Nojima

Information

Edited and Published by

JAPANESE SOCIETY FOR THE PERSON-CENTERED APPROACHES

Central Office : c / o Tadasi Watanabe, 1-34-26, Kamiikedai,

Ohtaku, Tokyo, 145 Japan

Editorial Office : c / o Haruo Oyanagi, 383-3 Suite 507,

Yasima Nakamachi, Takamatsu City, Kagawa Prefecture,

761-01 Japan
